

4 報告書抄録データベース・遺跡データベースにおける入力規則

4.1 全般的注意事項

ここでは、遺跡データベースならびに報告書抄録データベースに共通する入力上の規定について述べ、個々のデータベース固有の問題は後に記載する。

使用する文字 本項については、2.4も参照のこと。

まず、前提としてデータベース中の記述であっても、元になる文献の記載内容をそのまま引用する部分においては、ここに述べる使用文字の約束事が適用されない場合がある。

一般的な記述において、英数字と若干の記号については JIS X 0201 が定める範囲の文字、2 バイト文字については JIS X 0208 が定める範囲内の文字が望まれる。遺跡名に用いる文字についても、この範囲を逸脱すると、多くのシステムで表現できない遺跡名が生ずることになる。固有名詞の場合、実際には JIS X 0208 の範囲に含まれない文字を使用している遺跡がいくつかある。Unicode が定める範囲内の文字は使用できるが、下位互換性は保つことができないので注意が必要である。

カタカナは必ず 2 バイト文字を使用し、1 バイトのカタカナは使用を禁止する。

JIS X 0208 の段階で機種依存文字である、丸付き数字、丸付き文字、ローマ数字を含む遺跡名も採用しないことが求められる。代替案は後述する。

JIS X 0208 内の文字であっても、ほかの文字と紛らわしいものは避けるべきである。例えば、

「`」	アクセント	区点番号 01-13
「_」	アンダーライン	区点番号 01-18
「/」	分	区点番号 01-76
「-」	ハイフン(四分)	区点番号 01-30
「—」	ダッシュ(全角)	区点番号 01-29
「-」	負符号・減算記号	区点番号 01-61
「—」	横細線素片	区点番号 08-01
「—」	横太線素片	区点番号 08-12

中には遺跡情報の記述に用いるとは考え難い文字も含んでいるが、データ入力時に、文字の形が似ているために間違えて採用されて気づかないままになっているということがあるので注意が必要である。この字形が似ている文字の数は、Unicode ではさらに拡大しており、よりいっそうの注意が求められる。

データベース検索時に特別な意味を持った文字として扱われることがある、「※」「*」「#」「?」といった文字の使用も望ましくない。

その他の文字の場合 JIS X 0208 が定める範囲内の文字とし、無い場合は範囲内の文字で代替する。考古学用語ではほぼ同じ内容を表すために、伝統的にさまざまな漢字が用いられることがある。これらについての使用の適否は表 18 にまとめている。

英数字は JIS X 0201 の範囲内の文字を使用する。ただし、人名などで JIS X 0201 で表現できない、アクセント付のラテン文字などはすべて表現できる範囲内の文字で代替する。

概数は漢数字で表現する。

例 十数、数百

ローマ数字、丸付数字などの機種依存文字に注意し、用いないようにする。ローマ数字は1バイトの英字を組み合わせて入力し、丸付数字は丸を取る。ローマ数字を英字に分解することにより、文字数は変化する。

例 III、IV

かっこは2バイト文字を使用し、「:」（コロン、1バイト文字、&H3A）「;」（セミコロン、1バイト文字、&H3B）は1バイト文字を使用する。記述要素を区切る場合は、スペースは使用せず、「。」（句点、区点番号0103）「、」（読点、区点番号0102）でつなぐ。スペース文字は、画面や印刷物上でどういったスペース文字であるのかを把握することが困難であり、安易に使用しないことが求められる。

固有名詞などで代替が不可能な文字には「=」（げた記号、区点番号0214）を当てる。読みが判明している場合は、直後にかっこをつけて読みをカタカナで付記する。

「？」は使用せず、記載内容に疑問点がある場合は、その箇所の直後に「か」を挿入する。

例 古墳(円墳か)、輸入陶磁器か、室町か

「等」「他」「外」は「など」「ほか」「ほか」とひらがなで入力する。ただし、平文中では漢字でもかまわない。

「(伝)」の()は不要。

例 (伝) 大刀 →伝大刀。

位取りの「,」は使用しない。これはデータを直接数値として処理する時のためである。

年代は4桁の西暦で入力する。「年、月、日」を使用しても「.」（ピリオド、1バイト文字、&H2E）を使用してもよい。ただし、近世以前は和暦と併記する。

例 2004年11月16日、2004.11.16、741(天平13)年

ふりがなに関する注意

英数字に対するふりがなはJISで規定されていないが、表12の通りとする。ここでは、記号類の読み方については一部しか触れることができない。

長音に対するふりがなは、原則的には「う」とするが、外来語は「ー」（長音記号、区点番号01-28）とする。

例 じどうしゃどう、にちようめ、せんたー、にゅーたうん

記号のふりがなは、表記するものとししないものがある。「～」や「No.」はふりがなを表記するが、「()」「・」などはふりがなに含めず(注)、スペースも空けない。文字ごとの詳細は表12の通り。書籍の副書名であることを表す「ー」（ダッシュ(全角)、区点番号01-29)などの扱いについては、4.2を参照のこと。

注 青森県にみられる()付きの遺跡名は、

例えば、「三内丸山(3)遺跡」は、「さんないまるやまかっこさんいせき」と発音するということなので、例外とする。

表12 入力規則別表 ふりがな

ふりがなあり						ふりがななし	
英字	読み	数字	読み	記号など	読み・《説明》	句読点・記号	説明
A	えい	1	いち	&	あんど	、	読点
B	びい	2	に/にい	No.	なんばー	。	区点
C	しい	3	さん	Loc. ○	だい○ちてん	・	中点
D	でいい	4	よん	、	《片仮名繰返し記号》	:	コロン
E	いい	5	ご	ゞ	《片仮名繰返し記号（濁点）》	;	セミコロン
F	えふ	6	ろく	ゝ	《平仮名繰返し記号》	-	ハイフン
G	じい	7	なな	ゞ	《平仮名繰返し記号（濁点）》	/	スラッシュ
H	えいっち	8	はち	〃	《同じく記号》	'	アポストロフ
I	あい	9	きゅう	全	《同上記号》	“	ダブルクォー テーションマ ーク
J	じえい	0	ぜろ	々	《繰返し記号》	「	鍵括弧
K	けい			ゞ	しめ	()	丸括弧
L	える						
M	えむ						
N	えぬ						
O	おお						
P	ぴい						
Q	きゅう						
R	あーる						
S	えす						
T	ていい						
U	ゆう						
V	ぶい						
W	だぶりゆう						
X	えっくす						
Y	わい						
Z	ぜっと						

※数字と英字が混じる場合は「-」（ハイフン）はふりがなに含めない。

※数字同士が連続する場合「-」（ハイフン）の読みは「の」で入力する。

※平成13（2001）年度など同様の意味の数字が連続する場合、（ ）内はふりがなに含めない。

※（ ）、「」には同様の記号が各種あるが、いずれもふりがなを付さない。

例

遺跡名 けいにじゅうろくいせき

K-26遺跡

ごんげんやまごじゅうごうふん

権現山50号墳

りゅうだんなんばーじゅうごえいせき

流団No. 15A遺跡

かみかすやしめひきにしいせき

上粕屋・ゞ引西遺跡

ひゃくはちのさんいぶつさんぶち

108-3遺物散布地

きんせいむこうまちいせき

近世「向日町」遺跡

書名 みずさわいせきぐんはんいかくにんちようさ へいせいななねんどはつくつちようさがいほう

水沢遺跡群範囲確認調査－平成7年度発掘調査概報－

するがのくにしだぐんがあと

駿河国「志太郡衙跡」

ひらつかしなんばーはちじゅうろくねぎしびいせきはつくつちようさほうこくしょ

平塚市No. 86根岸B遺跡発掘調査書

4.2 報告書抄録データベース入力規則

全体に対する注意

各フィールドの内部では改行を行わない。入力者の環境における画面上あるいは印刷上の見た目はデータそのものと直接の関係はないことに留意する。同一フィールド内で複数表記する場合、他のフィールドでの表記と対応させること。用字・用語については表 18・表 19 も参照。

1 書名ふりがな

ひらがなで入力、表 12 下を参照。英字や数字も、書名を発音したときの音をひらがなで表現した形に入力する。

2 書名

図書に表示されていて、それによって図書が同定識別される固有の名称。先に、「巻次」というフィールドを立てていた、書名に対して同定識別するために与えられている番号あるいは名称に関するものもここに含める。その際「第」「号」「巻」「冊」「集」などは省略し、ローマ数字、漢数字などもすべて1バイトのアラビア数字で表現する。「-」(&H2D)は使用可能。

3 副書名

書名に対してそれを補記するような名称。表記上副書名の両側に付加されていることがある「~」や「-」のような符号は省略し、複数の副書名があるときは、「 」(和字間隔、区点番号 01-01)を使用して区切る。改行は行わない。

4 シリーズ名

いくつかの著作からなる数冊の図書で、各図書にそれぞれの書名があるとき、そのグループ全体につけられた包括的な名称。省略した表記は用いない。

例 北埋調報 →財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書

5 シリーズ番号

シリーズ構成する個々の図書に与えられている番号。「第」「号」「巻」「冊」「集」などは省略する。ローマ数字、漢数字などもすべて1バイトのアラビア数字で表現する。「-」(&H2D)は使用可能。

6 編著者名

著作の種類(「著」「訳」「編」「文」など)は省略する。漢字及びかなで表現される姓名の間にはスペースを入れない。編著者が複数の場合、入力順は奥付に従い、区切りには「/」(斜線、1バイト文字、&H2F)を用いる。ローマ字などで表現される姓名の場合は 姓,名 または 姓,名. ミドルネームのイニシャルのように表現する。英字はすべて1バイト文字を用いる。

例 DiCaprio,Leonardo、Kennedy, John F.

7 編集機関

法人格(法律に基づいて団体に与えられる法律上の人格)を含めた正式名称。(財)、(株)や(独)など

の省略表現は用いない。

8 発行機関

法人格を含めた正式名称。(財)、(株) や (独) などの省略表現は用いない。

9 発行年月日

図書の属する版が最初に発行された年月日（西暦）で、1 バイトの数字 8 桁で表現。年と月、月と日の間は続けて表現する。奥付の日付と一致すること。発行年と月が解っていて日が不明の場合は、不明部分を z で置換する。

例 20031215、201203zz

10 作成機関 ID

編集機関についての情報を記載する。機関に関するデータベースを独立させた場合の参照として使用するが、当面は機関の所在地に該当するコードを入力する。都道府県の機関では、都道府県コード (JIS X 0401) の右に「000」を加えて 5 桁とした数字を用い、市区町村の機関では、都道府県コード (JIS X 0401) と市区町村コード (JIS X 0402) を併用した 5 桁の数字を用いる。大学については、所在する都道府県のコード、遺跡調査会などは所在する市区町村のコードを用いる。編集機関が現存しなくても、報告書発行時点での情報を記載する。

11 郵便番号

編集機関についての情報を記載する。機関に関するデータベースを独立させた場合はそこから参照されるべきフィールドであるが、当面はここに記述する。編集機関が移転などした場合でも、報告書発行時点での情報を記載、3 桁や 5 桁の場合もそのまま記載する。「〒」は不要。

12 電話番号

編集機関についての情報を記載する。機関に関するデータベースを独立させた場合はそこから参照されるべきフィールドであるが、当面はここに記述する。編集機関が移転などした場合でも、報告書発行時点での情報を記載する。

13 機関所在地

編集機関についての情報を記載する。機関に関するデータベースを独立させた場合はそこから参照されるべきフィールドであるが、当面はここに記述する。編集機関が移転などした場合でも、報告書発行時点での情報を記載する。都道府県名から記載し、奥付の表記に従う。丁目番地の表記は、アラビア数字を用い、「丁目」は省略せず、「番地」・「号」は省略して「-」 (&H2D) でつなぐ。

例 2 丁目 9-1

14 報告順位

同一報告書内で複数の遺跡または調査が記載されている場合、当該遺跡が記載されている報告書内での順位。記載遺跡が 1 つの場合は、「1」と入力。

15 遺跡名ふりがな

ひらがなで入力。英字や数字も、遺跡名を発音したときの音をひらがなで表現した形に入力。調査回数については、ふりがなに含めない。遺跡内の地区名については、ふりがなに含める。

16 遺跡名

当該報告書で報告する遺跡に関する名称。第2次調査についての記載であれば、「〇〇遺跡 第2次」と記述する。複数の遺跡名を記載する場合は、かっこを使用せず「/」(&H2F)で区切り、列記する。

ただ、調査次ごとや地区ごとに1レコードを作製することが望ましい。数次にわたる調査を一括して述べる場合は、「〇〇遺跡」と記述し調査回数は記載しない。

17 所在地ふりがな

フィールド18の記述に関する読みをひらがなで記載。英字や数字はそのまま記述する。丁目や番地はふりがなの対象外とする。

18 遺跡所在地

多くの範囲にまたがる場合は、代表的なものを「/」(&H2F)で区切り列記の上、末尾に「ほか」を付加するなど、煩雑な記載は避ける。必ず都道府県名から記載し、市の名前が府県名と同じであっても省略しない。「字(大字、小字)」が抄録に記載されている場合は省略しない。地番は「-」(&H2D)を使って入力する。丁目は基本的に漢数字を用いない。

例 123番地4 → 123-4

例 五丁目 → 5丁目

「付近」「一帯」「〇〇の一部」などの複数の地域を含む表現や「〇〇敷地内」「国有林」「通称〇〇」などの住居表示以外の地名を使用してもよい。「1から3丁目」のような「から」を含む表記は望ましくない。所在地に含まれる地名を列記するか、共通する地名のみ表記し詳細な地名を省略する。

19 市町村コード

遺跡の所在地に関するコード。都道府県コード(JIS X 0401)と市区町村コード(JIS X 0402)を併用した5桁の数字を用いる。複数の市町村にまたがる時は「/」(&H2F)で区切り、列記する。

20 遺跡番号

市町村教育委員会などが定めた遺跡の番号で、市町村ごとに登録される固有の番号。数字以外の文字が含まれることもあるが、数字、英字、「-」(&H2D)などについてはすべて1バイト文字を使用する。

遺跡位置を表す値については、経緯度を採用する。平面直角座標系などによる値は経緯度に変換して記載する。日本測地系(改正前)と世界測地系(測地成果2000)というふたつの座標系による表記があるので、誤りを防止するために別フィールドとする。従って、フィールド21から24まですべてを記述してもよいし、21と22のペアもしくは23と24のペアを記述してもよい。

21 北緯(日本測地系)

「遺跡名」のところで述べている事項に対する代表地の日本測地系による座標。「°」、「′」、「″」を省いて、1バイトの数字で記述し、精度が秒単位以上であれば6桁で入力する。記述が度までの場合、分以下

は 0000 とする。記述が分までの場合、秒は 00 とする。最大の精度は 0.1 秒までとし、その場合は小数点も含めて 8 桁で記述する。

22 東経（日本測地系）

「遺跡名」のところで述べている事項に対する代表地の日本測地系による座標。1 バイトの数字 7 桁もしくは小数点を含めて 9 桁で入力。精度と入力方法は北緯に同じ。

23 北緯（世界測地系）

「遺跡名」のところで述べている事項に対する代表地の世界測地系（測地成果 2000）による座標。精度や入力方法は日本測地系による北緯の場合と同じ。

24 東経（世界測地系）

「遺跡名」のところで述べている事項に対する代表地の世界測地系（測地成果 2000）による座標。精度や入力方法は日本測地系による東経の場合と同じ。

25 調査期間

西暦を用い、1 バイトの数字 8 桁で表現する。開始日-終了日とし、複数の場合、「/」（&H2F）で区切る。開始日と終了日をつなぐのは「-」（&H2D）に限り、空白を入れないこと。

例 20011213-20020214

実際の発掘調査の期間を記載する。同一月内に収まる場合などでも省略せずに全体の表記を繰り返す。

例 20080510-22 →20080510-20080522

ただし、1 日で終了した場合は、単独の日付の表記とする

例 20080912

長期に渡る場合は抄録の記述全体を分割し、長大な表記とならないように留意する。

26 調査面積

平方メートル単位で記載し、単位や位取りの「,」は省略する。調査対象面積ではなく、実際に発掘した面積を記載する。複数の場合、「/」（&H2F）で区切る。

27 調査原因

「個人住宅建設」といったおおよその内容が分かる書き方で記載する。個人名などは記載しない。また、道路建設にあっても道路の名称のような詳細な情報はこのフィールドには記さない。

例 東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 →道路建設

28 種別

複数の場合、「/」（&H2F）で区切る。城跡、集落跡などの「跡」は不要、「城」、「集落」と記述する。

29 主な時代

ここに記載するのは主な時代であり、フィールド 30 で記載する内容の中で重要と考える時代のみを記載すればよい。あまり詳細な表記は避けるが必要に応じて時代の細分は可。「時代」の 2 文字は省略。

例 古墳時代 → 古墳

暦年を記載するときは 鎌倉（13世紀）のように、時代区分の直後にかっこを付けて記載する。明治以後の暦年は和暦を使用せず西暦で記載し、近世以前の和暦は西暦と併記する。

例 1927年、741（天平13）年

世紀を表すのに「C」は使用せず「世紀」とする。

当該遺跡の開始または終了時代が不明の時は 18世紀以降、古墳以前のように記載する。非常に長期間にわたるなど曖昧な表現は避ける。

30 遺跡概要

概要を記載し、あまり煩雑にならないようにする。種別、時代、遺構、遺物間は「-」（&H2D）でつなぎ、各フィールドのなかは「+」（正符号、1バイト文字、&H2B）でつなぐ。種別、時代が変わった場合は「/」（&H2F）で区切る。「弥生から室町」といった長い期間をひとまとめに記載することは望ましくない。時代や遺跡種別が明確でない場合は「不明」や「不詳」を用いる。「不明」はそれに関する情報がまったく分からない場合に用い、「不詳」はそれに関する情報が詳細には分からない場合に用いる。

遺物は基本的に 土器-瓦-石器-金属器-木器-その他 の順で記載する。「枚」「基」「点」などの助数詞は使用しない。破片数や遺物を収納した箱の数は煩雑になるので一般には記載不要であるが、点数・量が特に問題となる場合には記載してもかまわない。遺物の量としては保管を要する遺物全体の重量を記載することを推奨する。

遺構や遺物の検出がないときは「遺構なし」「遺物なし」と記載する。「なし」のみの記述は避け、「？」は使用しない。なお、複雑な表記に関しては4.5を参照のこと。

31 特記事項

遺跡概要の特定の時代などに対応する記載をする時は、どこに関する記述なのかを明確にする。「時代、特記事項。」のように冒頭に特定の時代を付加するとよい。記述は簡潔明瞭を心がけ、発掘の成果や意義を説明するような内容についてはフィールド32で記載する。

32 要約

報告全体に関する事柄をまとめて簡潔に記載する。また、遺跡概要や特記事項の記述が長くなりすぎるものが予想される場合には、まとめてここに記述する方がよい。

4.3 遺跡データベース入力規則

全体に対する注意

基本的にデータ入力は情報源となった資料での記載に従う。

都府県の境界をまたぐ境界文化財を入力する時は、所在する都府県ごとに1レコードを作製することが望ましい。ただ、古墳のように遺跡そのものの範囲が比較的明確な場合は、府県をまたがっていても全体で1レコードとすることもある。市町村の境界にまたがる場合は個別の遺跡では同一遺跡扱いをすることが原則である。古墳群のようなときには、個々の古墳はそれぞれの市町村に所属させ、群全体は複数の市町村で1レコードとする。ただ、明らかに市町村界を越えて広がっているのに片側の自治体では遺跡として登録されていない場合も多く、その場合には登録されている側についてのみデータ入力することになる。

書名などに現れる旧字体の文字は新字体に変更する。ただし、人名や遺跡名などについてはそのままとする。固有名詞などで代替が不可能な文字は「=」（区点番号 02-14）を使用して表現するが、遺構概要、遺物概要はなるべく「=」（区点番号 02-14）を使わずにカタカナで入力する。

例 ケツ状耳飾、ヤリガンナ

用字・用語については表 18・表 19 参照。

1 ID

都道府県コード（JIS X 0401）と市区町村コード（JIS X 0402）を併用した5桁の数字と市町村ID（数字6桁）を合わせた11桁からなる1バイトのアラビア数字。市町村IDが6桁未満の場合はその先頭に「0」を付加し6桁にする。市町村IDに数字以外の文字が含まれている場合などにおいては、このフィールドへの記載は省略する。よって、このフィールドは、遺跡を特定するIDとして機能しているわけではない。

2 市町村ID

市町村教育委員会などが定めた遺跡の番号で、市町村ごとに登録される固有の番号。

数字、英字、「-」（&H2D）などはすべて1バイト文字を使用する。カタカナなどは2バイト文字を用いる。ただ、遺跡番号は数字だけで表現されることが望まれる。複数ある時は「/」（&H2F）を使用して列記する。

3 種別

レコードの性質によってなされた階層的な区分。区分は表 14 の通り。

4 名称（漢字）

複数ある時は「/」（&H2F）で列記し、かっこは使用しない。旧称、異称がある時は、代表的な名称の後ろに「/」（&H2F）を用いて列記し、その他概要に「旧称（通称、俗称）、〇〇遺跡。」と記載する。

支群や地区名、調査次などは、遺跡名の後ろに「」（和字間隔、区点番号 01-01）を空けて記載する。

例 口酒井遺跡 第11次

原典資料に名称の記載がない時は、重複がないような仮称を定めて記載する。仮称は、所在地の市町村名より詳しい部分を取り、〇〇所在包含地（仮称）などとする。このやり方で同一名称が複数できる場合には、〇〇所在 2-1 包含地（仮称）というように全国遺跡地図番号を折り込む。市町村名よりも詳しい所在地が不明の場合は、2-1 包含地（仮称）というように、全国遺跡地図番号を遺跡名とする。〇〇所在包

含地（仮称）と〇〇所在古墳（仮称）であれば、〇〇の一部が同じでもかまわない。また、市町村が異なれば同一名称でもかまわない。市町村合併によって仮称の遺跡名が重複してしまう場合は、名称を変更し、履歴を記録する。

5 名称（かな）

複数ある場合は「/」（&H2F）で列記し、かっこは使用しない。発音通りに記載する。記述については表 12 を参照のこと。

6 所在地コード

都道府県コード（JIS X 0401）と市区町村コード（JIS X 0402）を併用して 5 桁の数字で表示する。複数市町村にまたがる場合、「/」（&H2F）で区切り、列記する。

7 所在地

当該レコードでの記述にかかる遺跡あるいは調査区などの所在地を記す。「付近」、「一帯」、「〇〇の一部」などの複数の地域を含む表現や「〇〇敷地内」、「国有林」、「通称〇〇」などの通常以外の地名を使用してもよい。「字」「大字」「小字」は原則省略する。地番は「-」（&H2D）を使って入力する。「丁目」は省略しない、「〇丁目」の〇にあたる部分は 1 バイトのアラビア数字を用いる。

例 123 番地 4 → 123-4 五丁目 → 5 丁目

「から」を含む表記は望ましくない。所在地に含まれる地名を列記するか、共通する地名のみ表記し詳細な地名を省略する。

例 1～3 丁目 → 1 丁目/2 丁目/3 丁目 本町 1～5 丁目 → 本町

種別が「個別」となっているレコードの場合、このフィールドに列記する小字は 4 つまでとする。5 つ以上記載されている場合は小字を省略し大字までを入力する。ただし、種別が「個別」以外のレコードはこの限りではない。

8 主な時代

遺跡に該当する主な時代をコード（数字 2 桁）で入力する。コードは表 15 の通り。地域に特有の時代区分のコードは表 15 の別表に従う。ただし、典拠文献での記載のままに用いている場合もある。

例 長岡京時代

長期間存続する遺跡は、主な時代を特に取り上げて記載することが望ましい。どの時代について記載するのが適切なかは調査者・執筆者の判断による。

複数の時代を記載する場合は、「/」（&H2F）で区切り、古い順に列記する。時代の判別に疑問点がある場合でも、ここでは「か」は使用せず、特に必要な場合はフィールド 17 以降の概要の欄で記載する。

南北朝時代、戦国時代など該当期が曖昧な時代区分は、典拠文献の区分に従う。

9 指定区分

遺跡が史跡に指定されているものについてコード（数字 2 桁）で入力する。コードは表 16 の通り。その他概要に指定区分と指定年月日を記載する。

例 1982 年 3 月 13 日市指定 など。

遺構や遺物の一部のみが文化財や史跡に指定されているものは、このコードの入力対象外とし、遺構概

要や遺物概要の該当部分それぞれに記載する。

遺跡位置を表す値については、経緯度を採用する。平面直角座標系などによる値は経緯度に変換して記載する。日本測地系（改正前）と世界測地系（測地成果 2000）というふたつの座標系による表記があるので、誤りを防止するために別フィールドとする。従って、フィールド 10 から 13 まですべてを記述してもよいし、10 と 11 のペアもしくは 12 と 13 のペアを記述してもよい。

ここで言う遺跡の位置とは、当該レコードで記述される部分についての代表点の位置であり、種別（フィールド 3）が「集合」の場合はその遺跡群を代表する位置、「個別」の場合はその遺跡を代表する位置、「調査」の場合はその調査区を代表する位置である。

10 日本測地系北緯

遺跡代表点の座標、当該レコードで記述される部分についての値を記す。すなわち、種別が調査の場合であれば、そのレコードで記述している調査位置に関するデータを記述する。度分秒で表すが、「°」、「′」、「″」を省いて数字で入力する。精度は秒ないし 0.1 秒までとする。従って ddmmss ないしは ddmmss.s の表記となる。

秒までの精度が得られていない場合は 0 で埋めて表現する。例えば、情報の精度が度までの場合、分以下は 0000 とし、分までの場合、秒は 00 とする。これにより、全体は 1 バイトのアラビア数字 6 文字か、小数点と小数点以下第 1 位を加えた 8 文字で記述する。

世界測地系から日本測地系へ計算により変換することは原則避ける。

11 日本測地系東経

遺跡代表点の座標、当該レコードで記述される部分についての値を記す。すなわち、種別が調査の場合であれば、そのレコードで記述している調査位置に関するデータを記述する。精度や表記は北緯と同等とする。これにより、全体は 1 倍とのアラビア数字 7 文字か、小数点と小数点以下第 1 位を加えた 9 文字で記述する。

世界測地系から日本測地系へ計算により変換することは原則避ける。

12 世界測地系北緯

遺跡代表点の座標、当該レコードで記述される部分についての値を記す。精度や表記などは日本測地系北緯と同様。日本測地系の座標値から計算により入力することも可。

13 世界測地系東経

遺跡代表点の座標、当該レコードで記述される部分についての値を記す。精度や表記などは日本測地系東経と同様。日本測地系の座標値から計算により入力することも可。

14 時代・遺跡種別

時代（数字 2 桁）と遺跡種別（数字 2 桁）を組み合わせたコード（数字 4 桁）を入力する。コードは表 15 の通り。複数ある場合は、「/」（&H2F）で区切り、古い順に列記する。時代や遺跡種別の判別に疑問点がある場合でも、「か」は付加しない。

15 面積

遺跡面積の実数。平方メートル単位で1バイトのアラビア数字で記載し、単位は省略する。概数の場合は4000というように「0」をつける。位取りのコンマは挿入しない。複数の場合、区切りは「/」(&H2F)。種別を「調査」とする時は、当該調査次の調査面積を入力する。

16 群集遺跡ID番号

群集遺跡とは、古墳群、横穴群、窯跡群などを指し、群全体が遺跡名を持つものを言う。

古墳群と個々の古墳など全体と部分の関係にあるレコードにおいて、下位のレコードに上位のレコードのRecNo.を入力する。上位のレコードを削除する場合は、参照している下位のレコードがないか確認する。

17 遺構概要

常に冒頭に「市 Map2003,」「町報 35,」など出典の略称を記載する。

時代と遺構間は「-」(&H2D)でつなぎ、遺構間は「+」(&H2B)でつなく。時代が変わった場合は「/」(&H2F)で区切る。「跡」は省略する。

例 寺院跡 → 寺院

遺跡の開始または終了時期が不明の時は 18世紀以降、古墳以前 のように記載する。非常に長期間に及ぶなど曖昧な表現は避ける。「第3四半世紀」は使用可だが、世紀を表す「C」は使用不可。

時代や遺構が明確でない場合は「不明」や「不詳」を使用する。「不明」はそれに関する情報がまったく分からない場合に用い、「不詳」はそれに関する情報が詳細には分からない場合に用いる。

「基」「本」「棟」などの助数詞は原則使用しない。

複数の遺構の計測値を入力する時は、高さ(深さ)、長さ(幅)、径などひとつの遺構の計測値は「・」(中点、区点番号01-06)でつなく。

例 後円径 17.6m・高 2.6m、前方幅 28m・長 17m・高 3.6m

<立地>は平野や台地など地形条件について適用し、単に位置を表す記述には適用しない。

<立地>や<現況>、<保存状況>は他の遺構の記述と「。」(区点番号01-03)でつなぎ、これのみの改行はしない。複雑な表記については、4.5を参照のこと。

18 遺物概要

常に冒頭に出典の略称を記載する。時代と遺物間は「-」(&H2D)でつなぎ、遺物間は「+」(&H2B)でつなげる。時代が変わった場合は「/」(&H2F)で区切る。

時代や遺物が明確でない場合は「不明」や「不詳」を使用する。「不明」はそれに関する情報がまったく分からない場合に用い、「不詳」はそれに関する情報が詳細には分からない場合に用いる。

原則としては 土器-瓦-石器-金属器-木器-その他 の順で記載する。

破片の量や箱単位の量の記載は原則として不要であり、「枚」「面」「点」などの助数詞は使用しない。「少量」「多数」「多量」などは原則記載しない。ただし、珍しい遺物が出土しているなど、点数を記載すべき場合もある。

土器の器種などの細分がある時は、細分をカッコに入れて表記する。

例 弥生土器(壺+甕+高杯)。

銘文などの表現で判読不明の文字は、不明の部分は「□」(四角、区点番号02-02)で表す。

19 発掘概要

常に冒頭に出典の略称を記載する。種別を「調査」とする時は、調査期間と調査原因を記載する。

例 <調査期間>20011213-20020214。<調査原因>ダム建設

調査期間は実際に発掘調査を行っていた期間を記述することが望ましい。ただ、あまりに煩雑な記載は避ける。

調査原因は、「建設工事」といった漠然とした表現は避けるが、道路や集合住宅の固有名称や個人住宅の所有者名などは記載しない。

20 その他概要

遺構、遺物、発掘歴に属さない必要事項について記載する。

参考文献の記載体裁は、「著者（编者）「論文名」（『書名』、発行年）」（算用数字を除き、全て2バイト文字）とする。副書名冒頭などにある「一」や「-」のような符号は省略し、空白「」（区点番号01-01）を使用して書名と区切る。発行年順に並べて記載する。

表13 時代・遺跡種別コード表

別 時代	遺跡種	居住集落						生産関連					墓・祭祀						その他				
		集落	洞穴	貝塚	宮都	官衙	城館	交通	窯	田畑	製塩	製鉄	その他	墓	古墳	横穴	祭祀	経塚	社寺	集石	包含地	その他	
		01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
旧石器	10	1001	1002	1003				1007					1012	1013			1016			1019	1020	1021	
縄文	20	2001	2002	2003				2007		2009	2010		2012	2012			2016			2019	2020	2021	
弥生	30	3001	3002	3003	3004			3007		3009	3010		3012	3013	3014		3016			3019	3020	3021	
古墳	40	4001	4002	4003	4004	4005	4006	4007	4008	4009	4010	4011	4012	4013	4014	4015	4016			4019	4020	4021	
古代	飛鳥白鳳	50	5001	5002	5003	5004	5005	5006	5007	5008	5009	5010	5011	5012	5013	5014	5015	5016	5017	5018	5019	5020	5021
	奈良	51	5101	5102	5103	5104	5105	5106	5107	5108	5109	5110	5111	5112	5113	5114	5115	5116	5117	5118	5119	5120	5121
	平安	52	5201	5202	5203	5204	5205	5206	5207	5208	5209	5210	5211	5212	5213			5216	5217	5218	5219	5220	5221
	細分不明	59	5901	5902	5903	5904	5905	5906	5907	5908	5909	5910	5911	5912	5913			5916	5917	5918	5919	5920	5921
中世	鎌倉	60	6001	6002	6003	6004	6005	6006	6007	6008	6009	6010	6011	6012	6013			6016	6017	6018	6019	6020	6021
	南北朝	61	6101	6102	6103	6104	6105	6106	6107	6108	6109	6110	6111	6112	6113			6116	6117	6118	6119	6120	6121
	室町	62	6201	6202	6203	6204	6205	6206	6207	6208	6209	6210	6211	6212	6213			6216	6217	6218	6219	6220	6221
	戦国	63	6301	6302	6303	6304	6305	6306	6307	6308	6309	6310	6311	6312	6313			6316	6317	6318	6319	6320	6321
	細分不明	69	6901	6902	6903	6904	6905	6906	6907	6908	6909	6910	6911	6912	6913			6916	6917	6918	6919	6920	6921
近世	安土桃山	70	7001	7002	7003	7004	7005	7006	7007	7008	7009	7010	7011	7012	7013			7016	7017	7018	7019	7020	7021
	江戸	71	7101	7102	7103	7104	7105	7106	7107	7108	7109	7110	7111	7112	7113			7116	7117	7118	7119	7120	7121
	細分不明	79	7901	7902	7903	7904	7905	7906	7907	7908	7909	7910	7911	7912	7913			7916	7917	7918	7919	7920	7921
近現代	明治	80	8001	8002	8003	8004	8005	8006	8007	8008	8009	8010	8011	8012	8013			8016	8017	8018	8019	8020	8021
	大正	81	8101	8102	8103	8104	8105	8106	8107	8108	8109	8110	8111	8112	8113			8116	8117	8118	8119	8120	8121
	昭和	82	8201	8202	8203	8204	8205	8206	8207	8208	8209	8210	8211	8212	8213			8216	8217	8218	8219	8220	8221
	平成	83	8301	8302	8303	8304	8305	8306	8307	8308	8309	8310	8311	8312	8313			8316	8317	8318	8319	8320	8321
	細分不明	89	8901	8902	8903	8904	8905	8906	8907	8908	8909	8910	8911	8912	8913			8916	8917	8918	8919	8920	8921
不明	90	9001	9002	9003	9004	9005	9006	9007	9008	9009	9010	9011	9012	9013	9014	9015	9016	9017	9018	9019	9020	9021	

表14 遺跡データベースにおける遺跡種別の区分

種別	遺跡名の典型	具体例
集	○○古墳群、○○遺跡群 など	佐紀盾列古墳群、林之郷遺跡群
支	○○古墳群 ◆◆支群 など	横尾古墳群 平尾山支群、洲衛衛跡 東支群
細	群 ○○古墳群 ◆◆支群 △△支群 など	太平寺古墳群 太平寺支群 第2支群
個	別 ○○遺跡、○○古墳、○○城跡 など	足守深茂遺跡、高須1号墳
地	区 ○○遺跡 ◆◆地区 など	平城宮 北方官衙地区、富貴寺遺跡 東地区
調	査 ○○遺跡 第□次 など	鬼虎川遺跡 第22次、山田宝馬古墳群 新山3-1地点
ト	レ ン チ ○○遺跡 第□次 △トレンチ など	長原遺跡 第89-37次 第1トレンチ

表15 時代区分コード

時代区分	コード
旧石器	10
縄文	20
弥生	30
古墳	40
古代	
飛鳥	50
白鳳	51
奈良	52
細分	59
中世	
鎌倉	60
南北朝	61
室町	62
戦国	63
細分	69
近世	
安土桃山	70
江戸	71
細分	79
近現代	
明治	80
大正	81
昭和	82
平成	83
細分	89
不明	90

表16 史跡指定区分コード

指定区分	コード
国指定特別史跡	11
国指定史跡	12
都道府県指定史	13
市町村指定史跡	14

ただし地域に特有の時代区分は以下の表に従う。

北海道

時代区分	コード	備考
続縄文	30/40	弥生から奈良(紀元前後から9世紀)
擦文	59	平安(9から13世紀)
オホーツク文化	59/69	古代から中世(8から13世紀)
アイヌ文化期	79	近世(13世紀以降)

沖縄

時代区分	コード	備考
旧石器	10	
沖縄縄文	(入力せず)	早期、前期、中期、後期に分かれる。縄文から平安
グスク	69	平安末から室町

南硫黄島

時代区分	コード	備考
マリアナ文化期	(入力せず)	縄文から古代くらい

表17 遺跡種別の表記

遺跡種別	コード	該当遺跡例
居住集落		
集	01	城下町、宿場町、環濠集落、高地性集落、居住地、門前町、寺内町
洞	02	岩陰、洞窟
貝	03	貝層
宮	04	条坊、内裏、宮殿、朝堂院、大極殿
官	05	国府、郡衙、軍事(軍団)、代官所、番所、地行所、奉行所
城	06	屋敷、城郭、山城、居館、陣屋、城柵、土塁(城郭関連)、堀、馬場、グスク、チャシ、砦、構居、要害
交	07	街道、道標、橋、関所、一里塚、石畳道、駅家(ウマヤ)、運河、官道、町石
生産関連		
窯	08	登窯、須恵器窯、瓦窯、陶磁器窯、埴輪窯、民窯、藩窯、灰原、物原、窰窯
田	09	水田、条里、畑、畦畔、耕地、井堰、灌漑、用水路、荘園
製	10	塩田、塩浜
製	11	鍛冶、鉄穴流し、たたら、工房(製鉄関連)、製錬炉
その他	12	炭窯、鉱山、採石場、○○生産地、○○原産地、工房、牧場、土塁(牧関連)、野馬土手、玉作跡、鑄造遺跡
墓・祭祀		
墓	13	墳墓、方形周溝墓、石棺、周溝、地下式壙、中世墓、近世墓、廟、やぐら
古	14	群集墳、地下式古墳、積石塚
横	15	横穴墓、地下式横穴
祭	16	板碑、五輪塔、宝篋印塔、配石、銅鐸など祭祀関連の遺物出土地、埋納、磐座、御嶽、塚、首塚、供養塚、十三塚、高塚、磨崖仏、環状列石(ストーンサークル)
経	17	一字一石経塚、埋経
社	18	寺院、神社、国分寺、神宮寺、伽藍、教会
その他		
集	19	集石
包	20	土坑、○○出土地、落とし穴、狩猟場、列石
含	21	(非信仰的な)塚、堤防、台場、狼煙、学校、古戦場、市、歌碑、追分石、捏造

※瓦や土器製造に関する炭窯は「08 窯」。

※祭祀関連遺物の出土地は「16 祭祀」、それ以外は「20 包含地」。

※鉄や鉄製品の製造は「11 製鉄」、それ以外の金属や金属製品の製造は「12 (生産) その他」。

※信仰的な塚は「16 祭祀」、非信仰的な塚は「21 (その他) その他」。

表18 遺跡情報記述に使用される可能性のある同訓異字

※評価は遺跡情報の記述という用例で使用する際に限った評価である。
 ○ この表記は許容できる。ただし最善のものかどうかはわからない。
 △ この表記は避けるべきであるが、事情によっては認めることもある。
 × この表記は許容できないので、別の表記を用いるべきである。
 ※コードは、シフトJIS/Unicodeの順

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
あお	青	90C2/9752	あお（藍・紺・緑などの青い色）	青磁、緑青、群青	○	
	蒼	9193/84BC	あお（草の青い色）、かげりを帯びた感じ、年代を経た感じ	（鏡銘）…蒼龍在左、蒼白、鬱蒼	△	
	碧	95C9/78A7	あおいし（青く美しい石）、青緑色、濃い青色	碧玉製管玉、碧海、紺碧	△	
	縹葱	8C4A/7E70	紺色の絹、濃紺色	（遺跡名）閩縹遺跡	×	
	葱	944B/8471	あお（うす青色）、ねぎ	浅葱、（遺跡名）葱川遺	×	
あか	赤	90D4/8D64	あか（中くらいの濃さの赤色）、裸、空しい	赤色顔料、赤彩装飾、赤土	○	
	紅	8D67/7D05	くれない（べに色、薄あか、桃色）、赤色のさま	紅皿、紅猪口、紅壺	○	
	朱	8EE9/6731	あか、あけ（深赤色）、赤色の顔	朱塗直刀、朱玉	○	
	丹	924F/4E39	あか、に（丹砂の色、浅赤色）	丹塗り、丹砂	○	
	絳	E34B/7D73	あか（濃い赤色、深紅色、黒みを帯びた赤、真紅色）	絳衣	×	
	赧	E6DD/8D67	あか（赤い色）、朝焼け		×	
	彤	EABB/5F64	朱塗り、あか		×	
	艶	/8D69	あか（濃い赤色）、赤い様子		×	
	赭	FA54/8D6C	あか（赤い色）		×	
	赫	8A71/8D6B	あか（赤色の盛んなこと）	（遺跡名）赫夜姫遺跡	×	
	欸	/8D65	あか、あかい、笑い声		×	
	緡	E375/7E09	あかぎぬ、あか（薄い赤色）		×	
	緹	F7CB/7DF9	赤黄色の絹、あか、あけ		×	
	緋	94EA/7DCB	あかのねりぎぬ、あか（目の覚める様な赤い色）	緋袍、（遺跡名）緋牛内9遺跡	×	
赭	E6DE/8D6D	あかつち、あか（赤い色、紫赤色）	赭土	×		
あぜ、うね	畔	94C8/7554	あぜ（耕作地の境）、境界、岸（堤、水際）	畦畔、湖畔、池畔	○	
	畦	8C6C/7566	畑のうね・あぜ、耕地面積の単位、境（区切り、仕切り）	畦畔、畦道、畑畦	○	
	畝	90A4/755D	畑のうね・あぜ、せ（耕地面積の単位）	畝状堅堀、畝溝、畑畝	○	
	※		土を積み固めて作ったあぜやつつみ、穴		×	※「土」へんに「更」
	畛	E15A/755B	田間の道、田間を縫うように連なるあぜ道、境界、田畑	畛域、畛畦	×	
	塍	/584D	水田のあぜ、長いうね、つつみ		×	
	塍	F1F8/57F8	あぜ、国境、道、土地の所属がそこから変わること		×	
	時	E15E/7564	あぜ（耕作地の境）、聖地（祭場）	（遺跡名）祭時A遺跡	×	
	阡陌	E894/9621	あぜ道、田畑のうね、道路	阡陌	×	
	町畦	92AC/753A	あぜ（田畑のあぜ道）、うね（畑のうね）、境（区切り）	町畦	×	
	壟	9AE0/58DF	竜の背のようにうねりくねった丘やうね、あぜ、塚（墓）	壟竈、墳壟、丘壟	×	
	疆	E164/7586	あぜ、境界、限り	（鏡銘）…配像萬疆、疆域、疆畔	×	
	※		田のうね、高いうね、野菜畑		×	※「隣」のこざとへんを「田」へんに換える
	隴	E8AD/96B4	竜のようにうねりくねったうねや丘	（遺跡名）大田大隴遺跡	×	
	畦	F655/753D	田畑のうね、用水溝		×	
畦	F659/754A	田畑のうね、耕作地間の用水路、うね（うねの連なり）、耕作地	範畦、田畦	×		
畦	E165/7587	（田畑）、境		×		

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
あと	痕跡	8DAD/75D5 90D5/8DE1	あと（傷跡、物のあとかた） あと（足跡、あとかた）、ありか （行方）、あととり、迹の異体字	生活痕跡、靱痕、弾痕 遺跡、窠跡、竪穴住居跡	○ ○	
	址	9AAC/5740	もと（残っているもとい、根 元）、場所、区域	城址、工房址、寺院址	△	
	蹟	90D6/8E5F	あと、従う、留まる、跡の別字	奇蹟、史蹟、筆蹟	△	
	迹	E791/8FF9	あと（足跡、歩み、行い、行為の あった後に残された印、功績、昔 事件や建物があつた場所）、跡づ ける、道理、跡の本字	遺迹、王迹、行迹	△	
	趾墟	E6E4/8DBE 9AD0/589F	あしあと、土台 あと（荒れ果てたあと、廢墟）、 大きな丘、底なしの谷、山下の地	城趾 墟落、殷墟、旧墟	× ×	
	あな、 こう	穴	8C8A/7A74	あな（土室、墓穴、底のある穴、 つき抜けている穴、巢窟、洞穴、 水源、窪み、過ち、損失、窓）、 穿つ、狭い	貯蔵穴、洞穴、墓穴	○
孔		8D45/5B54	あな（隙間、深い穴、通り抜けに なっている穴）、通る、空しい、 大きい、深い	穿孔壺、焼成孔、乱掘孔	○	
窩		E27C/7AA9	むろ（あなぐら、岩屋）、窪み、 すみか（別荘）	眼窩	○	
窟		8C41/7A9F	あな・あなぐら（岩屋、ムロ）、 すみか（獣の住む穴）	洞窟、水琴窟、巢窟	○	
坑		8D42/5751	あな（地に掘った穴、洞穴の様に 大きな穴、鉱石などを掘る穴）、 穴埋めにする、谷	坑道、土坑、炭坑	○	
壙		9ADB/58D9	つかあな・はかあな、洞穴、広 野、塚	土壙墓、墓壙、地下式壙	○	
塹穿		9ACD/5879 90FA/7A7F	土を切り取ったあな、ほり あな・つかあな（墓穴）、うがつ	塹壕 穿孔土器、両側穿孔	○ ○	
堀		9678/5800	あな（地下室）、ほり、屈んで穴 をほる	堀切、堀割	○	
窖		E27B/7A96	あなぐら（ムロ、四角なあなぐ ら）、あな、かまど	窖窠	○	
漏※		9852/6F0F	あな、隙間、うがつ、もれる あな（えぐった穴）、うがつ	漏刻台、漏目	△ ×	※「穴」かんむりに 「夬」
※			あな（深く暗い山下の穴） あな（窪んだ穴）、うつろ、甌の 底穴		× ×	※「門」がまえに ※「穴」かんむりに 「圭」
※			大きいあな、静か		×	※「穴」かんむりに 「契」
※			うつろ・あな=科		×	※「穴」かんむりに 「款」
※			穴のさま、うがつさま		×	※「穴」かんむりに 「橋」のつくり部分
坎		9AAA/574E	あな（地面に口をあけている落と し穴、墓穴、神を祭るために掘っ た穴）、窪んだ所	坎弁	×	
竅竇		E281/7AC5 E285/7AC7	人体のあな、穴をあける あな（丸い穴、物を出し入れする 穴）、穴を通す、溝	竅隙、空竅 竇窖	× ×	
阬		FB7D/962C	門の高大な形容、あな（丘にトン ネル式に掘ったあな）=坑、小		×	
阱		/9631	あな（井戸のように掘った落とし 穴）=窞		×	
科		89C8/79D1	あな、うつろ		×	
冪		F87A/81FD	小さな落とし穴		×	
巖		8ADE/5DCC	大岩、あな（洞穴）=巖、崖	巖窟	×	
盞		/928E	刃物にあけたあな（斧の柄を差し 込む穴、矛の下部の穴）		×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
あな、 こう	瀆	EC5C/7006	溝、大きな川、あな		×	
	越	897A/8D8A	あな（瑟の下の穴）		×	
	穿	E276/7A7D	あな（落とし穴）	穿陥、檻穿	×	
	空	8BF3/7A7A	あな（広い穴）、うつろ	空堀、空闲地、虚空	×	
	兌	995B/514C	あな（目・耳・口・鼻の類）		×	
窞	/7A9E	あな（穴の底にある小穴）、横穴		×		
	鑿	E877/947F	あな（耳・目などの穴）、あなぐら、うがつ	開鑿、掘鑿	×	
	嵌	9BC6/5D4C	あな（洞穴）、山の岩	銀象嵌、金銀錯嵌	×	
	窞	F74A/7A75	うつろ、大きい穴		×	
あわび	匏	E57A/86AB	あわび、国字		×	
	鮑	E9B8/9B91	あわび、しおづけ		○	
	鰓	E9D6/9C12	あわび、とこぶし、ふぐ		×	
いわ	巖	8ADE/5DCC	人名漢字、巖の省略形		×	
	岩	8AE2/5CA9	いわ（いわお）、岳、巖の俗字	岩盤、岩陰、石灰岩	○	
	磐	94D6/78D0	いわ（大きくどっしりした石、大きく厚い石）	磐座、磐境	○	
	巖	9BDC/5DD6	けわしい、いわ（いわお、大きな岩）、いわや、がけ		×	
	岳	9BC7/5D52	いわ（いわお）、岩の別体		×	
嵌	9BC6/5D4C	山の深い形容、山のいわ	嵌谷、象嵌	○		
盤	94D5/76E4	おおざら、たらい、大きな岩	盤棺墓、岩盤、円盤	○		
うす	臼	8950/81FC	うす（つきうす、米などをつく道具）、あな	白歯、白玉、石臼、火鑽臼	○	
	磓	E1F4/78D1	うす（ひきうす、いしうす）	磓茶、碾磓	×	
	確	894F/7893	うす（からうす、米や麦などを入れて足または水力で杵を動かしてつく農具）	確屋	×	
	碾	E1F8/78BE	うす（ひきうす、いしうす）	碾茶、石碾	△	
	春	E46D/8202	うすでつく		×	
うち	内	93E0/5185	うち（「外」の対、間、宮中、身内、部屋、腹中）、後ろ	内側、内部、内外	○	
	裏	97A0/88CF	うら、うち（「表」の対、奥、腹中、心）	内裏	○	
	中	9286/4E2D	真中、うち（内側、精神、体、宮中、範囲内）	中央、中世、中心	○	
	衷	928F/8877	うち（中）、真心	折衷	×	
おおがた	大型		形の相似している物のうちで、大きいほう		○	
	大形		他と比べて、形の大きいほう		○	
おか、 つか	堆	91CD/5806	おか（小さな丘、砂丘）	堆積、堆朱、砂礫堆	○	
	岡	89AA/5CA1	おか（山の背、峰、アーチ形の山、小高い所）、坂	円錐形岡	○	
	丘	8B75/4E18	おか（高台、小高い山、自然にできた小山、陵より小さい山）、	丘陵、砂丘、墳丘	○	
	虚	8B95/865A	おか（大きい丘）＝墟		○	
	壙	9ADB/58D9	つかあな・はかあな、つか、野原		○	
	冢	996E/51A2	つか（墓、やしろ、丘）＝塚、山頂、頭（おさ）	陪冢	○	
	塚	92CB/585A	つか（墓）、冢の俗字	貝塚、積石塚、一里塚	○	
	堡	9AC6/5821	おか、堤、砦	堡障、堡跡、城堡	○	
	墳	95AD/58B3	つか（墓）、丘、島、堤防、崖	墳丘、古墳、円墳	○	
	陸	97A4/9678	くが、おか（大きい丘）、高く平らな山のいただき	陸橋、陸田、大陸	○	
	陵	97CB/9675	おか（大きい丘）、つか（墓、みささぎ）	丘陵、天皇陵	○	
	※		おか、大きな塚、丘の本字		×	※「一」の上に「北」
※		おか（前が高く後ろが低い丘、小さい丘）		×	※「鶯」の「鳥」を「土」に換える	
※		おか（前が高く後ろが低い丘）		×	※「鶯」の「鳥」を「山」に換える	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
おか、 つか	阿	88A2/963F	おか（大きな丘陵）、くま、山坂、ふもと、岸	（遺跡名）大田大隴遺跡 丘墟 平城京 島嶼 封土、封丘 阜陵 墳壟	×	
	塙	9AD2/58BA	おか（大地）、岸		×	
	邱	E7B7/90B1	おか=丘、つか（墓）		×	
	隴	E8AD/96B4	うね、おか（竜のようにうねっている丘）		×	
	墟	9AD0/589F	おか=虚、山のふもと		×	
	京	8B9E/4EAC	おか（高い丘、人が築いた丘）、高い、大きい、都		×	
	塚	F1F6/57F0	つか（墓）		×	
	嶼	9BD7/5DBC	島、おか（小山）		×	
	坏	9AAD/574F	おか（低い丘、重なった山、ふつくらと土盛をしたとりで）		×	
	培	947C/57F9	おか、塚		×	
	墩	887E/58A9	平地の小高い丘		×	
	坏	F1E3/576F	おか		×	
	封	9595/5C01	盛り土（積み上げた土）、つか、		×	
	阜	958C/961C	おか（大陸、大きな丘、段のついた土山）		×	
壟	9AE0/58DF	おか（高丘）、うね、あぜ、つか（墓）	×			
垠	F1F1/57CC	つか	×			
おちる	落	978E/843D	おちる（下がる、落ち込む、抜け落ちる）、おとす（攻め落とす、死ぬ）、出来上がる）、捨てる	落込み、落城、陥落	○	
	陥	8AD7/9665	おちいる（窪む、落ち込む、沈む、埋没する、）、おとし入れる、落とし穴	陥没、陥穴、陥落	△	
かぎ	鉷	E84C/93B0	かぎ（錠前を開くかぎ、なべかまの類をかける自在鉤）	門牡 鉤針、銅製鉤、鉤鉤 鍵手文、鍵穴形、自在鍵、金銅製鍵 鉤状脚、鉤形、鉤状鉄器 鑰匣、鑰匙 鈴鍵 銀張勾金	×	
	牡	89B2/7261	おす、かぎ（かぎ穴にかぎを差し込むかぎ）		×	
	鉤	8A62/920E	鉤の俗字		×	
	鍵	8CAE/9375	くさび、かぎ（錠前を差し込んで閉じ開きする金具、錠前、戸締りに用いる道具）、鍵盤		○	
	鉤	E7EA/9264	かぎ（物をかける先の曲がった金属製の道具）、釣針		○	
	鑰	E86F/9470	とぎしの木（上はかんぬきを貫き下は地にさしてとぎしとした、まっすぐな木）、かぎ、じょう（錠前、かけがね）		×	
	鉸	/927B	そる（髪をそる）、かぎ		×	
	楸	/6A5B	くい、かぎ（=鉤）		×	
	丁	98AB/4E85	かぎ（下端を上へ逆に曲げたかぎの形）		×	
	鈴	EF44/9210	すき（からすき）、くさび、かぎ		×	
	勾	8CF9/52FE	まがる、かぎ（先端が曲がり敵をひっかけるのに用いる武器）、かぎじるしをつける		×	
	割	9995/5273	かぎ、かま（鎌）		×	
	かご	桶	89B1/6876		かご（つつ）、木製のおけ、ます	
籠		E2C4/7C60	かご（もっこ、鳥かご、物を入れる竹製の器具、深いかご）、えびら	編み籠、灯籠、印籠	○	
※			かご（葦・竹などで箱形に作りそれに青い絹を被せてなつめや栗などを盛る器）		×	
※			かご（大きなかご）、籃の古字		×	
※			かご（炭かご）、箱		×	
※			魚を捕らえるかご		×	
籠		9855/7BED	籠に同じ	灯籠、印籠	×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
かご	籃	E2D5/7C43	大きいかご（あじろかご、目の細かいかご）、大きいふせご	籃胎漆器	×	
	罩	E3AB/7F69	かご（魚とりかご、竹を高く編んだかご）		×	
	算 笈 筭	8E5A/7B97	かご（竹製の器具）	算盤玉、算木	×	
		ED82/7B72	かご、ふご、飯櫃、箸立て		×	
	筭	F764/7B2F	かご（とりかご、水中に沈めて小魚を捕らえる筒状のかご）		×	
		/7B84	かご（小さい竹かご）、魚を取るふせご、冠の飾り、筏		×	
	笥 篋	ED7A/7B2D	かご（竹かご、かたみ）	鏡篋	×	
		E29E/7B50	かご（食料・書物・衣類などを入れる竹製の四角いかご）、寝台、箱、小さい簪		×	
	篝	E2BE/7BDD	かご（物を負うかご）、ふせご、かがり火	篝火	×	
簽	E2D3/7C3D	かご、札（つけふだ、はりふだ）	題簽	×		
かた	型	8C5E/578B	かた（鋳型、一定の様式、タイプ）、手本	楔型石器、典型	○	
	形	8C60/5F62	かたち（形態、姿、状態、物事の兆し、他に模倣して作ったもの）、形づくる、かたどる	形式、箱形木棺、盾形埴輪	○	
	範	E29B/7B35	鋳型（竹製のかた）、法律、手本、範の別字	銅戈鎔範、同範瓦	○	
	模 范	96CD/6A21	手本、鋳型、まねる	土製模造品	○	
E497/8303	鋳型、のり（つね、かた）、範の簡化字	范鎔	△			
かたい	確 礎	8A6D/78BA	かたい（堅いさま）、つよい	確固、確実 碾礎	×	
	E1F4/78D1	いしうす（ひきうす、すりうす）、かたい（石が堅い）	×			
	慳	9CCA/6173	おしむ（けち、やぶさか）、かたい（固く秘め閉ざす）		×	
	砢 碯	/780E	かたい、石のさま		×	
		/785E	石の音、かたい		×	
	碯 碯 固	F6CD/78BB	かたい（つよい）、碯の別体	固辞、固体	×	
		8CC5/56FA	かため（要害、守り）、かたい（堅固）		△	
	硬 碯 強	8D64/786C	かたい、つよい（強硬）	硬直、硬化面、硬玉	○	
		/7848	かたい（石の堅いこと）、石のさ		×	
	碯 堅	8BAD/5F37	つよい、かたい（やわらかでない、かたくな、堅固）	強固、頑強	×	
		E242/78FD	石地、かたい		×	
	虔	8C98/5805	かたい土、かたい（しっかりした）、かため（堅陣）	堅実、堅緻、堅果類、堅皮	○	
		E569/8654	つつしむ、かたい（かたくとりもつ）	敬虔	×	
	錮	E7FC/932E	ふさぐ（いかける、さえぎりはばむ、とじこめる）、かたい（かためる）	禁錮	×	
	鋼	8D7C/92FC	はがね（ねりがね、鋼鉄）、かたい	鋼玉、鉄鋼、製鋼	×	
	剛	8D84/525B	たちきる、つよい、かたい（物がかたい、意思がかたい）、私心がない	剛健、金剛	×	
	砧	F6BA/77FB	いし、かたい（石のかたいさま）		×	
軻 碩 屯 牢	FA7A/8ED4	はどめ、かたい（牢固）		×		
	90D7/78A9	大きい、かたい		×		
	93D4/5C6F	たむろする、かたい（堅固）	駐屯地 堅牢	×		
	9853/7262	おり、かたい（堅固、堅牢）		×		
かぶと	兜	8A95/515C	かぶと、かぶりもの（帽子）、乗り物	衝角付兜、鎧兜、鉄兜	○	
	甲	8D62/7532	甲羅、皮製のよろい、かぶと	亀甲形陶棺、革綴短甲、装甲	○	
	冑	9968/5191	かぶと、よろい	甲冑、衝角付冑、鎧冑	○	
かまど	爨	E0A4/7228	かまど、さん（おさんどん、飯炊き女）、かしぐ（飯をたく）	炊爨	×	
	竈 竈	8A96/7AC3	かまど	竈形土器 移動式竈、置竈	△	
		E27D/7AC8	かまど（へっつい）、かまどの神、かまどの祭り		○	
	灶	F579/7076	竈の俗字、竈の簡化字		×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
かんざし	簪	E2CF/7C2A	かんざし、こうがい（冠をとめるために髪に挿すもの）	銀簪、骨製簪	○	
	筭	E2A0/7B04	こうがい（束ねた髪や冠をとめるために挿すもの、婦人の髪に挿して飾りとするもの）	筭形骨製品、青銅製筭、骨製筭	○	
	鈿	E7ED/923F	かんざし（造花のかんざし）、黄金の飾り	螺鈿	×	
	揺	9768/63FA	かんざし（揺れかんざし、歩揺）＝揺	歩揺	×	
	釵	E7DE/91F5	かんざし（二本足の髪飾り）＝叉	銀釵子、骨製釵	×	
くつ	靴履	8C43/9774	くつ（革靴）	靴形石斧、木靴、長靴 金銅飾履、草履	○	
		979A/5C65	はきもの（履物の総称、皮製のくつ、糸製のくつ）、行う、踏む		△	
	沓鞆靴	8C42/6C93 E8DF/979C /9778	くつ、鞆の借用字 くつ（革靴） くつ（くつの総称、子供のくつ、草履）	沓脱石、沓形器台	×	
くび	首	8EF1/9996	くび（頭）、はじめ、おさ、刀のつか、重要な点	馬首埋納土坑、獸首神獸鏡	○	
	頸	E8F2/9838	くび（のどくび、首筋）、物の中央の部分	長頸鍬、頸椎	○	
くら	庫	8CC9/5EAB	くら（兵車や武器を入れておくくら、書物や財宝を納めるくら、広く物品をいれておくくら）	貯蔵庫、倉庫、庫裏、神庫	○	
	倉	9171/5009	くら（穀物を入れるくら、米倉、方形のくら、転じて物を入れておくくら（物品をおさめたくわえる所）、隠す、隠れる、蓄える、納蔵の旧字体	倉庫、郡倉	○	
	蔵	91A0/8535	くら（物品をおさめたくわえる所）、隠す、隠れる、蓄える、納蔵の旧字体	貯蔵穴、経蔵、土蔵	○	
	藏	E555/85CF	くら（物品をおさめたくわえる所）、隠す、隠れる、蓄える、納蔵の旧字体	（遺跡名）藏座村遺跡	×	
くるわ	廓	8A66/5ED3	まわり（めぐり、周囲のかこみ）、くるわ（遊女屋の集まった都市とそのまわりを囲む塁壁	外郭、城郭、主郭 帯曲輪、腰曲輪	×	
	郭曲輪	8A73/90ED	まわり（めぐり、周囲のかこみ）、くるわ（遊女屋の集まった都市とそのまわりを囲む塁壁		○	
こしき	甌	ECC6/7517	こしき（底のないこしき、足のあ るこしき）	甌型土器、土師器（甌）	×	
	甌	8D99/7511	こしき（せいろう）		○	
さお	荃	8C73/830E	くき、みき、さお（旗ざお）	竿竹、幢竿支柱	×	
	篙	ED86/7BD9	さお（水さお、ふなざお）		×	
	竿	8AC6/7AFF	さお（まっすぐな竹または木の幹、竹ざお、着物などをかけるさ		○	
	棹	9EA8/68F9	さお（かい、船をこぎ進める道具、竹ざお、三味線の柄）		○	
	棹	/9E85	てこ、さお（はかりざお）		○	
棹	9D7B/6389	ふるう、さお（ふなざお）＝棹、さおさす	○			
しば	芝	8EC5/829D	ひじりだけ、しば（道ばたにはえる雑草の総称、しばくさ）	芝生	○	
	柴	8EC4/67F4	しば（雑木）、まがき（かきね）	柴垣	○	
しろ	白	9492/767D	しろ（白い色、霜や雪のような色）	白磁、白色凝灰岩	○	
	皓	E1A9/7693	しろい（白くきらきらと光のあること）、ひかる	皓々	×	
	縞	8EC8/7E1E	絹（縮緬、白絹）、しろ（つやのある白色）	青磁縞蓮弁文椀	×	
	皙	E1AA/7699	しろい（人の皮膚の白いこと、すっきりと際立って白い）	白皙	×	
	素	9166/7D20	白絹（生地のままの白い絹）、白すき（農具の一種）、くわ（農具の一種）	素衣、素絹、素焼	×	
すき	鍬	8C4C/936C	くわ（農具の一種）、すき	U字形鍬先、石鍬、三叉鍬	×	※「すき」と読む時には用いない
	鋤	8F9B/92E4	くわ（農具の一種）、すき	鋤溝、鋤先、U字形鋤先	○	
	犁	E0B2/7282 E0B3/7281	すき（牛耕の道具） 犁の俗字	犁溝、犁先、唐犁 犁痕、犁先、唐犁	○ ○ ×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
すみ	角	8A70/89D2	かど(尖った所、道の折れ曲がった所)、すみ(ものの周辺の一部)、つの	角度、角柱塔、左前隅角出土	○	
	隅	8BF7/9685	すみ(かたすみ、果て、湾曲して入り込んだ所、尖って突出した部分)、崖、傍ら	隅丸長方形、後方部東隅、一隅	○	
	隈	8C47/9688	くま(水が岸に入り込んでいる所、山の入り込んだすみ)、す	界限、(固有名詞)日隈神社	×	
せん	磚 磚 甌	E241/78DA	しきがわら、煉瓦、丸いさま、引	磚槨式石室、磚仏、瓦磚	○	
		887A/587C	かわら、丸い=團		×	
		E14E/750E	かわら(しきがわら、よく焼いた固い瓦、煉瓦)		×	
たて	盾	8F82/76FE	たて(矢や矛などを逃れる道具)=楯、逃れる	盾形埴輪、石製盾	○	※ほこづくりに「旱」 ※木へんに「非」 ※「跋」の「足」を「盾」に換える
	楯	8F7C/696F	たて(木製の厚みのあるたて)=盾、手すり、机	楯金具	△	
	※		たて(防ぐ為のたて)		×	
	※		たて、筏、楳		×	
	※		たて(物を払いのけるたて)		×	
	干	8AB1/5E72	たて=盾	干戈	×	
	杆	9E57/6746	たて=干、てこ、桿の簡化字	塞杆、槍杆	×	
戟	8C81/621F	ほこ(枝刃の出たほこ)、たて	戟形木製品、劍戟	×		
鹵	EA62/9E75	たて(矢を防ぐ大形のたて)		×		
たま	璋	E0F6/748B	たま(しるしの玉、圭の上辺から下辺の端に対角線状に二分した形にけずりとがらした玉器、一般に玉の意)、ひしゃく	珪璋	×	
	玳 瑁	F5DA/7398	たま(玉の名)、おびだま		×	
		ECBA/74A3	たま(丸くない玉、角のある玉、こまかい玉)、鏡の名		×	
	瓊 瓊	ECBE/74A9	たま(環の一種)		×	
		E0F9/74CA	たま(美しい玉、赤い玉、美しい物のたとえ)、玉の美しい色、さ	瓊玉	×	
	圭	8C5C/572D	たま(しるしのたま、瑞玉)	圭玉、圭璧、圭頭大刀	×	
		8C5D/73EA	しるしたまの名、圭の古字、圭の	珪璋、珪組	×	
	邽	90BD	たま(圭に通じる)		×	
		/5F44	ゆはず、たま(環の一種)		×	
	璇	F5EB/7401	たま(美しい玉=璿、玉に次ぐ美石=璇、赤い玉=瓊)	璇玉	×	
	球	8B85/7403	たま(美しい玉、まり、球形の物体)	球胴甕、球状土製品、琉球、鉄球	○	
	玉	8BCA/7389	たま(質が堅く、光沢があり、装飾等に用いられる宝石や美石の総称、しるしのたま、おび玉)、たま(球形の物、真珠、弾丸)	玉衣、玉冠、小玉、勾玉	○	
	珠	8EEC/73E0	たま(貝類の体内に産する丸い玉、真珠の類、丸い宝石の類、真珠のように丸い粒状をなす物)	珠玉、真珠、数珠、宝珠	○	
	瑤 彈	EAA2/7464	瑤の旧字体		×	
		9265/5F3E	はじきゆみ、たま(はじきだま、はじき弓の石丸、鉄砲のたま)	弾丸、石弾、投弾	○	
	彈 琛 璧	9C5B/5F48	彈の旧字体		×	
ECA2/741B		たから(美しい宝物)、たま		×		
毬	E0F8/74A7	たま(環状で平たく、中央に丸い穴があり、肉の幅が中央の穴の直径に等しいもの、長円形のたま)、美しい玉、美しいもののたまり、けまり、たま(まりのように丸いもの)	璧玉、ガラス製璧	○		
	9F7B/6BEC		毬杖、毛毬	○		

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
たま	丸	8ADB/4E38	まるい、たま（はじきだま、はじき弓のたま、鉄砲のたま）、鈴	丸玉、丸瓦、丸皿	○	
	瑤	E0F4/7476	たま（美しい玉、美しい石、玉のように美しいなどの意）、草の名	瑤台	×	
たまき	環	8AC2/74B0	たまき（瑞玉の名、輪状で中央に円い穴があり、穴の半径と周囲の肉の幅と等しい玉、円くて極まらない意）、わ（輪状のもの、耳環・指輪類）	耳環、金環、素環頭大刀	○	
	釧	8BFA/91E7	うでわ、くしろ（ひじまき、手巻、ひじにまいて帯びた輪形の装飾品）	貝製釧、銅釧	○	
だん	壇	9264/58C7	だん（土を盛り上げて築いた高い所、平地より一段高くつくった場所）	基壇、土壇、戒壇	○	
	段	9269/6BB5	長さの単位、わかち（くぎり、しきり）、だん（きざはし、だんだん）	段丘、階段	○	
つか	茎	8C73/830E	くき、つか（刀の柄、くきの形をした器の柄）	有茎尖頭器、長茎式鉄鏃	○	
	把	9463/628A	取る（手に持つ）、つか（にぎり、とつて）	把頭、把手、鹿角製把	○	
	柄	95BF/67CA	え（器物のとつて、斧のえ）、つか（刀剣の手でにぎるところ）、がら（もよう）	柄部、鍬の柄、柄頭金具	○	
	櫛	EBBA/6B1B	つか（刀剣の手でにぎる部分）、え（柄）		×	
	杷	9466/6777	櫛の別体、さらえ、えぶり、つか（え、にぎり）	杷頭	×	
つき	杯	9474/676F	さかずき、さかずきを入れる籠	高杯	○	
	坏	9AAD/574F	つき（物を盛る器）、低い丘、まだ焼かない土器、壁	高坏	△	
	盃	9475/76C3	さかずき、杯の俗字	盃状穴、漆器盃	×	
つくえ	机案	8AF7/673A 88C4/6848	つくえ＝几、ひじつき つくえ（安定した机、脚付きの四角で低い台）、膳（足のある食膳）	机天板、組合式机、多足 組合式案、刳貫式案	○	
	且	8A8E/4E14	つくえ（まな板、祭りに供え物をのせる台）		×	
	几	997B/51E0	ひじかけ（脇息）、つくえ（脚が伸び安定しているつくえ、脚付きの四角で高い台）＝机	几脚、几案、几硯	×	
	檯卓	/6AAF 91EC/5353	つくえ＝卓 つくえ（テーブル、しょく）＝棹	座卓、食卓、円卓	×	
	つくる	製 作 創 造	90BB/88FD 8DEC/4F5C 916E/5275 91A2/9020	つくる（器物を造作する、文辞を選び述べる、菓をつくる） つくる（こしらえる、書をあらわす、創作する、耕す） つくる（初めて作りだす、初めて起こす） つくる、なす（こしらえる、建てる、行う、営む、仮作する）	製作、製造 作業、製作 創作、創造 改造、製造	○ ○ ○ ○
つち	椎 槌 鎚	92C5/690E 92C6/69CC 92C8/939A	つち（物を打ちたたく道具） つち（物を打ちたたく道具） つち（かなづち）	頭椎大刀、脊椎 木槌、横槌、石槌 鉄鎚	○ ○ ○	
つつみ、 せき	堰	8981/5830	せき（せきとめる）	堰堤、堰水、井堰	○	
	関	8AD6/95A2	せき（関所、税関）、かんぬき	関門、関所	○	
	堤	92E7/5824	つつみ（土手、堤防）、糸底、とどこおる	堤防、堰堤、防波堤	○	
	※		土を積み固めて作ったあぜやつつみ、穴		×	※「土」へんに「更」
	※		つつみ（小さな堤）、平らな地、つつみ（貯水池）		×	※「土」へんに「貝」
	城	/583F 8DE3/962A	さか、つつみ（土手、沢障）、山の脇、高い丘	（遺跡名）峯の阪遺跡	×	
	阪		つつみ（積み重なった土）		×	
	垣 垂	FA97/5765 8872/57F5	つつみ（土をつき固めたつつみ）、硬い土、盛り上げた土（丘）		×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
つつみ、せき	培塘陂	947C/57F9 9384/5858 E898/9642	つつみ（土手）、おか、塚 つつみ、池、ため池 さか（山坂）、つつみ（水の流れ 出ぬように土を高く築いたもの、 土手、波打ち際の堤）	培堆 石塘	×	
	隄	EF7B/9684	つつみ（大きな土手）、岸、橋、 かぎり		×	
	梁	97C0/6881	つつみ（土手、水の兩岸を抑えて せきとめたやな）、橋、飛び石	梁状遺構、梁津、橋梁	×	
	防	9668/9632	つつみ（堤防、張り出たおか）、 ふせぎ（守り）	防塁、堤防	×	
	埒	9ABD/57D2	つつみ（土手）、低い垣、崖		×	
	つば	鐔	92D5/9354	つば（刀の柄と刃の間にはさみ握 り手を守る環）、刃（刀剣の刃、 きっさき、みね）	鉄鐔、象嵌鐔	
	鐔	E85C/9414	つば（刀剣の刀身と柄の境にはめ て手を保護する金具）、つかがし ら	鉄鐔、金銅製鐔	△	
つぼ	壺	9AE2/58FA	つぼ（口がすばみ腹のふくれた容 器）、瓢箪	茶壺、須恵器壺、金壺	○	
	埴壺	9AAE/5769 92D9/58F7	つぼ（土器の名） つぼ、壺の別体	埴壺、脚付埴 （遺跡名）壺山遺跡	△ ×	
	鞆	E8D6/9779 E8DB/9786	とも とも（弓を射るとき、左の肘につ けるまるいあてがわ）、国字	丸鞆 丸鞆、鞆形埴輪	×	
とりで	営塞	8963/55B6 8DC7/585E	いとなむ、とりで（陣屋、まも へだてる、とりで（辺境の小 城）、国ざかい	営倉、陣営、露營 要塞、堅塞、城塞	×	※「とりで」の読みで は用いない
	寨	9ECB/5BE8	羊の住むところ、まがき、とりで	寨柵	×	
	砦	8DD4/7826	まがき、とりで（敵を防ぐために 築いた小城）	城砦、物見砦	○	
	塁	97DB/5841	とりで、つむ（かさねる）	石塁、土塁、防塁、塁段	△	
	なかば	半	94BC/534A	なかば（半分、中央、途中、最 中）、かたはし（きれはし）	半分、後半	
	中央	899B/592E 9286/4E2D	なかば（中央、真っ最中） なか（中央、中間、中頃、中 途）、内側	中央、未央 中央、中間	△ △	
	片	95D0/7247	なかば（半分）、片一方、きれ		×	
はい	佩	98CE/4F69	おびだま（大帯につける飾り 玉）、おびる、めぐらす	佩玉、魚佩、魚形佩飾、 腰佩	○	
	珮	E0E1/73EE	おびだま、佩の省略形		×	
はた	旗	8AF8/65D7	はた（熊と虎を描いた赤い旗、軍 の大将がたてる旗）、しるし（標 識、看板）	旗旌、旗塚	○	※「旃」の「丹」を 「勿」に換える ※「旃」の「丹」を 「會」に換える
	幢	9BEF/5E62	はた（はたぼこ、軍の指揮に用い る旗）、おおい、とぼり	幢竿、石幢、宝幢	△	
	幟	9BEE/5E5F	のぼり・はた（目印の旗）、しる し（標識）	旗幟	△	
	※		はた・のぼり（州里にたてる印 旗）=勿		×	
	※		はた（赤地の指図旗）=旃		×	
	旃	F38E/65C2	はた（のぼり竜とくんだり竜を描い た赤色の旗で旗さおの上端に鈴を つけたもの、諸侯が神に幸福を求 め民衆に命令する時にたてる	竜旃	×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
はた	旌	9DD5/65CC	はた（旗さおの先に旌（ボウ：からうしの尾）をつけ、それに五色の羽毛をたらした旗、天子が士気をはげますのに用いる、鈴をかけた旗）、はたの総称	旗旌	×	
	旃	9DD1/65C3	はた（柄の上端を曲げて垂れ下げた目印用の赤旗、士衆を招集するのに使う）、とぼり	旃旌、旃旒	×	
	旒	/65D0	はた（亀と蛇を描いて赤いはたあしを長く引いた黒い旗、郷遂の長がたてる旗、柩に先行する旗）		×	
	常旆	8FED/5E38	はた（日月・黄竜を描いた旗）	大常旆旌、征旆	×	
		9DD2/65C6	はた（黒地に雑色の帛で縁飾りをし末端は裂けて燕の尾に似た旗、多くの将帥が軍前にたてて一軍の標識とする）、はたあし（旗につける帛）、とぼり		×	
	幡	94A6/5E61	のぼり・はた（広がる布切れ）、	幡竿、石幡	×	
		9DD7/65DB	はた（旗の本幅のもの、幡胡、長く垂れ下げた旗）、はたの総称、ふきながし		×	
	旗	/65DF	はた（隼を描いた赤旗、行軍の時にたてて急ぎの意を表す、大勢で持ち上げる旗）		×	
勿	96DC/52FF	はた（昔大夫や士がたてて人民を召集した旗で赤と白と半々のもの）		×		
はたけ	畑 畠 圃	94A8/7551	はた、はたけ（陸田、焼畑）	畑地区画、ぶどう畑 島畠 圃場整備、圃畦、田圃	○	
		94A9/7560	はた、はたけ（乾田）、国字		×	
		95DE/5703	はたけ（菜園、果樹園）、庭園、野原、畑仕事		×	
	甫	95E1/752B	はたけ（野菜畑）	（遺跡名）楠甫城跡	×	
ばん	板	94C2/677F	いた（薄く平らな木、薄く平らにしたもの）、版木、札	板石積石室、板碑	○	
	盤	94D5/76E4	たらい、大皿（鉢や皿や物を載せる平らな台）、大きな岩	円盤状製品、岩盤、基盤	△	
	磐	94D6/78D0	岩（大きく厚い石）、広大なさま	磐座、磐棺、磐石	×	
ひさし	庇	94DD/5E87	おおう（かぼう、守り助ける）、おおい（かぶせおおう物）、ひさし	庇石、土庇	×	
	廂	9BF9/5EC2	ほそどの（渡り廊下）、ひさし	廂付建物、四面廂付掘立柱建物	○	
ひつぎ	槨 棺 柩	9ED8/69E8	そとひつぎ（外棺）、槨の別字	堅穴式石槨、粘土槨、木 木棺、土器棺、石棺 柩室、霊柩車	○	
		8ABB/68FA	ひつぎ（死体を直に納める箱）		○	
		9E6C/67E9	ひつぎ（かばねを納めた木製の棺）		△	
	椁 椁 椁	/69E5	ひつぎ（小さいひつぎ）	椁柩	×	
		9E96/6901	ひつぎ（棺を納める外箱）		×	
		F48B/6AEC	ひつぎ（なきがらを納める一番内側のひつぎ）		×	
櫛 宮	F488/6ADD 8B7B/5BAE	ひつ（蓋のついた箱）、ひつぎ ひつぎ（椁宮）、宮（大きな建物、住居、宗廟、天子・後のいる所）	椁宮	×		
喪	9172/55AA	ひつぎ、死ぬ、失う、滅びる	喪失、喪屋、喪柩	×		
ひのき	桧 檜	954F/6867	檜の俗字	桧扇 檜皮葺、檜扇	△	
		9E77/6A9C	ひのき		○	
ふくげん	復元		元のものの形が判明しているものを再び製作する		○	
	復原		想像でそのものを再び製作する		○	
ふね	舟 船	8F4D/821F 9144/8239	ふね（函谷関より東、渡し船、小ふね（函谷関より西、木を穿って造ったふね、川の流れに沿って上下するふね）	舟形石棺、丸木舟 船つき場、船形埴輪、船舶	○ ○	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
ふね	※		ふね、はしけ（短くて底の深い船）		×	※「舟」へんに「又」
	艦	E47D/825F	ふね（いくさぶね、短い船）	艦	×	
	艦	8ACD/8266	いくさぶね（軍船）	軍艦、潜水艦	×	
	杭	8D59/676D	ふね（渡し船）、くい	木杭、杭列	×	
	航	8D71/822A	ふね、船橋（船を並べて作った橋）、もやいぶね	航行、渡航、曳航	×	
	舩	F881/8221	ふね、船の俗字		×	
	艘	E47A/8258	ふねの総称	（遺跡名）丸艘原たたら	×	
	艇	E47C/825A	ふね（小船）		×	
	艇	92F8/8247	ふね（小船、ボート）	艇身、漕艇場、鉄艇	×	
	舶	9495/8236	おおぶね（海を渡る船）	舶載鏡、舶来、船舶	×	
	舩	E475/822B	ふね、筏、もやいぶね、船乗り	舩船、舩い綱	×	
	舩	F887/8246	ふね（海を行く船）、ふなべり		×	
へら	篋	E2C2/7BE6	へら、けすじたて、かんざし、細かい歯の櫛、うえ（竹製の漁具）	篋描沈線文様、篋状石斧、篋子	○	
	篋	95CD/7B86	へら、篋の俗字	篋状石器、篋書土器	×	
ほう	包	95EF/5305	孕む、つつむ（おさめる、取り囲む、ひとまとめにくくる、許す）、つつみ、台所	包含地、包括	○	
	庖	95F7/5E96	台所、料理人、膳部、つつむ	石庖丁、出刃庖丁	○	
	炮	E07B/70AE	あぶる（丸焼きにする）、物を包んで焼く	炮烙	×	
	焙	E084/7119	あぶる（ほうじる、火気にあてて熱する）、ほいろ（焙炉）	焙焼炉、焙炉、焙烙、手焙	○	
ほこ	戟	8C81/621F	ほこ（木の幹のように枝刃の出た矛、車上で用いる）、たて	戟形木製品	○	
	矛	96B5/77DB	ほこ（長い柄の先端に両刃をつけた兵器、枝刃の1つあるほこ＝戈、枝刃の2つあるほこ＝戟）	銅矛、直刀矛、鉄矛	○	
	※		ほこ（木製の矛）		×	※「木」へんに「爿」
	※		ほこ（矛の類、長い矛）		×	※「矛」へんに「良」
	※		ほこ（周尺で一丈八尺あって馬上で持つ矛）＝槊		×	※「矛」へんに「肖」
	戈	9CF7/6208	ほこ（片側に枝の出たほこ、柄の先端に両刃の刃を横につけ主として人の頸をかけたいたりたたいたりして殺傷する兵器）	石戈、銅戈、木戈	○	
	戛	9CFC/621B	ほこ（長い矛、首を切り落とす）		×	
	鏑	FB67/9417	ほこ（むちに似た武器、刃がなく4つの稜があるもの）		×	
	梳	F3DE/6845	ほこ（短い矛）		×	
	苜	F0B4/5C70	2つの枝のあるほこ＝戟		×	
	槊	9ECC/69CA	ほこ（柄の長い矛、周尺で一丈八尺の矛、敵を迎え撃つ木製の柄のある矛）		×	
	鏃	/93E6	ほこ（短く小さい矛、細長い矛）		×	
	鏃	EF4F/92CB	ほこ（手矛、鉄製の小さな矛）、金属を薄く延ばした刃物		×	
	鋌	/9212	ほこ（手矛、小さな矛）		×	
	鋒	964E/92D2	ほこさき（きっさき、先鋒）、つるぎ	鋒部、鋒先、広鋒銅鉞	×	
	爿	9F74/6BB3	ほこ（つえほこ、竹を束ねて作り八角で刃がなく周尺で一丈二尺）		×	
	鉞	9667/927E	きっさき、ほこさき、ほこ（刀剣の先端）	鉞先、鉄鉞、銅鉞	○	
ほり	濠	8D8A/6FE0	ほり（城の廻りに巡らしたほりで水を溜めたもの）	周濠、環濠	○	
	塹	9ACD/5879	土を切り取ったあなやほり	塹壕、塹濠	○	
	堀	9678/5800	ほり（地を掘って作った川や池）、穴、掘る	堀切、堀割、塹堀	○	
	溝	8D61/6E9D	みぞ（地面を長く掘りくぼめて水を通すもの、土地を区画するために掘削したもの、用水路、堀割、谷川）、溝を掘る	溝渠、有溝石庖丁、排水溝	○	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
ほり	壕	8D88/58D5	ほり（城を取り囲むほりで水がないもの）、地に掘った穴や溝	塹壕、周壕	△	
	漆	8EBD/6F06	ほり（城池）、うるし	漆喰、漆器	×	
	湟	9FD2/6E5F	ほり（城池）、窪地、冷たい水	濠湟、周湟	×	
	隍	E8A4/968D	ほり（城のからぼり）、谷	隍池、二条大路北端の隍	×	
	壑	9AD9/58D1	からぼり、溝=叡、谷、穴、岩屋	壑谷、溝壑	×	
洫		9FA7/6D2B	ほり（城の周囲に巡らしたほり）、溝（田間の用水の通る道）、小川、水門		×	
	閼	EF71/95AC	からぼり、高い門		×	
ます	桶	89B1/6876	おけ（木製のおけ）、かご、ます	曲物桶	×	
	斗	936C/6597	容量の単位、とます（十升をいれるます、量器の総称）、ひしゃく、柱上のますがた	三斗甕	×	
	升	8FA1/5347	容量の単位、ます（一升ます）、ますめ	木樋升	○	
	舛	9143/821B	ます（升の俗字）、背をそむけあつて寝る、そむく、まじる（いりまじる）、はぐ	溜舛	×	
	桝	9691/685D	ます=桝、国字	排水桝、木製桝	○	
	枡	9E65/67A1	ます=升・桝、物の容量をはかる道具、ますのように四角い形をしたもの、枡席）、国字	枡形、溜枡、木製枡	×	
	量	97CA/91CF	はかる（重さ・かさ・長さなどをはかる）、ながさ（物の長短）、ます（桝）、ますめ		×	
また	股	8CD2/80A1	また（足のつけね、ふたまたになっているもの）、もも（大腿部）	雁股、二股鋏	○	
	又	8DB3/53C9	はさむ、また（ふたまた）、さすまた、かんざし	又状角製品、又鋏、三叉形土製品	○	
	又	9694/53C8	みぎ、また（さらに、ふたたび）	雁又鋏、二又鋏	×	
みがく	研	8CA4/7814	みがく、とぐ（けずりみがく、すりおろして細かくする）	研磨、薬研堀	○	※ぼくのように「果」
	砥磨	9375/7825	砥石、とぐ、みがく	砥石、転用砥具 磨製石鏃、磨崖仏、研磨	○	
		9681/78E8	みがく（砥石でとぐ、石をすりみがく、物事に励む）、する（こする）=摩		○	
	※		みがく（打ち磨いて立派にする、研ぎ納める）、たたく		×	
	瑩研	E0F0/7469	みがく、鮮やかに輝く		×	
		/7811	すりくたく、みがく		×	
	磋	E1F6/78CB	みがく（とぎみがく、やすりなどで骨・角などをこする、学問・道徳などをみがく）	切磋	×	
	鑢	E86A/9460	みがく、金属を溶かす、消す、する	鑢鑢	×	
	琢	91F4/7422	みがく（玉をみがく、うつ、彫る、徳・技などをみがく、修飾する）	琢磨	×	
		9680/6469	みがく（手でこする）=磨	摩耗陶器	×	
磨	E86B/9462	みがく（やすりでこする）、やすり、する	磨製鉄	×		
礪	E1E8/792A	みがく、とぐ、あらと（キメの荒い砥石）	礪砥	×		
みどり	碧	95C9/78A7	みどり（青緑、濃い青色）、青石	碧玉製管玉、碧海、紺碧	○	
	緑	97CE/7DD1	みどり（黄と青の間色）、みどり色の絹	緑泥片岩、緑釉、閃緑岩	○	
	翠	9089/7FE0	みどり（萌黄、はなだ色、青黄）	翡翠釉	×	
むしろ	席	90C8/5E2D	むしろ（ござ、しきもの）、座席	（遺跡名）席田青木遺跡	×	
	蓆	E4EC/84C6	むしろ	縄蓆文、蓆目圧痕文	○	
	筵	E2A5/7B75	むしろ（竹製のむしろ）、しきものの総称）、座席	筵編石	×	
	蓆	E4AD/839A	むしろ（草や竹などで編んだしきもの）、座席、酒宴の会場	蓆編器	×	

よみ	漢字	コード	意味	用例	評価	備考
やかた	館	8AD9/9928	たち(旅館、役所や貴人の家などの大きな建物、仮の寓居、貴賓や官吏の宿舎)	城館、別館、公館	○	
	塹館	/58C2 8ADA/8218	との(館、屋形)、建物の土台 やかた、館の俗字	(遺跡名)別所館	× ×	
やまと	倭	9860/502D	やまと(昔中国人が日本を呼んだ称)	倭製鏡、倭寇、倭国	○	
	和	9861/548C	やまと(日本)=倭	和製鏡、和製、和音	○	
やり	槍	9184/69CD	やり(竹やり、木やり)、草を刈る道具	槍先、石槍、竹槍	○	
	鎗	9199/9397	やり、鉄砲、鐘の音、かなえの一種、酒を入れる器	鎗砲、鉄鎗	×	
	鎗	96F8/9453	やり、国字、鎗の俗字	鎗砲、鎗形石器	×	
ゆき	鞞	E8D4/976B	うつぼ、ゆぎ(やいれ、つぼやなぐい、箭室、矢を入れる器具)	鞞形埴輪、鞞金具	○	
	鞞	E8D5/9771	鞞の誤字		×	
	鞞	9078/976D	うつぼ、ゆぎ、鞞の誤用	鞞形埴輪	×	
よろい	冑	9968/5191	よろい、かぶと	冑形埴輪、冑	○	
	甲	8D62/7532	よろい=鎧、甲羅	冑甲、短甲、挂甲	○	
	鎧	8A5A/93A7	よろい(金属製の鎧)	頸鎧、肩鎧、大鎧	△	
	鉄	9353/9244	よろい、武具	鉄甲、鉄衣	×	
りゅう	竜	97B3/7ADC	たつ、りゅう、龍の省略形の俗字	竜泉窯、盤竜鏡	○	
	龍	97B4/9F8D	たつ、りゅう	竜泉窯、三角縁盤龍鏡	○	
ろ	炉	9846/7089	囲炉裏、火鉢(手あぶり、足あぶり)、香炉、爐の俗字	炉壁、石組炉、香炉	○	
	爐	E86D/946A	ろ、囲炉裏、火床、火鉢(手あぶり)、香炉、鞞、酒甕、やすり、炉の本字	爐煙、野爐	×	
	鈿	E86E/9229		鈿付鍛冶、高殿鈿	×	
	爐	E0A2/7210	炉の本字	レンガ造火爐	×	
わ	環	8AC2/74B0	わ(輪状のもの)、たまき、巡る、巡らす	素環頭直刀、耳環、循環	○	
	輪	97D6/8F2A	わ(車のわ、車輪のうち特に外周の円弧の部分、丸い形)、車、巡る、代わる代わる、外郭、吊り輪	輪郭、埴輪、貝輪	○	
	環	E861/9436	かなわ(金属製の輪)、指輪、耳環	環座金具、銅環、馬環	×	
	鏝	FB52/9371	わ(金属製の輪)、いたがね		×	
わん	椀	986F/6900	わん(漆塗りの木製の食器)、小鉢、わんに盛った料理	山茶椀、茶椀、汁椀	○	※「怨」のあしを「瓦」に換える ※「皿」の上に「喬」
	碗	E7FA/92FA	かなまり(金属製のわん)、はかりの皿	銅碗、佐波理碗	△	
	碗	9871/7897	わん	須恵器碗	△	
	※		わん(小さな椀)		×	
	※	E14D/750C	はち、わん	(遺跡名)大迫甌穴群	×	
	盃	E1B1/76C2	わん(小さいわん、小さい鉢、深いわん)、茶碗、甕、瓦器		×	
	盃	F1F5/57E6	はち、わん、たらい	飯盃	×	
	盃		わん(食物を盛る小鉢で陶磁器製のもの)		×	
	盃	ECE8/76D4	はち、わん、かぶと		×	
	盃	8882/58CE	土笛、はち、わん		×	
	盃	92B6/929A	わん、鍋、農業に使う大きなすき	銚子、長柄銚子	×	
	盛	90B7/76DB	はち(物を盛る器)、盛り物、わん	盛矢具、目盛板	×	
盃	ECE6/76CC	わん、はち(小さい盃)	酒盃	×		

表19 語句の置換例

よみ	変更前	変更後	備考	
あ	アゴ骨	顎骨		
	浅いくぼみ/浅い凹み	凹み (浅型)		
	アックスシェイプドツール	斧形石器		
	あづまや/東屋	四阿		
	当て具	あて具		
	孔窯/穴窯	窖窯		
	窖/穴倉	穴蔵	「窖」はあながらの意もあるが、遺跡データベースではあながまの意を重視する。	
	穴蔵状堅穴	堅穴 (穴蔵状)		
	雨落ち痕跡	雨垂痕跡		
	雨落ち	雨落	送り仮名不要	
	雨乞い	雨乞	送り仮名不要	
	編み籠/編み籠/編籠	編籠	送り仮名不要	
	編みもの/編み物	編物	送り仮名不要	
	編み物石	編物石	送り仮名不要	
	或いは	あるいは		
	アワビオコシ	アワビ起こし		
	暗渠排水/暗渠排水施設/暗渠排水路/暗渠水路	暗渠	暗渠は溝形であり、排水するもの。	
	い	いかり/イカリ/錨	碇	
		池状の凹み	池か	
		石囲い	石囲	送り仮名不要
石囲い炉		石囲炉	送り仮名不要	
石切り場		石切場		
石屑		剥片		
石組み雨落溝		石組雨落溝		
石組護岸		護岸石組		
石組流路		石組溝		
石積み		石積	送り仮名不要	
石積み堤防/石積みの堤防		石積堤防	送り仮名不要	
石蓋土坑		石蓋土壙	「坑」は穴、「壙」は墓穴。	
板梯子		一木梯子		
一石一字塔		一字一石塔		
一本柱堀		掘立柱堀		
糸繰り		糸繰	送り仮名不要	
犬走		犬走り	送り仮名必要	
イモ貝形土製品		イモガイ形土製品		
いろり/イロリ/居炉裏		囲炉裏		
岩蔭		岩陰		
岩陰古墓		岩陰墓		
岩座/磐坐		磐座		
印籠		印籠		
う		ウエットストーン	砥石	
		ウォーターセパレーション	水洗選別	
		浮き	浮子	
		受け皿	受皿	送り仮名不要
		渦巻き	渦巻	送り仮名不要
		打ち欠き石錘	打欠石錘	送り仮名不要
		打ち込み式柱根	打込柱根	送り仮名不要
	内磨き砥石	内磨砥石	送り仮名不要	
	畝堀/角堀	障子堀		
	馬出	馬出し	送り仮名必要	
	馬乗馬場/馬乗場/乗馬場/馬かけ場	馬場		
	埋もれ木	埋木	送り仮名不要	
	漆濾し	漆漉し		
	漆塗り	漆塗	例 漆塗り木椀など→漆塗木椀	
	え	柄鏡型住居	柄鏡形住居	
X字状石器		十字形石器		
えな壺		胞衣壺		

よみ	変更前	変更後	備考	
え	えぶり/エブリ	→ 柄振		
	エロンゲイティドフレイク	→ 縦長剥片		
	円形落込み	→ 落込み (円形)		
	円形貯蔵穴	→ 貯蔵穴 (円形)		
	煙硝蔵/焰硝蔵	→ 火薬庫	固有名詞の場合は変更しない。	
	円錐状裂痕	→ コーン	かたかなで使われることが殆どなので、日本語表記ではなくかたかなで表記する。	
	園池	→ 苑池		
	煙道付き炉穴	→ 煙道付炉穴	送り仮名不要	
	エンドスクレイパー/エンド・スクレイパー/剥片搔器	→ 搔器		
	お	横穴墓	→ 横穴	
覆屋柱穴/柱状ピット/柱穴類/柱穴様ピット/柱穴土壙/柱穴 (ピット)/掘立柱柱穴/掘立柱痕/掘立柱建物の柱穴/掘立柱穴		→ 柱穴		
大型木樋/大型木樋施設		→ 木樋 (大型)		
大きな凹み		→ 凹み (大型)		
大ハソウ		→ 大型ハソウ		
大礫		→ 大型礫		
大椀		→ 大形椀		
置き竈/置き竈		→ 置竈	送り仮名不要	
落込/落ち込み/落込み層/落込み (地形)/包含層落込み/地形の落込み/湿地状落込み/陥没坑/陥没/落込み状溝/溝状落込み/溝状の落込み		→ 落込み	「落ち」は別物。落込みは「ち」不要、落ちは「ち」必要。	
落とし穴/落とし穴/しし穴/シシ穴/猪穴/猪落とし/鹿穴/陥穽		→ 落とし穴		
お歯黒		→ 鉄漿		
オハジキ		→ おはじき	外来の要素がないためひらがな表記。	
オロシガネ/下ろし金/卸金		→ おろし金		
卸皿		→ おろし皿		
か		貝殻敷き道	→ 貝殻敷道	送り仮名不要
		貝殻状裂痕	→ リング	
		階段付き	→ 階段付	送り仮名不要
		階段付貯蔵穴	→ 貯蔵穴 (階段付)	
		外堤部	→ 外堤	
		廻廊	→ 回廊	
		火炎	→ 火焰	
		郭/廓	→ 柳	ひつぎに関する遺構の場合のみ。
		郭状地形/郭状遺構/郭状平坦部	→ 郭か	
		角錐石器	→ 角錐状石器	
		攪乱	→ 攪乱	「攪乱」が本字。
		架橋/掛橋	→ 懸橋	
		加工跡のある礫	→ 加工痕のある礫	
	飾り馬	→ 飾馬	送り仮名不要	
	飾り玉	→ 飾玉	送り仮名不要	
	飾り鉢	→ 飾鉢	送り仮名不要	
	火葬土坑、火葬土壙	→	どちらも可。火葬するための穴の場合、土坑。火葬骨を埋めている場合、土壙。	
	型打ち貨幣	→ 型打貨幣	送り仮名不要	
	鯉木/葛緒木/勝男木/堅緒木	→ 堅魚木		
	花頭窓/火灯窓	→ 火頭窓		
	鐘つき堂/鐘突堂	→ 鐘楼		
	壁材据え付け痕跡	→ 壁材据付跡		
	窯詰め	→ 窯詰	送り仮名不要	
	窯柳	→ かまど塚		
	かまど/カマド/竈	→ 竈		
	竈塚	→ カマド塚		
	竈付き住居	→ 竈付住居	送り仮名不要	
	かまぼこ形/かまぼこ型/蒲鉾形/蒲鉾型	→ カマボコ形		
	空堀状の凹み	→ 空堀か		

よみ	変更前	変更後	備考	
か	軽石製石製品	→ 軽石製品		
	川/落込み(河川)/開析流路/流路/旧河道/旧河川	→ 河川	〇〇川といった固有名詞ではなく、遺構要素としての「川」の場合に限る。	
	皮袋状提瓶	→ 皮袋形提瓶		
	厠/便所/雪隠	→ トイレ		
	川原石	→ 河原石		
	瓦落ち	→ 瓦落	送り仮名不要	
	カワラケ	→ かわらけ		
	瓦敷き	→ 瓦敷	送り仮名不要	
	灌漑用溜池施設	→ 灌漑用溜池		
	ガンギ玉	→ 雁木玉		
	環濠式の平城	→ 平城(環濠式)		
	かんざし/カンザシ	→ 簪		
	鉄穴流しの溝	→ 溝(鉄穴流し)		
	カンナ流し	→ 鉄穴流し		
	かんぬき	→ 門		
	輪鈴	→ 環鈴	「環」は輪状のもの、「輪」は特に車輪の	
	き	既掘穴	→ 既掘坑	
		木組み	→ 木組	送り仮名不要
		城戸	→ 木戸	
蓋/緻蓋/華蓋		→ 衣笠		
キノコ形土製品		→ きのこ形土製品		
基部調整ナイフ		→ 基部調整ナイフ形石器		
木枕		→ 木製枕	材質の後に「製」を付加する。	
木枅		→ 木製枅	材質の後に「製」を付加する。	
旧石器接合資料		→ 石器接合資料		
教会建物		→ 教会		
居館推定地		→ 居館か		
切り子玉		→ 切子玉	送り仮名不要	
切通し		→ 切通	送り仮名不要	
キログラム		→ kg	1バイトの英小文字を使用する。	
キロメートル		→ km	1バイトの英小文字を使用する。	
均正唐草文		→ 均整唐草文		
く		喰違い	→ 喰違	送り仮名不要
		くさび/クサビ	→ 楔	
		くちなし玉/山梔玉/山杷玉	→ 梔玉	
		口はげ/口禿げ/口剥げ	→ 口禿	
	クビレ	→ くびれ		
	くぼみ/窪み/凹み状遺構	→ 凹み		
	くぼみ石/エクボ石/窪石/窪み石/凹石石器	→ 凹石		
	組み合わせ/組合せ/組み合わせ/組み合せ/組み合せ	→ 組合	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
	組み梯子	→ 組梯子		
	倉/庫	→ 蔵	金蔵、穴蔵、土蔵など。倉庫、正倉はそのまま	
	グラム	→ g	1バイトの英小文字を使用する。	
	くりぬき/くり抜き/くり貫き/割りぬき/割り抜き/割り貫き	→ 刳抜	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
	庫裡	→ 庫裏	裡は裏の俗字。	
	くり舟/刳り舟/刳船	→ 刳舟		
	郭/廓/郭面	→ 曲輪	城郭の一部を示す場合のみ。腰曲輪、出曲輪	
	け	袈裟襷紋	→ 袈裟襷文	
		けずりだし/けずり出し/削りだし/削出し/削り出し	→ 削出	遺構についてのみ。送り仮名不要。一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。
		獣型土偶	→ 獣形土偶	
		建材/建築材/構造部材	→ 建築部材	
こ	コア	→ 石核		
	コアツール	→ 石核石器		
	壕	→ 濠	塹壕などの熟語ではなく、「壕」一文字で遺構要素となる場合に限る。	
	後期旧石器	→ 旧石器	旧石器は後期以外の場合のみ時期を詳述す	
	耕作ピット列	→ 耕作痕		
	格子叩き	→ 格子タタキ		
	楮蒸し	→ 楮蒸	送り仮名不要	

よみ	変更前	変更後	備考	
こ	濠状凹み	→ 濠か		
	敲打石/敲打具	→ 敲打器		
	護岸遺構	→ 護岸施設		
	小口	→ 虎口	城郭に関する遺構の場合のみ。	
	虎口状の凹み	→ 虎口か		
	黒曜石	→ 黒曜石		
	柿板	→ こけら板	果物の「かき」と「こけら」は別漢字につき、混用注意。	
	柿経	→ こけら経	果物の「かき」と「こけら」は別漢字につき、混用注意。	
	甑形土器	→ 甑		
	小堅穴/小型堅穴	→ 堅穴（小型）	方形堅穴、円形堅穴、袋状堅穴はそのまま。	
	木の葉	→ 木葉		
	古墓/古墓地/墓地	→ 墓	遺構要素としての「墓地」に限る。 <現況>などに記載されている現代の墓地はそのまま。	
	古墓群	→ 墓群		
	子持ち〇〇	→ 子持〇〇	送り仮名不要。子持ハソウ、子持勾玉など。	
	古窯	→ 窯		
	五輪塔の水輪	→ 五輪塔（水輪）		
	五輪塔部分/五輪塔部位	→ 五輪塔部材		
	こんろ/焜炉	→ コンロ		
	さ	さいころ/賽子	→ サイコロ	
		細石核母型/細石核原形	→ 細石核ブランク	
細石刃削片/スポール		→ 削片		
サイドスクレイパー		→ 削器		
サイドブレード		→ 背つき石刃	この場合、「つき」はひらがな表記。	
魚叩き棒		→ 魚叩棒		
削平面		→ 削平地		
柵列ピット群		→ 柵列群		
酒作り		→ 酒造		
下げ砥石		→ 下砥石	送り仮名不要	
ささら		→ ササラ	ササラ土台、ササラ桁など。	
砂鉄置き場		→ 砂鉄置場		
砂鉄採掘土坑群		→ 砂鉄採掘坑群		
砂鉄充填柱穴		→ 柱穴（砂鉄充填）		
讃岐石		→ サヌカイト		
ざる/箆		→ ザル		
三角形の把手		→ 把手（三角形）		
三段造		→ 三段築成		
散布地		→ 包含地		
し		シガラミ	→ しがらみ	
		しきみ石/シキミ石/榎石/榎石	→ 敷居石	
		仕切り堤	→ 仕切堤	送り仮名不要
		試掘溝/試掘坑	→ トレンチ	
		猪追い土手	→ 猪土手	送り仮名不要
		地震痕/地震の痕跡	→ 地震痕跡	
		地すべり	→ 地滑り	
		自然地形の落込み	→ 落込み（自然地形）	
	地鎮祭跡/地鎮め	→ 地鎮		
	しっくい	→ 漆喰		
	耳トウ	→ 珥トウ	トウはかたかな表記。	
	芝垣	→ 柴垣		
	洩瓶	→ 尿瓶		
	地覆掘え付け痕跡	→ 地覆掘付跡		
	杓子型木製品	→ 杓子形木器		
	地山落込み	→ 落込み（地山）		
	地山整形面/地山整形部/地山整形	→ 地山整形		
	蛇文岩	→ 蛇紋岩		
	重廓文	→ 重郭文		
	集礫/遺物集中礫	→ 礫集中		
	朱彩/朱塗り	→ 朱塗	送り仮名不要	
	珠数玉	→ 数珠玉		
	朱の痕跡	→ 朱痕跡		
	朱の層	→ 朱層		

よみ	変更前	変更後	備考	
し	城郭/館/居館	→ 城館	遺構種別及び遺構要素としての城郭は城館に変更。一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
	将棋の駒	→ 将棋駒		
	使用痕を有する剥片	→ 使用痕のある剥片		
	少々	→ 少量		
	焼土を伴う落込み	→ 落込み（焼土を伴う）		
	信仰遺跡/祭祀様遺構	→ 祭祀か		
	神社建物	→ 神社		
す	推定回廊	→ 回廊か		
	推定金堂	→ 金堂か		
	素焼きの壺	→ 素焼壺	送り仮名不要	
	水門樋板	→ 水門樋		
	須恵器大甕埋設土坑	→ 埋甕（須恵器（大甕））		
	スクレーパー/スクレイバー	→ スクレイパー		
	筋磨き砥石	→ 筋砥石		
	鈴雲珠	→ 鈴付雲珠		
	すだれ/スダレ	→ 簾		
	ステムドピース	→ 有茎石器		
	ストーン・リタッチャー	→ ストーンリタッチャー		
	脛当/臍当て	→ 臍当	送り仮名不要	
	スプーン/匕	→ 匙		
	隅切り	→ 隅切	送り仮名不要	
	炭焼窯/炭焼き窯	→ 炭窯		
	素焼き香炉	→ 素焼香炉	送り仮名不要	
	スラグ/スラッグ	→ 鈇滓	鈇物の種類が断定できるときは「鉄滓」「ガラス滓」などとする。	
	すり石/擦り石/磨り石/磨き石/擦	→ 磨石		
	せ	整地層	→ 整地土	
		青銅製鏡/青銅製の鏡	→ 銅鏡	
背負梯子		→ 背負子		
石材採掘穴/石器採掘土坑		→ 石材採掘坑		
石材抜取り		→ 石材抜取	送り仮名不要	
石樋遺構		→ 石樋		
セッキ		→ 炆器		
石器製作場/石器製作所跡		→ 石器製作跡		
背部二次加工素刃石器		→ 背付石器		
せん/セン/甄		→ 磚		
線刻入り礫/線刻ある礫		→ 線刻礫		
センチメートル		→ cm	1バイトの英小文字を使用する。	
前方後方周溝墓		→ 前方後方形周溝墓		
前方後方墳丘墓		→ 墳丘墓（前方後方形）		
そ		惣/総	→ 構	城郭に関する遺構の場合のみ。
	象眼	→ 象嵌		
	搔器細石核	→ 細石核状搔器		
	草創	→ 草創期	時代細分名は省略しない。	
	草堂建物	→ 草堂		
	ぞうり/ゾウリ/草履	→ 草鞋	鞋はわらじの意、履ははきものの意。	
	礎石据え付け穴	→ 礎石据付穴	送り仮名不要	
	礎石立堀	→ 礎石立柱堀		
	そば猪口	→ 蕎麦猪口		
	ヒスイ釉	→ 翡翠釉	通常は鈇物名はかたかな表記であるが、翡翠釉は漢字。	
	ソロバン玉	→ 算盤玉		
	た	太鼓堀	→ 二重堀	
台付き〇〇		→ 台付〇〇	送り仮名不要。台付甕、台付杯など。	
タイマイ		→ 玳瑁		
楕円形落ち込み		→ 落込み（楕円形）		
楕円状封土/楕円状の封土		→ 楕円形封土		
多郭並列		→ 多郭（並列）		
打割器/片面礫器		→ チョッパー		
高杯形土器		→ 高杯		
たがね/タガネ		→ 鑿		
竹製の暗渠		→ 竹製暗渠		
竹製篋		→ 竹篋		

よみ	変更前	変更後	備考	
た	竹箕	→ 竹製箕		
	竹やぶ/竹藪/竹藪	→ 竹林		
	打製大型石器	→ 大型打製石器		
	たたき/タタキ	→ 三和土		
	たたき石/ハンマー/ハンマーストーン/叩き石/叩石	→ 敲石		
	叩き板	→ 叩板	送り仮名不要	
	叩き甕底部	→ タタキ整形甕（底部）		
	三和塗り水溜	→ 三和塗水溜	送り仮名不要	
	タタラ/鏝/踏鞴/踏鞴	→ たたら		
	たたり	→ タタリ		
	タツ堀/縦堀	→ 竪堀		
	竪穴状落込み/縦穴	→ 竪穴		
	竪堀状の凹み	→ 竪堀か		
	竪穴様落込み	→ 竪穴か		
	建物部材	→ 建築部材		
	谷状落込み	→ 谷か		
	茶毘跡	→ 火葬跡		
	茶毘墓	→ 火葬墓		
	田船	→ 田舟		
	玉石護岸	→ 護岸玉石		
	玉石敷き	→ 玉石敷	送り仮名不要	
	玉砂利敷き	→ 玉砂利敷	送り仮名不要	
	玉つくり/玉造り/玉造/玉創り/玉作り	→ 玉作	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
	玉磨砥石	→ 玉砥石		
	ため池/溜め池	→ 溜池	送り仮名不要	
	溜升	→ 溜枳		
	溜升	→ 溜枳		
	タモ網	→ たも網		
	打瘤	→ バルブ		
	褶/撓	→ たわみ		
	段石	→ 踏石		
	段落ち/溝状段落ち	→ 段		
	単郭式山城	→ 山城（単郭式）		
	鍛造薄片	→ 鍛造剥片		
	段築	→ 段築成		
	単独ピット/小穴	→ ピット		
	ち	地下式坑	→ 地下式壙	「坑」は穴、「壙」は墓穴。
		地下式横穴墓/墳墓（地下式横穴）/古墳（地下式横穴墓）	→ 地下式横穴	
		地業痕	→ 地業	
		受け皿	→ 受皿	
		柱穴状落込み/柱穴状穴/柱穴状小竪穴	→ 柱穴か	
		柱穴状の落込み	→ 落込み（柱穴か）	
		柱根の残る大型柱穴	→ 大型柱穴（柱根が残る）	
		中世初頭	→ 中世初	
		中世代	→ 中世	
		中世末期	→ 中世末	
		沖積低地	→ 沖積低地	
		柱列土坑	→ 柱穴列	
		中椀	→ 中型椀	
		長方形の凹み	→ 凹み（長方形）	
貯蔵用竪穴		→ 竪穴（貯蔵用）		
チョッピングツール/両面礫器/両刃打割器		→ チョッピングツール		
つ		ツインケン	→ ベック	
		柄頭	→ 把頭	刀のツカは「把」を使用する。
		突き錐	→ 突錐	送り仮名不要
		杯付き瓶	→ 杯付瓶	送り仮名不要
	造りだし/造り出し/造出し/作り	→ 造出	古墳に付設された「突出部」に限る。	
	つくり付け/つくり付/創り付け/創り付/創りつけ/造りつけ/作りつけ/造り付け/造り付/作り付け/土取り工事	→ 造付	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
		→ 土取	送り仮名不要	

よみ	変更前	変更後	備考	
つ	土取状の凹み	→ 土取か		
	ツチノコ/鎚の子/槌の子/槌ノ子	→ つちのこ		
	土盛り	→ 土盛	送り仮名不要	
	つば/ツバ/鐺	→ 鐺		
	坪地業	→ 壺地業		
	つまみ付きナイフ	→ つまみ付ナイフ		
	つるべ/ツルベ	→ 釣瓶		
て	手あぶり形/手焙り形	→ 手焙形	送り仮名不要	
	梯郭式山城	→ 山城（梯郭式）		
	手づくね	→ 手捏		
	鉄滓捨て場	→ 鉄滓捨場	送り仮名不要	
	鉄てい	→ 鉄テイ		
	デボ/カシエ/キャシエ/スポット/ 遺物集積（デボ）	→ 遺物集中		
	デンティキュレイト/鋸歯状石器	→ 鋸歯縁石器		
	殿主/天主/天守閣	→ 天守		
と	盗掘穴	→ 盗掘坑		
	盗掘坑状の凹み	→ 盗掘坑か		
	洞穴	→ 洞窟		
	陶磁	→ 陶磁器		
	陶磁製品	→ 陶磁器製品		
	銅鐸の舌	→ 舌（銅鐸用）	舌の用途は（ ）に入れる。	
	銅鐸の鋳型	→ 銅鐸鋳型		
	堂坊/堂宇	→ 堂		
	燈明	→ 灯明		
	砦壘/堡/取手/取出	→ 砦		
	燈籠/燈籠/灯籠	→ 灯籠		
	土器破片	→ 土器	破片であることを特に記述する場合に限る。	
	土器片の群集する落込み	→ 落込み（土器集中）		
	特殊焼土堅穴	→ 堅穴（特殊焼土）		
	独立天守/独立式天守/独立型天守	→ 天守（独立式）		
	突線紐	→ 突線鈕式		
	凸帯	→ 突帯		
	土どめ/土止め/土どめ板/土留め 施設	→ 土留	送り仮名不要	
	土橋状地形/土橋状の高まり	→ 土橋		
	とびら/トビラ	→ 扉		
	土墳墓	→ 墳墓		
	トラピース	→ 台形石器		
	トラピゾイド	→ 台形様石器		
	ドリル/錐形石器	→ 石錐	石製の場合のみ。	
	土塁基底部	→ 土塁（基底部）		
	土塁状隆起/土塁状高まり	→ 土塁か		
	トロトロ/トロトロ石器/異形部分 磨製石器	→ 異形局部磨製石器		
	ドングリ貯蔵穴/ドングリピット/ ドングリの貯蔵穴	→ 貯蔵穴（ドングリ）		
	蜻蛉玉	→ トンボ玉		
	な	内耳焙烙鍋/内耳付焙烙	→ 内耳焙烙	
		ナイフシェイブドツール	→ ナイフ形石器	
		中	→ 中期	時代細分名は省略しない。
長岡京時代		→ 長岡京期		
長屋建物		→ 長屋		
なつめ玉/ナツメ玉		→ 棗玉		
鉛玉		→ 鉛製玉	材質の後に「製」を付加する。	
縄張り		→ 縄張	送り仮名不要	
に	西ノ郭	→ 西の郭	「の」はひらがな。	
	西ノ丸	→ 西の丸	「の」はひらがな。	
	握り槌	→ 握槌	送り仮名不要。ただし、旧石器時代の石器の 場合はハンドアックス。	
	丹塗り	→ 丹塗	送り仮名不要	
	ニワトリ型土製品	→ 鶏形土製品		
ぬ	抜き取り痕跡	→ 抜き取り痕跡		
	布築き	→ 布築	送り仮名不要	

よみ	変更前	変更後	備考	
ぬ	布堀/布掘	→ 布掘り		
	塗り籠め	→ 塗籠	送り仮名不要	
ね	ねずみ返し/鼠返し	→ ネズミ返し		
	根巻き石	→ 根巻石		
	根巻き土	→ 根巻土		
	燃糸文期	→ 燃糸文式期		
	粘土留め	→ 粘土留	送り仮名不要	
	粘土柳底部	→ 粘土柳（底部）		
	の	ノコギリ	→ 鋸	
ノッチ		→ 抉入石器		
ノッチドスクレイパー		→ 抉入削器		
登葛石		→ 耳石		
登り窯		→ 登窯	送り仮名不要	
登り口		→ 登口	送り仮名不要	
野馬除け土手		→ 野馬除土手	送り仮名不要	
のろし/烽火		→ 狼煙		
のろし台/烽火台		→ 狼煙台		
は		陪塚	→ 陪冢	
	バイフェイス/両面加工石器/両面体石器	→ 両面調整石器		
	白円礫	→ 白色円礫		
	白礫	→ 白色礫		
	はけめ/ハケ目/刷毛目	→ ハケメ		
	土師器焼成土坑	→ 土師器焼成坑		
	柱跡/柱痕	→ 柱痕跡		
	弾み車	→ 弾車	送り仮名不要	
	鉢形土器/鉢型土器	→ 鉢		
	はちのす石/蜂の巣石	→ 蜂巣石		
	跳ね上げ口縁	→ 跳上口縁	送り仮名不要	
	歯刷子	→ 歯ブラシ		
	針描き土器	→ 針描土器	送り仮名不要	
	張り出し部	→ 張出部	送り仮名不要	
	破礫	→ 礫片		
	晩	→ 晩期	時代細分名は省略しない。	
	半円状両面加工石器	→ 半円形両面調整石器		
	版築層/版築様遺構/版築状遺構	→ 版築		
	ひ	樋板	→ 樋	
		ピエスエスキュー/ピエス・エスキュー	→ ピエスエスキエ	
低い堅穴式石槨		→ 堅穴式石槨（低い）		
ピット小群		→ ピット群		
人歯/人の歯		→ ヒト（歯）		
火縄銃の弾		→ 火縄銃の玉		
ビュリアン/ビュラン/グレイバー/彫刻刀/彫刻刀形石器		→ 彫器		
火除け土手		→ 火除土手	送り仮名不要	
檜皮		→ 檜皮		
ビン		→ 瓶		
ふ		ファイアーピット	→ ファイヤーピット	
	フイゴロ/吹子	→ 鞆	鞆羽口も同様。	
	複郭式山城	→ 山城（複郭式）		
	複合天守/複合式天守/複合型天守	→ 天守（複合式）		
	不正楕円形堅穴	→ 堅穴（不正楕円形）		
	蓋付碗揃い	→ 蓋付碗揃	送り仮名不要	
	仏像片	→ 仏像破片		
	佛堂	→ 仏堂		
	不定型石器/不特形石器	→ 不定形石器		
	不定型	→ 不定形		
	ぶどう畑	→ ブドウ畑		
	船入/舟入り	→ 船入場		
	舟入石垣	→ 船入場石垣		
	舟材	→ 船材		
	舟底形石核	→ 船底形石核		
	舟着き/舟着	→ 船着		

よみ	変更前	変更後	備考	
ふ	舟べり/船縁	→ 舟縁		
	舟出土地	→ 船出土地		
	舟だまり	→ 船だまり		
	踏石	→ 段石		
	踏み分け道	→ 踏分道	送り仮名不要	
	不明石器/加工石器/用途不明石器	→ 石器		
	フラスコピット	→ フラスコ状ピット		
	プラント・オパール	→ プラントオパール		
	フレイクコア	→ 剥片石核		
	フレイクチップ/フレイク・チップ/チップ/フレイク/フレイク/薄片/細片/石器剥片/剥片状石器	→ 剥片		
	フレイクツール	→ 剥片石器		
	ブレード/ブレイド	→ 石刃		
	分銅型製品	→ 分銅形製品		
	分銅式土偶	→ 分銅形土偶		
へ	平行叩き	→ 平行タタキ		
	兵舎建物	→ 兵舎		
	平方キロメートル	→ 平方km	1バイトの英小文字を使用する。	
	平方センチ	→ 平方cm	1バイトの英小文字を使用する。	
	平方メートル	→ 平米	1バイトの英小文字を使用する。	
	へそ皿	→ へそ皿		
	ベニガラ	→ ベンガラ		
	篋状両面加工石器	→ 両面調整篋状石器		
	扁平	→ 扁平		
	扁平な割石	→ 扁平割石		
	ほ	ポイント	→ 尖頭器	
		方形周濠墓	→ 周濠墓（方形）	
		方形単郭/単郭方形構造/単郭方形	→ 単郭（方形）	
		方形プラン	→ 方形	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。
包蔵地/分布地		→ 包含地	一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。	
砲台		→ 台場	明治維新までの砲台については台場、それ以降については砲台。	
包丁		→ 庖丁		
宝塔塔身		→ 宝塔（塔身）		
ほうろく/焙烙鍋/炮烙		→ 焙烙		
ボートシェイプドツール		→ 舟形石器	船底形石器は「船」、舟形石器は「舟」。	
墨書須恵器		→ 墨書土器（須恵器）		
墓坑		→ 墓壙		
ほこら/禿倉/社寺祀		→ 祠		
放射状列痕		→ フィッシャー		
掘立柱建物の柱		→ 柱		
掘立柱建物堀		→ 掘立柱堀		
骨錐		→ 骨製錐	材質の後に「製」を付加する。	
掘りかた		→ 掘形	送り仮名不要	
掘込み/掘込み/掘り込み		→ 掘込	送り仮名不要	
掘り抜き		→ 掘抜	送り仮名不要	
堀割り		→ 堀割	送り仮名不要	
帆を持つ船		→ 帆船		
ま	マイクロブレイドコア/細石刃石核/細石刃核	→ 細石核		
	マイクロブレイド	→ 細石刃		
	埋葬土坑/土坑墓	→ 土壙墓	「坑」は穴、「壙」は墓穴。	
	前	→ 前期	時代細分名は省略しない。	
	マグサ石	→ まぐさ石		
	まげ物/曲げ物	→ 曲物		
	磨痕のある礫	→ 磨痕礫		
	楯形/舛形/升形	→ 楯形		
	又は/又は	→ または		
	末葉/終末	→ 末	縄文晩期末、縄文末など。	

よみ	変更前	変更後	備考
ま	流祀/神社祭祀/祭祀場/祭祀所/祭祀遺跡/祭祀遺構	→ 祭祀	
	まないた/まな板/俎板	→ 俎	
	丸礫/円形礫	→ 円礫	
	磨面をもつ礫	→ 磨面のある礫	
	御影石	→ 花崗岩	
	みかん玉/ミカン玉	→ 蜜柑玉	
	みかん畑	→ ミカン畑	
	神子	→ 巫女	
み	水城積み土	→ 水城積土	送り仮名不要
	水指し/水差し/水指/水差	→ 水注	
	水溜状施設/水溜施設/水溜り/水	→ 水溜	
	水辺祭祀遺構/水辺の祭祀/水際祭	→ 水辺祭祀	
	溝状凹み/溝状の窪み/溝状の凹み	→ 溝か	
	道/通路/小道/古道	→ 道路	遺構要素としての「通路」に限る。一連の文章中に使用されている場合はこの限りではない。
	三足釜	→ 三脚付釜	
	ミニチュアカマド	→ ミニチュア竈	
	みみずく土偶	→ ミミズク形土偶	
	耳輪/環形耳飾	→ 耳環	
	ミリグラム	→ mg	1バイトの英小文字を使用する。
	ミリメートル	→ mm	1バイトの英小文字を使用する。
	む	武者走	→ 武者走り
むしろ/ムシロ/筵/蓆		→ 蓆	
むろ/室		→ ムロ	
め	メートル	→ m	1バイトの英小文字を使用する。
	目隠し堀	→ 目隠堀	
	めがね橋	→ 眼鏡橋	
	メッキ	→ 鍍金	
も	木芯○	→ 木心○	
	木製柱	→ 木柱	
	木製部材	→ 木製建築部材	
	木樋暗渠	→ 暗渠(木樋)	
	持ち送り	→ 持送り	
	木器貯蔵穴	→ 貯蔵穴(木器)	
	揉み錐	→ 揉錐	送り仮名不要
や	焼締め陶器/焼き締め陶器	→ 焼締陶器	送り仮名不要
	焼け土	→ 焼土	送り仮名不要
	焼面/焼け面	→ 焼土面	
	焼け礫/焼けた礫焼成礫/被熱礫	→ 焼礫	
	柳葉尖頭器/柳葉状尖頭器	→ 柳葉形尖頭器	
	矢窓/矢間/小間	→ 狭間	
	鎗鉋/槍鉋/遺鉋/鏝鉋/遣鉋	→ ヤリガンナ	金へんに「施」のつくり部分の字は使用不
	遣り水	→ 遣水	送り仮名不要
ゆ	有舌尖頭器	→ 有茎尖頭器	
	湧別技法細石核	→ 細石核(湧別技法)	
	ユニット	→ 石器集中	旧石器の遺構の場合のみ。
よ	用害	→ 要害	
	鎔岩/熔岩	→ 溶岩	
	熔結凝灰岩/容結凝灰岩	→ 溶結凝灰岩	
	瓔珞	→ 瓔珞	
	横ハケ	→ ヨコハケ	
らり	ラウンドスクレイパー	→ 円形搔器	
り	リタッチドフレイク/リタッチトフレイク/リタッチのある石器	→ 細部調整のある剥片	
	流文岩	→ 流紋岩	
	輪郭式山城	→ 山城(輪郭式)	
れ	礫敷き	→ 礫敷	送り仮名不要
	礫の堆積層	→ 礫堆積層	
	煉瓦	→ レンガ	
	連郭式山城	→ 山城(連郭式)	
	レンガ造り/煉瓦造り	→ レンガ造	送り仮名不要
	蓮花文	→ 蓮華文	
連立天守/連立式天守/連立型天守	→ 天守(連立式)		
ろ	鉦/土坑炉	→ 炉	高殿炉、炉壁、野炉など。

よみ	変更前	変更後	備考
ろ	轆轤	→ ロクロ	
	轆轤ピット	→ ロクロピット	
わ	ワイドフレイク	→ 横長剥片	
	倭琴	→ 和琴	
	轍の痕跡	→ 轍痕	
	渡り鳥	→ 渡鳥	送り仮名不要
	渡り土堤	→ 渡土堤	送り仮名不要
	和同開寶/和同開珍	→ 和同開珎	
	碗/鉢	→ 碗	茶碗、須恵器(碗)など。すべて「碗」を使用する。
	碗形鉄滓	→ 碗状鉄滓	
	ほか	+	→ 土
C		→ 世紀	世紀を示す「C」には1バイトの英小文字を使用するが「世紀」と置き換えることが望ましい。
or		→ か	
〇〇密集区/〇〇集中部/〇〇集中範囲/〇〇集中地点/〇〇集中出土地点/〇〇集中出土地域/〇〇集中群/〇〇集中区/〇〇集中箇所/〇〇集中城/〇〇集中遺構		→ 〇〇集中	
〇〇紋		→ 〇〇文	例 唐草紋、縄紋→唐草文、縄文。
2重環濠		→ 二重環濠	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
2重口縁		→ 二重口縁	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
2段築成/2段築		→ 二段築成	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
2段墓壇		→ 二段墓壇	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
2面廂		→ 二面廂	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
6角柱		→ 六角柱	アラビア数字と漢字の混用は避ける。
外/+α		→ ほか	例 弥生土器(鉢ほか)、縄文土器(入佐式+春日式ほか)
内		→ うち	古墳群や遺跡群などでその詳細を記載する場合の使用法。例 古墳群(古墳17、うち前方後円墳1)、古墳6(前回未調査のうち2基調査)

4.4 表記規則

この節では、遺跡情報に関する用語の表記法のうち、一定の法則によってまとめられる部分について記述する。文字や表現の置き換えに関する個別の詳細な内容は、表 19 を参照のこと。ただし、これらの表記法は奈文研から公開している、遺跡データベースと報告書抄録データベースで用いる例を示すものであって、他機関・研究者に対して用語の統制を促すものではない。また、ここに示す表記規則は、より良い検索結果を得るための暫定的なものであり厳密に学問的な検討を経たものではない。

◆◆ 遺構 ◆◆

古墳・古墳群

表記一般

古墳（○墳）

古墳群（○墳）

- ○は形状を示し「墳」は省略しない。円墳、楕円墳、方墳、長方墳、前方後円墳、前方後方墳、上円下方墳、双円墳、双方中円墳、双方中方墳、六角墳、八角墳、柄鏡式古墳など。

例 古墳（円墳）、古墳（長方墳）、古墳（前方後円墳）、古墳（円墳+前方後円墳）

例 古墳群（円墳）、古墳群（方墳（小型））

置換 異形前方後円墳 →古墳（前方後円墳（異形））

四隅突出型方墳 →古墳（四隅突出型墳）

瓢形墳 →古墳（双円墳）

- 複数の墳形を列挙する場合、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳、その他の墳形 の順に記述する。

例 古墳（前方後円墳 1+円墳 5）

- 形状が不明な古墳は、「古墳、墳形不明」もしくは「古墳、墳形不詳」と記す。

- 墳形が不明確な場合、古墳（○墳か）とする。二者択一の表記の場合も同様、蓋然性の高いものを先に示すことが望ましい。

例 古墳（円墳か）、古墳（円墳か前方後円墳か）

- 古墳かどうか不明確な場合、古墳か あるいは、古墳（○墳）か とする。推定古墳、古墳推定地は不可。

例 古墳（方墳）か

- 大小の表現は、古墳（○墳（大型））、古墳（○墳（小型））とする。大円墳、円墳（小）、大型円墳、巨大古墳などは不可。

例 古墳（小型）、古墳群（方墳（小型））、古墳（円墳か（小型））

置換 小円墳 →古墳（円墳（小型））

小墳丘 →古墳（円墳（小型、墳丘））

- 複数の墳形が同一古墳群内に存在する場合は、（ ）内に墳形と数を列挙する。

例 古墳群（円墳 7+方墳 3）、古墳群（前方後円墳 1+円墳 4+方墳 25）、古墳群（積石塚+円墳）

- 詳細な説明は、（ ）に入れて後ろに記す。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。構成要素は「+」でつなぐ。

例 古墳（方墳（階段状）、古墳（円墳（造出付）、古墳（方墳（小型、低い）
古墳（前方後円墳、横穴式石室+舟形石棺）

● 帆立貝式の表現は、古墳（前方後円墳（帆立貝式））とする。古墳（帆立貝形）、古墳（帆立貝型）、帆立貝式古墳、古墳（帆立貝式前方後円墳）は不可。

● 群集墳や装飾古墳、壁画古墳、終末期古墳という名称は、形体による分類とは異なる観点から付けられた名称なので、（ ）には入れず、遺構概要の最後に注記する。古墳（群集墳）、古墳（装飾古墳）などは不可。

例 古墳（円墳）、【中略】、装飾古墳。

● 消失の表現は、「滅失」、「損壊」など元の資料に書かれている語句をそのまま使用する。

例 古墳（○墳）、【中略】、〈現況〉消失。

置換 消滅墳 →古墳、〈現況〉消滅。

古墳跡 →古墳、〈現況〉痕跡。

● 古墳でないものには、「円墳」「方墳」という語句は使用せず、「円形」「方形」とする。墳墓（円墳）、横穴（円墳）、塚（方墳）などは不可。

例 横穴（円形）、塚（円形）、墳墓（方形）、墳丘墓（前方後方形）

★ 古墳に関する表現でその他留意すべき点

地下式古墳、北海道式古墳、古式古墳については、「古墳（○墳）」という表現をとらない。

天皇陵は、宮内庁の指定に従い、陵墓もしくは陵墓参考地と表記する。

古墳参考地、古墳伝承地はそのまま使用する。

置換 カマド塚/竈塚 →古墳（かまど塚）

古墳の周濠・周溝

● 周濠と周溝の区別はあいまいなので、統一せずに元の資料の語句をそのまま記載する。

● 形状は、周濠（○形）とする。○形は 馬蹄形、盾形、不定形、形状不明など。

例 周溝（円形）、周溝（馬蹄形）、周濠（剣菱形）、周濠（楕円形）、周濠（相似形）

● 存在位置や部分、現状は、（ ）に入れて後ろに記す。複数要素を併記する場合、（ ）内に「、」を使用して併記する。

例 周濠（全周）、周濠（後円部のみ）、周濠（前方部）、周濠（東側）、周溝（底部）

例 周濠（未確認）、周濠（残存）、周濠（一部遺存）、周溝（痕跡）

周溝（浅い）、周溝（深い）、周濠（カラ）【濠や溝がカラの場合はカタカナで表記】

例 周濠（長方形、二重）【二重などはアラビア数字ではなく漢数字を用いる】

周濠（鍵穴形、一重）、周溝（浅い、遺存）

● 規模は、周濠（幅□m）のように表記し、□にはアラビア数字を入れる。

置換 壕/周濠 →周濠【空堀だと確認されている場合はこの限りではない】

周溝確認 →周溝あり

周溝疑似/周溝推定 →周溝か【不明瞭さは「か」をつけて表す】

古墳周溝 →周溝 古墳周濠 →周濠

古墳の構成要素

● 遺構要素として「古墳（ ）」の（ ）内に入れるものは、古墳内にあり、古墳を構成しているものの全てが対象となる。複数ある場合は、「+」でつなぐ。墳丘、主体部、周溝、造出、石室、石棺、葺石、列石、積石、埴輪列、土坑など。

例 古墳（円墳、木棺直葬）、古墳（円墳、主体部+周溝）

横穴式石室がある場合、それが主体部であるとわざわざ述べる必要はない。

置換 古墳（円墳、主体部（横穴式石室））→古墳（円墳、横穴式石室）

周溝内埋葬などは、古墳そのものと分けて記述する方が望ましい。

例 古墳（円墳、木棺）+土壌墓（周溝内）

石室

● 壁などの構築方法は石室の名称の前に記す。送り仮名不要。

例 切石小口積石室、割石積竪穴式石室、磚敷横穴式石室

● 石室の数、形状、長さや高さ、付属施設、損壊の程度など詳細な説明は（ ）に入れる。

記述の順番は、〇〇石室（石室の数-形状-長さなど-詳細な説明-損壊の程度）。

例 横穴式石室（狭長）、横穴式石室（長 5.5m・幅 1.2m・高 1.3m）

横穴式石室（複室、南西に開口、長 8.6m・高 3.0m・幅 2.1m）

横穴式石室（巨石の石材散乱により推定）

横穴式石室（石屋形）、横穴式石室（屍床）、横穴式石室（石棚）

竪穴系横口式石室（西方向に開口）

石室（ほぼ全壊）

● 横穴式石室の袖部の表現は、〇袖式横穴式石室とする。

例 左片袖式横穴式石室、無袖式横穴式石室

片袖式横穴式石室（割石小口積）

置換 竪穴石室 →竪穴式石室

複式横穴石室 →複式横穴式石室

円状石室 →円形石室

単室墳 →石室（単室）

● 竪穴系石室、竪穴状の小石室 などはそのまま。

石棺・木棺など

● 材質や部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 木棺（ヒノキ製）、子持壺棺（蓋）

● 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 組合式木棺（漆塗）、木棺（痕跡）、木棺（方形）、木棺（円形）、木棺（丸底）

置換 箱型木棺 →箱形木棺

箱形組合せ式木棺 /組合せ式箱形木棺 →組合式箱形木棺

船形石棺 →舟形石棺

舟底状木棺 →舟形木棺

建物の記述全般

● 部分や詳細な説明は、() に入れて後ろに記す。() 内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 建物(石垣)、建物(基壇(縁))、竪穴建物(炉)、柄鏡形竪穴建物(敷石)、掘立柱建物(柱)、掘立柱建物(基礎)、礎石建物(基壇)

例 建物(雨落溝を伴う)、大型建物(礎板を持つ)、竪穴建物(カマド付)、竪穴建物(焼失住居)、掘立柱建物(基礎固めは根石)、掘立柱建物(炉を持つ)、礎石建物(台地を開拓して果樹園を経営するにあたって建てられた)

● 建物の名称+建物の種類の表記法

遺構に対する解釈の進んだ名称(=建物名称)と解釈の度合いが低い名称(=建物種類)との併記は、建物名称を前に記し、建物種類を() に入れて後ろに記す。「基壇」の項参照。

例 脇殿(礎石建物)、書院系建築(礎石建物)、玉作工房(竪穴建物)、講堂(掘立柱建物)、住居(掘立柱建物)、仏堂(礎石建物+掘立柱建物)

● 形式は() に入れて後ろに記す。

例 建物(打込式)、塔(礎石建物(法起寺式伽藍配置))

竪穴建物

● 方形、円形、六角形、柄鏡形、花卉形などの形状は「竪穴建物」の前に記す。

例 方形竪穴建物、円形竪穴建物、大型円形竪穴建物、多角形竪穴建物、隅丸方形竪穴建物、柄鏡形竪穴建物、花卉形竪穴建物

置換 竪穴住居/竪穴式住居 →竪穴建物
柄鏡形住居/柄鏡式住居 →柄鏡形竪穴建物
花卉形住居/花卉状住居 →花卉形竪穴建物

掘立柱建物

● 次の表記はいずれも「掘立柱建物」に統一する。

掘立柱立建物、掘立柱住居跡、掘立柱建物跡、掘立柱建造物、掘立柱住居、柱穴建物、掘建柱建物、掘立柱建築、建物(掘立柱建物)、掘立柱建物(ピット)、掘立柱穴建物、掘立式建物、掘立建物、ピット群(掘立柱建物)

● 廂・溝・柱の構造、床の構造、屋根の状況などは、「掘立柱建物」の前に記す。

例 廂付掘立柱建物、四面廂掘立柱建物、廂付大型掘立柱建物、周溝付掘立柱建物、総柱掘立柱建物、側柱掘立柱建物、板壁掘立柱建物

ただし、庇→廂、有廂→廂付とする。四面廂には「付」をつけない。

● 大型、小型は、それが修飾する語の直前に記す。

例 廂付大型掘立柱建物【この場合大型なのは廂ではなく建物の方】

● 布掘りには、送り仮名必要、「式」不要。例 掘立柱建物(布掘り)

- 平地式には、「式」必要。例 平地式円形掘立柱建物

礎石建物

- 次の表記はいずれも「礎石建物」に統一する。

礎石立建物、礎石を持つ建物、礎石の残る建物、礎石建ち建物、柱礎石建物、礎石地業建物、礎石建物跡、礎石建造物、礎石地業建物

置換 礎石基壇建物 →基壇礎石建物

★ 建物の表記に関するその他の留意点

壁立ち建物/大壁建物 →壁建ち建物【送り仮名必要】

高床式建物/高床式建造物 →高床建物

土台建ち建物/土台建物 →土台建て建物

円形状建物 →円形建物【方形建物についても同様】

平地式建物 →平地建物

建物（大型） →大型建物

- 屋根の構造の記述順は、形状-材料-出入口の向き。

形状の例 切妻造、入母屋造、寄棟造、片流造

材料の例 瓦葺、草葺、檜皮葺、板葺、こけら葺

向きの例 妻入、平入

例 重層入母屋造、単層入母屋造茅葺、背面寄棟造妻入、入母屋向拝唐破風造こけら葺一間社、一重入母屋造棧瓦葺

置換 柿 →こけら【ひらがな。「柿」とは違うので注意。】

方形造/四注造 →宝形造

切妻屋根 →切妻造

- 横穴墓や石棺の形状の描写においては上記のような表現の統一をしなくてもよい。

礎石

- 建物の部分として礎石が検出された場合の語順は以下の通り。

鳥居や門、柱などは、建物名称-礎石の順

例 鳥居（礎石）、中門（礎石）、土塁（礎石）

塔、金堂、屋敷など壁や屋根を備え一定の面積もある建物の場合は、礎石建物-建物名称の順

例 礎石建物（拝殿）、礎石建物（武家屋敷）、礎石建物（米蔵）、礎石建物（本堂）

置換 礎石状石 →礎石か

礎石抜き取り穴 →礎石抜取穴【送り仮名不要】

栗石 →根石

基壇

表記一般

- 積基壇
- △岩製基壇
- 形基壇

● ○積は構築方法。瓦積、磚積など。送り仮名不要。

● △岩は岩石種。凝灰岩製など。「製」をつける。

● □形は形状。円形、方形など。

例 瓦積基壇、磚積基壇、乱石積基壇

例 凝灰岩製基壇

例 円形基壇、方形基壇

● 素材を表す表現を併記する場合の記述順は、形状-構築方法。

例 方形石積基壇

置換 木製基壇 →木造基壇

積石基壇 →石積基壇

石組基壇、基壇状遺構、礫基壇、円礫基壇は使用可。

● 建物名称と「基壇」を併記する場合

回廊・金堂などは、解釈の結果である建物の名称を前に書き、「基壇」については（ ）に入れて後ろに記述する。解釈の度合いが高い、建物・築地などの用語を前に、程度が低い、基壇・地業などの用語を後ろに記す。

例 回廊（基壇）、塔（基壇）、僧房（基壇）、金堂（基壇礎石建物）、大極殿（基壇（南縁））

石垣の積み方

送り仮名不要。○○積み→○○積

例 穴太積、板石積、玉石積、野面積

土坑

● 用途の判明している土坑は土坑とはせず、その用途に従った名称にする。

例 貯蔵穴土坑→貯蔵穴、落とし穴土坑→落とし穴、水溜用土坑→水溜、○採掘土坑→○採掘坑

● 用途の性格のみ記述されている土坑は、土坑（○）とする。○は祭祀、地鎮、製塩、鍛冶など。

● 土坑内の内容物を記述する場合、土坑（○出土）とする。○は鋳型、骨、堅果類など。○出土土坑、○検出土坑は不可。

例 土坑（飾玉類出土）、土坑（木炭集中）

ただし、内容物の充填に意図が見られる場合は、土坑（○充填）、土坑（○埋葬）、土坑（○集積）、土坑（○貯蔵）、土坑（○供献）とする。

例 土坑（石充填）、土坑（ウシ埋葬）、土坑（サヌカイト集積）、土坑（木器貯蔵）、土坑（土器供献）

● 廃棄に用いられた土坑は、土坑（○廃棄）とする。○は内容物。○投棄土坑、○捨て土坑も同様。

例 土坑（堅果類廃棄）、土坑（土器廃棄）、土坑（鉄滓廃棄）。

● 火災処理土坑、○焼成土坑はそのまま。

● 桶やカメを埋めた土坑は「埋桶」「埋甕」とする。

置換 埋蔵/埋設 →埋納【埋納された中身は前に書く】

例 銭貨埋納土坑、大量銭貨埋納土坑、廃滓土坑。
ただし、石棒埋設土坑は特殊な遺構なのでそのまま。

ピット

- 用途の性格のみ記述されているピットは、ピット（○）とする。○は祭祀、砂鉄、地慎など。
- ピット内の内容物を記述する場合、ピット（○集中）とする。○は貝、焼土、土器など。

例 ピット（鉄滓集中）、ピット（土器集中）

文化層

旧石器時代の自然層を表す場合は、1バイト文字のアラビア数字、英字を使用する。漢字、ローマ数字は使用不可。

例 第1文化層、第2文化層、立川ローム3層、BB3層、YLM層

足跡

足跡の主体を（ ）に入れる。足跡群、作業足跡は使用可。

例 足跡（人+ウシ）、足跡（動物）、足跡（家畜）

その他

- 遺構として検出された建造物の痕跡には「跡」を付けない。

例 駅家跡→駅家 土塁跡→土塁
街道跡→街道 窯跡→窯
荘園跡→荘園 池堤跡→池堤
祭祀跡→祭祀 地鎮跡→地鎮

ただし、社寺、城館、門など現代も存在し得る建造物については、それが痕跡なのか現存するのか区別する必要があるので注意。

- ○○遺構/○○状遺構→○○とする。遺構の種類や性格に疑問点がある場合は、○○か とする。

例 石組遺構→石組 橋脚遺構→橋脚
土取り遺構→土取 土手状遺構→土手

- ○○溜まり/○○溜り/○○溜め→○○溜とする。送り仮名不要。

例 遺物溜まり→遺物溜 鉾滓溜まり→鉾滓溜
瓦器溜り→瓦器溜 瓦溜め→瓦溜

◆◆ 遺物 ◆◆

土器全般

表記一般

※※土器 (○式 (器形))

※※土器 (器形 (部分))

※※土器 (◇文 (○式))

● ○式は型式。ローマ数字は用いず、1バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせで表現する。英字は1バイトの小文字を使用。数字は1バイトのアラビア数字を使用する。

例 縄文土器 (水迫式 (深鉢))、土師器 (成川式 (甕))、土師器 (布留式並行)、
須恵器 (MT15 型式から TK10 型式)、続縄文土器 (後北 C2 式+後北 D 式)

● 器形は、土器の形。壺、皿、鉢など。小型壺と小壺は別物なので注意。

例 縄文土器 (甕 (口縁部))、弥生土器 (甕 (底部) + 装飾付壺 (口縁部))、
土師器 (布留式 (壺+甕+高杯など))

置換 壺形土器 → 土器 (壺)

● 部分は、土器の一部分だけ検出したときにその部分を記す。底部、口縁部など。

例 縄文土器 (押型文 (浅鉢))、縄文土器 (捺糸文)

● 詳細な説明は、() に入れる。() 内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 土師器 (高杯 (脚部)、透かし穴あり))

● 器形と器種の対応が不明確な場合は、□□土器 (○式+○式、器形) のように記す。

例 縄文土器 (前平式+曾畑式、壺)

部位の表現

● 底部、口縁部、蓋、高杯の杯部など土器の部位は () に入れて器種の後ろに記す。

例 子持壺 (脚部)、小壺 (蓋)、高杯 (脚部)、高杯 (口縁部)、椀 (底部)

ただし、杯身、杯蓋は一つの語として使われているので、杯 (身)、杯 (蓋) とはしない。

● 篋描きの「篋」は漢字。ヘラ削り、ヘラ磨き、ヘラ起しなどの「ヘラ」はかたかなで表記する。

例 篋描き・線刻文土器、高杯 (脚部 (篋描き記号))、杯 (内面ヘラ磨き)、杯 (放射状ヘラ磨き)、
長頸瓶 (ヘラ記号)、小皿 (ヘラ切り)、ヘラ切底

● 技法や詳細な説明は、() に入れて器種の後ろに記す。

例 緑釉陶器 (朱書き銘あり)、白磁 (瓶 (鉄絵文))、蛸壺 (イイダコ壺)

置換 こね鉢 → 捏鉢

内耳付鍋/鍋 (内耳) / 耳打鍋 → 内耳鍋

伊勢系鍋、伊勢鍋 → 伊勢型鍋

加飾壺 → 装飾壺 特殊篇壺 → 特殊扁壺

磨研壺 → 研磨壺 たこ壺形土器 → 蛸壺

パレス → パレススタイル 蓋付 → 有蓋

ヒサゴ壺 → 瓢形壺 フラスコ壺 → フラスコ形壺

【焼塩壺はそのまま】

壺

- 記述の順番は、大型・小型の別-装飾の表現-頸、耳、口、底などの形態-壺-（部分）。

例 短頸壺、有耳壺、広口壺、丸底壺、二重口縁壺

例 小型長頸壺、有蓋台付長頸壺、台付直口壺、丸底無頸壺

例 小型壺（完形）、壺（黒漆塗付）、小壺（朱入）、複合口縁壺（底部穿孔）

縄文土器

- ○系は○式とはしない。○式系は可。プロト○式、○○段階、○類は○式と同様に記す。

例 縄文土器（桑ノ丸3類）、縄文土器（小牧3A段階）

置換 橿原式 →滋賀里式 室浜式→上川名Ⅱ式

沖縄貝塚時代の土器

- 縄文土器とはしない。

例 沖縄貝塚時代前期-土器（伊波式）

弥生土器

- 古段階、中段階、新段階は、（ ）をつけて略称する。

例 弥生土器（畿内第Ⅰ様式（古））、弥生土器（畿内第Ⅰ様式（新））

土師器

- ○系・○産は（ ）に入れて後ろにおく

例 土師器（畿内産）、土師器（伊勢産）、土師器（防長系）、土師器（吉備系）、土師器（京都系）

- 古段階、中段階、新段階は、（ ）をつけて略称する。

例 土師器（布留式（古））

置換 布留式土器 →土師器（布留式）

布留式土器+土師器 →土師器（布留式ほか）

京都系模倣土師器 →土師器（京都系模倣）

土師式土器/土師器土器 →土師器

古式土師器、糸切土師器、回転台土師器、ロクロ土師器はそのまま。

須恵器

- 陶邑編年による型式の表現例は以下の通り。

例 須恵器（I-1）、須恵器（I型式）、須恵器（TK73型式）

- 東播系須恵器は使用可。

例 東播系須恵器（捏鉢）、東播系須恵器（片口鉢）

- 類須恵器、須恵系土器は使用可。須恵器とは別物として扱う。

例 須恵系土器（皿）、須恵系土器（杯）

瓦器・瓦質土器

- ○型、○産、○系は（ ）に入れて後ろに記す。

例 瓦器（和泉型）、瓦器（椀（楠葉型））

置換 瓦器質土器 →瓦質土器 瓦器土器→瓦器

黒色土器

表記一般

黒色土器○類（□（△））

- ○類は A 類、B 類。

例 黒色土器 A 類（杯）、黒色土器 B 類（椀）

置換 内面黒色土器 →黒色土器 A 類

両面黒色土器 →黒色土器 B 類

- 内黒土器・内黒の土師器は使用可。近江型黒色土器・黒色土器（近江系）も使用可

カムイ焼

置換 須恵器（カムイ焼）、亀焼土器→カムイ焼

瓷器

置換 陶瓷器 →陶磁器

- 白瓷・青瓷・白瓷系陶器は使用可。

炆器・セツ器

- 炆は機種依存文字につき使用せずに、かたかなでの表記を勧めてきたが Unicode で 70BB が割り当てられており、単語の続き具合から漢字の使用を推奨する。

在地産土器

- 全国的に遺物名として使用されているので使用可。

宮古式・八重山式の土器

- 土器（宮古式）、土器（八重山式）とする。

土器に関するその他の注意点

- 表採・散布などは記載しない。

置換 土器表採 →土器

縄文式土器 →縄文土器

弥生式土器 →弥生土器

あかやき土器・赤焼き土器 →赤焼土器

朱書き土器 →朱書土器

窓アキ土器 →窓あき土器

釣り手土器 →釣手土器

手捏ね土器 →手捏土器

手焙型土器・手焙り形土器 →手焙形土器

鉄鉢型土器 →鉄鉢形土器

陶磁器全般

表記一般

産地（○釉陶器）
産地（器形（部分））
産地（○釉陶器（器形））
産地（○釉陶器（器形（部分）））
○釉陶器（器形（部分））
陶磁器の種類（器形（部分））

- 産地。多くの産地があるが、有名な産地でもマイナーな産地でも扱いは同じ。

○産、○焼の「産」「焼」は不要。

○窯、○系の「窯」「系」は必要。

- ○釉陶器は釉薬の種類。

- 器形は陶磁器の形。壺、皿、椀など。

- 部分は陶磁器の一部分だけ検出したときにその部分を記す。底部、口縁部など。

例 伊万里（椀）、唐津（小皿）、肥前系（皿）、信楽系（壺）、瀬戸窯（おろし皿）、渥美窯（大甕）

例 瀬戸（黄釉陶器）

例 備前（壺（体部））、灰釉陶器（片口鉢（注口部分））

例 瀬戸（緑釉陶器（皿（口縁部分）））、古瀬戸（灰釉陶器（小皿））

例 灰釉陶器（椀（底部））、三彩陶器（壺）、黒釉陶器（天目茶椀）

例 青白磁（合子（身））、白磁（瓶、鉄絵文）

- 詳細な説明は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 灰釉陶器（椀、へら書文字）、緑釉陶器（皿、銀泥の痕跡）、緑釉陶器（朱書き銘あり）

部位の表現

土器全般を参照

三彩・二彩

置換 和三彩 →奈良三彩 李朝三彩 →朝鮮王朝三彩

- 唐三彩、渤海三彩、新羅三彩、華南三彩、交趾三彩、奈良三彩、平佐三彩、長与三彩には「陶器」をつけない。それ以外の三彩には「陶器」をつけて、三彩陶器と表現する。二彩陶器も同様。

例 華南三彩（鳥形水注）、長与三彩（皿）、三彩陶器（小壺）、奈良三彩（壺）、奈良三彩（陶枕）

例 三彩陶器（小壺）、三彩陶器（鉢）、二彩陶器（浄瓶）、二彩陶器（耳皿）

外国産陶磁器

- 産地の表現は陶磁器全般を参照。

例 景德鎮窯（合子）、龍泉窯（青磁）

置換 青花 →染付

- 国内産の陶磁器は国産とする。

置換 日本製/国内産/本土産 →国産

● 外国産の陶磁器は○産とする。○は国名、地域名、王朝名など。

置換 中国製/中国輸入 →中国産

タイ製 →タイ産

朝鮮王朝製 →朝鮮王朝産

輸入された陶磁器

置換 舶載○/貿易○/外来○/移入○ →輸入○

○は陶磁器、陶器、磁器、青磁、白磁など

例 輸入陶器、輸入青磁、輸入磁器

その他の産地表現

置換 会津/本郷 →会津本郷

瀬戸+美濃、瀬戸・美濃 →瀬戸美濃

常滑・渥美系 →常滑渥美系

常滑瀬戸 →常滑+瀬戸

蔵骨器

表記一般

蔵骨器（材質）

蔵骨器（使われ方）

蔵骨器（内容物）

● 材質は、須恵器、白磁、備前など。通常の壺や蓋の表記法（例 須恵器（壺）、信楽（壺））とは記述順が異なるので注意。

例 蔵骨器（信楽）、蔵骨器（緑釉（壺））、蔵骨器（青銅製）、蔵骨器（凝灰岩製）

● 使われ方は、専用、転用など。

例 蔵骨器（専用）、蔵骨器（転用）

● 内容物は、火葬骨など。

例 蔵骨器（火葬骨）

埴輪全般

表記一般

埴輪（○埴輪）

埴輪（○埴輪△式）

埴輪（○埴輪（部分））

埴輪（○埴輪△式（部分））

● ○埴輪は、円筒埴輪、人物埴輪、盾形埴輪、家形埴輪など。

● △式は、IV式、V式など。ローマ数字は用いず、1バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせる。英字は1バイトの小文字を使用。数字は1バイトのアラビア数字を使用する。複数の型式

を併記するときは（ ）に入れて記す。

● 部分は、埴輪の一部分だけ検出したときにその部分を記す。基部、船首部分など。

例 埴輪（円筒埴輪）、埴輪（人形埴輪）
埴輪（円筒埴輪 V 式）、埴輪（円筒埴輪（IV 式から V 式））
埴輪（円筒埴輪（日置荘型））、埴輪（朝顔形埴輪（V 式、下総型））
埴輪（円筒埴輪（基部））、埴輪（舟形埴輪（船首部分））

● 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 埴輪（円筒埴輪（完形））、埴輪（円筒埴輪（有鱗））、埴輪（人物埴輪（細美豆良））
埴輪（円筒埴輪（III 式から IV 式、有鱗））、埴輪（円筒埴輪（IV 式、土師質））
埴輪（円筒埴輪（V 式、新式））、埴輪（円筒埴輪 II 式（周濠内転落））
埴輪（朝顔形埴輪 V 式（2 段ないし 3 段に配置））

円筒埴輪

置換 朝顔形円筒埴輪 → 埴輪（朝顔形埴輪）
円形埴輪 → 埴輪（円形埴輪）
楕円形埴輪 → 埴輪（楕円形埴輪）
都月式埴輪 → 都月型埴輪

● ひれ付埴輪の「ひれ」はひらがな表記。ただし、銅鐸の場合「鱗」は漢字なので注意。

例 埴輪（ひれ付朝顔形埴輪）、埴輪（ひれ付円筒埴輪）

形象埴輪

置換 器材埴輪 → 埴輪（器財埴輪）
太刀形埴輪 → 埴輪（大刀形埴輪）
正装埴輪 → 埴輪（盛装埴輪）
舟形埴輪 → 埴輪（船形埴輪）
柵列埴輪 → 埴輪（柵形埴輪）

例 埴輪（鞞形埴輪）【鞞は類字に注意】、埴輪（石見型盾形埴輪）、埴輪（短甲形埴輪）、
埴輪（蓋形埴輪）、埴輪（壺形埴輪）、埴輪（人形埴輪（弹琴））、埴輪（馬子埴輪）、
埴輪（踊る埴輪（男女））、埴輪（馭者埴輪）、埴輪（頭上に壺を乗せた女子埴輪）、
埴輪（天冠をつけた男子埴輪）、埴輪（跪く男子埴輪）、埴輪（武人埴輪）、
埴輪（平装男子埴輪）、埴輪（巫女埴輪）、埴輪（黒斑のある埴輪）

● 家形埴輪は屋根構造には「造」を、床の構造には「式」をつける。

例 埴輪（寄棟造家形埴輪）、埴輪（切妻造家形埴輪）、埴輪（高床式家形埴輪）、
埴輪（平地式家形埴輪）

埴輪その他

置換 埴輪片 → 埴輪

例 埴輪（須恵質）【埴輪は本来土師質なので特記に値する】

瓦

表記一般

瓦 (○瓦)

瓦 (○瓦+△瓦)

- ○瓦や△瓦は丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦、鬼瓦などの種類。「軒丸」「軒平」のよう省略しない。例
瓦 (丸瓦)、瓦 (軒平瓦+軒丸瓦)

置換	いぶし瓦/燻し瓦	→燻瓦	サン瓦/棧瓦	→棧瓦
	染め付け瓦	→染付瓦		
	叩き瓦	→タタキ瓦	叩き平瓦	→タタキ平瓦
	タル先瓦/タルキ先瓦/タルキサキ瓦/スイ先瓦/榘先瓦/垂先瓦		→垂木先瓦	
	のし瓦	→熨斗瓦		
	古瓦	→瓦		
	銅瓦	→銅製瓦	【素材には「製」をつける】	

土製品

- ○型土製品/○状土製品→○形土製品。「型」にはタイプ、「形」には形状という意味があるので、物の形を模した土製品は○形土製品とする。

例	腕輪状土製品	→	腕輪形土製品
	斧状土製品	→	斧形土製品
	サイコロ型土製品	→	サイコロ形土製品
	勾玉型土製品	→	勾玉形土製品

石器 材質

- 石材種は「製」をつけ () に入れて、遺物名の後ろに記す。岩石名称は一般的な名称を採用する。

例 鎌形石器 (安山岩製)、剥片 (黒曜石製)、石枕 (滑石製)、管玉 (碧玉製)

例 剥片 (サヌカイト製+黒曜石製)

- 鉱物も石材と同様。通常漢字で表記する鉱物名は難読漢字でない限り漢字、その他は、かたかなで表記する。

例 コハク、メノウ、ヒスイ、カンラン石、クジャク石、水晶、軟玉、硬玉、雲母、辰砂、玉髓

例 平玉 (コハク製)、大型石器 (メノウ製)、勾玉 (水晶製)、剥片 (煙水晶製)

- ガラスも石材と同様。ただし、「硝子」は「ガラス」に統一。

例 管玉 (ガラス製)、勾玉 (ガラス製)、小玉 (ガラス製)

剥片

置換	RF/R.F/2 次加工を有する剥片/加工痕を有する剥片	→細部調整のある剥片
	UF/U.F	→使用痕のある剥片

石核

〇〇型石核→石核（〇〇型）とする。〇〇型は白滝、札滑、蘭越など。

石鏃

● 石鏃というひとまとまりの用語なので、大分類としての素材に対し「製」は不要。

例 石鏃【石製鏃とはしない】

● 茎の表現

茎の表現例 無茎石鏃、有茎石鏃【「式」を用いない】

基部の表現例 凹基式石鏃、平基式石鏃、凸基式石鏃【「式」を用いる】

● 茎の有無と基部の形状を併記する場合、記述順は、茎の有無-基部の形状。

例 無茎凹基式石鏃、無茎平基式石鏃、有茎平基式石鏃、有茎凸基式石鏃

● 部分や詳細な説明は（ ）に入れて後ろに記す。

例 石鏃（人骨に伴う）

石剣

● 石剣というひとまとまりの用語なので、大分類としての素材に対し「製」は不要。

例 石剣【石製剣とはしない】

● 部分や詳細な説明は、（ ）に入れて後ろに記す。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 磨製石剣（切先）、石剣（滑石製）、石剣（サヌカイト製）

置換 有樋式磨製石剣/有樋式石剣→銅剣形石剣

石矛

置換 鋒/鉞 →矛

● 石矛というひとまとまりの用語なので、大分類としての素材に対し「製」は不要。

例 石矛【石製矛とはしない】

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 石矛、矛（身）

石製品

● 〇型石製品→〇形石製品。「型」にはタイプ、「形」には形状という意味があるので、物の形を模した石製品は〇形石製品とする。尖頭器なども同様。

例 楔型石製品 →楔形石製品 琴柱型石製品→琴柱形石製品
舟型石製品 →船形石製品 定型石器→定形石器
槍先型尖頭器 →槍先形尖頭器

木器および金属製農具など関連遺物全般

- 素材には「製」をつけて表す。ただし、鑿や杵など例外もある。

例 鉄製楔、鉄製鋏、銅製鋤先、木製馬鋏、木製鋤、木製穂摘具、滑石製紡錘車、木製カセ、木製櫛、軽石製浮子、鹿角製ヤス、木製弓、革製盾、木製下駄、竹製櫛、骨製簪、貝製匙、木製曲物、木製井筒、木製琴、土笛、石製あて具、木製叩板、木製机、木製扉材、竹製網代

例 石鑿、鉄鎌、石臼、石杵、鉄鎚、横槌、竹籠

- 部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 犁（柄）、横鋏（泥除）、組合鋤（身）、田下駄（足板）、鉄鎌（柄）、鉄鎚（頭部）、紡錘車（腕）、杵（腕木）、差歯下駄（台部）、櫛（歯）、衣笠（柄）、曲物（底板）、和琴（龍角）、案（天板）

ただし、「鋏先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 鑿柄、鉄製鋏先

- 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に複数の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 石臼（水銀朱精製用）、石杵（赤色顔料付着）、石製紡錘車（文様あり）、堅櫛（漆被膜残存）

- 素材の詳しい説明は、（ ）に入れる。

例 貝匙（ヤコウガイ製）

斧

【石斧】

- 石材種は（ ）に入れて遺物名の後ろに記す。

例 有肩石斧（粘板岩製）、打製石斧（粘板岩製）、石斧（蛇紋岩製）、磨製蛤刃石斧（安山岩製）

- 大型・小型、打製・磨製は遺物名の前に記す。

例 小型石斧、大型打製石斧、磨製石斧、打製石斧

- ○形石斧の「かた」は「形」を使用する。「型」は不可。

例 靴形石斧、丹塗靴形石斧、小型撥形石斧、丸鑿形石斧、短冊形石斧、分銅形石斧

置換 太形蛤刃石斧/大形蛤刃石斧/大型蛤刃石斧 → 太形蛤刃石斧

片刃の局部磨研石斧 → 局部磨製片刃石斧

鹿角製柄装着扁平石斧 → 扁平石斧（鹿角製柄装着）

神子柴系石斧 → 神子柴型石斧

- 語順は下記の例の通り。

例 大型扁平石斧、扁平片刃石斧、抉入片刃石斧、抉入柱状片刃石斧、多頭環状石斧

【鉄斧】

- 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、刀剣以外の「え」には「柄」を使用する。鉄斧の場合、斧柄は普通木製で斧身とは別物なので、（ ）に入れない。

例 鉄斧（柄）、斧柄、斧頭、手斧頭、斧柄（直柄）、斧柄（膝柄）

- 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 鑄造鉄斧（周溝端部から出土）
 置換 鉄製斧 →鉄斧
 有肩式鉄斧 →有肩鉄斧
 短冊斧/短冊形斧/短冊型斧 →短冊形鉄斧
 有袋斧/有袋鉄斧/袋柄状鉄斧/袋部を有する鉄斧 →袋状鉄斧

雛形

漢字で表記。雛形（○+○+○）のように記す。

例 木製雛形（鏃形+刀子形+座金形+鋌形+釘形+ピン形）

★ 斧全般、その他の留意点

貝斧、牙斧、骨斧、銅斧は素材に「製」は不要。加工斧、伐採斧のように、用途を示す語も（ ）に入れず前に記す。

鑿

● 素材の後ろに「製」はつけない。

例 石鑿、鉄鑿、銅鑿

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、それ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 鑿柄

置換 小型鑿状工具 →小型鑿 鉄鑿状品 →鉄鑿
 鑿状鉄器/鑿形鉄器 →鑿 袋鑿 →袋状鑿

犁

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、「犁先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 犁（柄）、犁（床）、犁先

置換 唐鋤 →唐犁【「犁」は家畜が引くすき、「鋤」は人が手で引くすきの意】

鍬

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、「鍬先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 横鍬（泥除）、鉄製鍬先

● 鍬鋤、鍬鋤先はそのまま

● 「装着」の語は不要。

例 装着平鍬 →曲柄平鍬

置換 又鍬/股鍬/爪鍬/熊手鍬/馬鍬 →又鍬

例 二又鍬、三又鍬

並鍬 →平鍬

膝柄鍬/膝柄股鍬 →曲柄鍬【ただし膝柄のみは可】

クヌギ製鋏 →木製鋏（クヌギ製）
U字型鋏先/U字鋏先/U字鋏 →U字形鋏先
なすび形/茄形 →ナスビ形【かたかなで表記する】
スリット入ナスビ形鋏 →ナスビ形鋏（スリット入）

鋤

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、「鋤先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 鋤（把手）、組合鋤（身）、組合鋤（柄）、鋤先

● スキの痕跡はスキ痕。スキ跡・スキの痕跡は不可。

● 「装着」の語は不要。

例 直柄装着多叉鋤 →直柄多叉鋤

置換 長柄鋤 →一木鋤

着柄鋤 →組合せ鋤

【送り仮名を削除すると読みが曖昧になるので、送り仮名は必要】

なすび形/茄形 →ナスビ形【かたかなで表記する】

U字状鋤先/U字状鉄製鋤先/鉄製U字形鋤先 →U字形鋤先

又鋤/股鋤 →又鋤

例 ナスビ形又鋤、一木二叉鋤、三叉鋤

鋤刃先 →鋤先

馬鋏

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、「鋏先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 馬鋏（台木）、馬鋏（引棒）、馬鋏（柄）

置換 馬鋏歯 →馬鋏（歯）【「歯」は（ ）に入れる】

田下駄

置換 輪かんじき型田下駄/輪カンジキ型田下駄 →輪樑型田下駄

● 大足は、そのまま田下駄に統一はしない。

穂摘具

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、それ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 穂摘具（擦切穴）

置換 手鎌 →鉄製穂摘具

石庖丁形木製品/木包丁 →木製穂摘具

鎌

● 素材に「製」は不要。ただし、手鎌、摘鎌などには「製」をつける。

例 石鎌、鉄鎌、木鎌、鉄製手鎌、鉄製直鎌、鉄製摘鎌

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、それ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 鎌（柄）、鉄鎌（柄）

置換 蛭鎌/ヒル鎌/ひる鎌 →手鎌
直刃鎌 →直鎌
曲刃鎌 →曲鎌
火打ち鎌 →火打鎌
薙鎌 →大鎌

● 大型・小型、磨製・打製は遺物名の前に記す。

例 小型鉄鎌、打製石鎌、磨製石鎌

臼

● 素材に「製」は不要。素材と臼の使用方法を併記する場合は、素材に「製」をつけて前に記す。

例 石臼、木臼、土臼、石製茶臼、石製挽臼

● 送り仮名不要。

例 搗き臼→搗臼、磨り臼→磨臼、摺り臼→摺臼、挽き臼→挽臼、踏み杵→踏杵

● 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 定形石臼（水銀朱付着）、石臼（水銀朱精製用）

置換 引臼/碾磑/碾臼/挽碓/挽き臼 →挽臼
突臼 →搗臼

杵

● 素材に「製」は不要。

例 石杵

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、それ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 杵（握部）、杵（搗き部）

● 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 石杵（赤色顔料付着）、粗製石杵（水銀朱付着）

置換 立杵/縦杵/堅杵 →堅杵

槌

● 金属製のかなづちは金へんの「鎚」、それ以外は木へんの「槌」。

例 鉄鎚、横槌、木槌

● 素材に「製」は不要。

例 石槌、木槌、鉄鎚

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、「鍬先」のようにそれ自身が一遺物の場合はこの限りではない。

例 鉄鎚（頭部）、横槌（敲打部）

紡錘

- 部分は（ ）に入れて後ろに記す。ただし、それ自身が一遺物の場合はこの限りではない。
- 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 紡錘車（転用）、石製紡錘車（文様あり）、紡錘車（線刻あり）、紡錘車（繊維付着）

置換 紡績車/紡垂車 →紡錘車

カセ・糸巻

- 枠は機種依存文字のため、かたかなでの表記を推奨してきたが、Unicode で 685B に割り当てられており、漢字での表記も可能。素材は「製」をつける。

例 木製カセ、木製枠

- 部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 カセ（支え木）、カセ（腕木）

置換 糸巻き →糸巻【送り仮名不要】

- 竹かんむりに「隻」のワクは機種依存文字につき使用せず、「糸枠」の使用を推奨する。

織機

- 送り仮名不要。

例 布巻き→布巻、経巻き→経巻、糸巻き→糸巻

ヤス

- 箆（は）は機種依存文字のため、かたかなでの表記を勧めてきたが、Unicode で 7C0E に割り当てられており、漢字での表記も可能。ただ、かたかな表記を推奨する。素材は「製」をつける。

例 鉄製ヤス、石製ヤス、鹿角製ヤス、鯨骨製ヤス

置換 ヤス状鉄製品 →鉄製ヤス

ヤス状刺突具 →ヤス

弓

- 弣（ゆづか）は、機種依存文字のため、かたかなでの表記を勧めてきたが、Unicode で 5F23 に割り当てられており、漢字での表記も可能。

例 銅製ユヅカ、銅製弣

- 送り仮名不要。

例 飾り弓 →飾弓

- 素材は「製」をつける。

例 鉄製弓、木製弓

置換 ゆはず/ユハズ/弓弣/弓箆 →弣

盾

- 「楯」は特に木製の盾の意だが、遺跡データベースでは「盾」に統一。素材は「製」をつける。

例 革製盾、石製盾、木製盾

- 詳細な説明は、()に入れる。

例 盾(直弧文あり)、革製盾(漆塗)

下駄

- 部分は()に入れて後ろに記す。

例 木製下駄、差齒下駄(台部)

- 送り仮名不要。

例 差し齒下駄 → 差齒下駄

櫛

- 部分は()に入れて後ろに記す。

例 櫛(齒)

- 詳細な説明は、()に入れて後ろに記す。

例 竹製櫛(黒漆塗)、豎櫛(漆被膜残存)、櫛(図書館蔵)

匙

- 素材は「製」をつける。詳細な説明は、()に入れる。

例 貝製匙、鉄製匙、銅製匙、土製匙(丹塗)、貝匙(ヤコウガイ製)

置換 匙型木製品/匙状木製品 → 匙形木製品

刮物桶・井筒

- 送り仮名不要

置換 刮抜き井筒 → 刮抜井筒

刮り物 → 刮物

笛

- 一般的な素材には「製」をつけない。詳細な説明は、()に入れる。

例 土笛、石笛、笛(ココヤシ製)

木器(祭祀具)

- 木器(○形)とする。○形は戈形、戟形、鋤形、刀子形、斧柄形、舟形、修羅形など。

例 木器(刀形)、木器(盾形)、木器(横槌形)、木器(馬形)

発火具

置換 火打ち石/燧石/火燧石 → 火打石

火打ち金/燧金/火燧金 → 火打金

火きり臼/火切臼/火鑽臼 →火鑽臼

火切杵 →火鑽杵

- 送り仮名不要。

例 火打ち石 →火打石

腰掛

- 送り仮名不要。

例 腰掛け →腰掛

置換 腰掛状木製品 →腰掛形木製品

机

- 部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 机（天板）、案（天板）

金属器

材質

- 材質には「製」をつける。ただし、銅鏡や銅鐸のように「製」をつけない語が一般的な場合は、一般的な呼称を優先する。

青銅○/青銅製○→銅製○、金銅○→金銅製○、鉄○→鉄製○などとする。

例 銅製釧、銅製刀子、金銅製椀、金銅製冠帽、鉄製灯籠、鉄製鋏、鉄製鉗、鉄製環、鉄製耳環、錫製耳環、銀製指輪

青銅器

銅鏃

茎の表現例 無茎式銅鏃、有茎式銅鏃

基部の表現例 凹基式銅鏃、平基式銅鏃、凸基式銅鏃

鏃身の表現例 柳葉式銅鏃、三角形式銅鏃、定角式銅鏃、鑿頭式銅鏃、篋被柳葉式銅鏃

- 修飾語が複数ある場合、大型・小型の別-篋被-茎の有無-基部の型式-鏃身の形状-素材-（部分）の順に記す。

例 大型柳葉式銅鏃、無茎定角式銅鏃、有茎三角形式銅鏃、有茎柳葉式銅鏃

- 部分や詳細な説明は（ ）に入れて後ろに記す。

例 銅鏃（鏃身部）、銅鏃（現存せず）

置換 青銅鏃 →銅鏃

★ 鏃の表記、その他の留意点

置換 矢尻 →鏃

貝製鏃 →貝鏃

三角鏃 →三角形鏃

銅劍

表記一般

○形銅劍□式△類（部分）

- ○形は、細形、広形、中細形、中広形など。

例 中広形銅劍、平形銅劍、有柄細形銅劍

- □式は、I 式、II 式などの分類名。ローマ数字は用いず、1 バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせる。英字は 1 バイトの小文字を使用。数字は 1 バイトのアラビア数字を使用する。

例 細形銅劍 II 式、細形銅劍 a 類、中細形銅劍 c 類

ただし、幾何学的な形による分類以外は、この原則に従わなくてもよい。

例 遼寧式銅劍、有柄式銅劍、触角式銅劍、中国式銅劍、琵琶形銅劍

- △類は、a 類、c 類などの分類名

例 平形銅劍 II 式 a 類、細形銅劍 II 式 c 類

- 部分は、一部分だけ検出したときにその部分を記す。

例 銅劍（切先）、細形銅劍（茎）、銅劍（鋒部のみ）

- 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 銅劍（型式不詳）、細形銅劍（水害の際に河中から発見）

銅矛

表記一般

○形銅矛□式△類（部分）

- ○形は、細形、中細形、広形、中広形など

例 広形銅矛、細形銅矛

- □式は、I 式、II 式などの分類名。数字はアラビア数字、英字は 1 バイトの小文字を使用。ローマ数字は用いず、1 バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせる。a 類は、b 類、a2 類などの分類名。

例 中広形銅矛 I 式、広形銅矛 II 式、中細形銅矛 a 類、中細形銅矛 a2 類、中細形銅矛 I 式 b 類

- 部分は、一部分だけ検出したときにその部分を記す。

例 銅矛（切先）、広形銅矛（上半+袋部）、細形銅矛（鋒部）、細形銅矛 II 式 a 類（切先）

- 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 中広形銅矛（水田地下げ中に出土）

置換 鋒、銚→矛

青銅製矛→銅矛

銅戈

銅矛の表記法にならう。

表記一般

○形銅戈□式△類

- ○形は、細形、広形、大阪湾型、クリス形など。

例 細形銅戈、中広形銅戈、大阪湾型銅戈

● □式は、I式、II式などの分類名。ローマ数字は用いず、1バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせ、英字は1バイトの小文字を使用。数字は1バイトのアラビア数字を使用する。■類は、a類、c類などの分類名。

例 細形銅戈I式、細形銅戈II式、大阪湾型銅戈a類、細形銅戈I式a類、細形銅戈II式b類
ただし、幾何学的な形による分類以外は、この原則に従わなくてもよい。

例 戦国春秋式銅戈、鉄戈形銅戈、無樋式銅戈

● 部分は、一部分だけ検出したときにその部分を記す。

例 細形銅戈I式a類（矛部のみ）、細形銅戈II式b類（身の一部）、細形銅戈I式b類（鋒部）

● 詳細な説明は、（ ）に入れる。（ ）内に他の語句がある場合は、説明したい部分の直後に「、」をして記す。

例 銅戈（国立博物館買い上げ）

置換 青銅戈 →銅戈

銅鐸

表記一般

銅鐸（○式銅鐸）

銅鐸（○式□区◇文銅鐸）

銅鐸（○式△式□区◇文銅鐸）

● ○式は、突線鈕1式、扁平鈕式など。

例 銅鐸（三遠式銅鐸）、銅鐸（扁平鈕1式銅鐸）、銅鐸（突線鈕2式三遠・近畿IA式銅鐸）

● □区◇文は、6区袈裟襷文、2区横帯文など。「区画」ではなく「区」を使用。

例 銅鐸（外縁付鈕1式4区袈裟襷文銅鐸）、銅鐸（菱環鈕1式2区横帯文銅鐸）、
銅鐸（変形6区袈裟襷文銅鐸）

● △式は、近畿IIA式、三遠式など。「式」は省略しない。ローマ数字は用いず、1バイトの英大文字の「I」「V」を組み合わせ、英字は1バイトの小文字を使用。数字は1バイトのアラビア数字を使用する。

例 銅鐸（突線鈕3式近畿式6区袈裟襷文銅鐸）、銅鐸（突線鈕2式近畿IA式銅鐸）、
銅鐸（福田型2区横帯文銅鐸）

● 「鱗」は漢字。ただし、埴輪の場合はひらがなで表記するので注意。

例 銅鐸（突線鈕2式銅鐸（飾り耳付鱗下端部））

鉄器

鉄鏃

茎の表現例 無茎鉄鏃、短茎鉄鏃、有茎鉄鏃

頸の表現例 無頸鉄鏃、短頸鉄鏃、有頸鉄鏃、長頸鉄鏃

鏃身の表現例 方頭式鉄鏃、尖根式鉄鏃、柳葉式鉄鏃、腸袂式鉄鏃、片刃式鉄鏃、雁股式鉄鏃、
有頸腸袂三角形式鉄鏃、細身式鉄鏃、平根式鉄鏃

● 修飾語が複数ある場合、大型・小型の別-篋被-茎の有無-基部の型式-鍔身の形状-素材-（部分）の順に記す。

例 無茎広身式鉄鍔、方頭斧箭式鍔、平根圭頭式鉄鍔、斧箭圭頭式鉄鍔、尖根鑿頭式鉄鍔、短茎広身式鉄鍔、篋被広峰鑄造腸挾三角形式鉄鍔、無茎広身式鉄鍔

● 部分や詳細な説明は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄鍔（篋代基部）、鉄鍔（茎）、鉄鍔（2号棺ほかより出土）、鉄鍔（個数不明）、鉄鍔（型式不明）

鉄矛

置換 鋒/鉞 → 矛

● 素材に「製」は不要。

例 鉄矛

● 部分は（ ）に入れて後ろにおく。

例 鉄矛（身）、鉄矛（切先）、鉄矛（石突）

鉄槍

● 素材に「製」は不要。

例 鉄槍

● 部分は（ ）に入れて後ろにおく。

例 鉄槍（石突）、鉄槍（槍先+石突）

置換 槍頭 → 槍先

★ 鉄製武器の表記全般の留意点

● つか。「把」は刀剣のみ、「柄」は刀剣以外のすべてのものに使用する。

● 刀用語の使い分け

太刀は、日本刀につながる反りのある刀

大刀は、古墳時代に見られる直刀

刃は、刃が一側縁のみのも。古墳時代後期以降。

劍は、刃が両側縁にあるもの。弥生時代から古墳時代前期。

太刀→大刀。古代の「タチ」の場合。日本刀完成以降はこの限りではない。

鉄刀

● 記述の順番は、素材-装飾-把頭の文様-把の種類-大刀-（部分）。

例 金銅装単龍環頭大刀、銀装三葉環頭大刀、鈴付銀装装飾大刀、鉄地銀象嵌振り環頭大刀

● 環頭大刀の装飾に「文」「式」はつけずに、「環頭大刀」の直前に記す。

例 鳳凰環頭大刀、単龍環頭大刀

● 部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 円頭大刀（把頭）、大刀（鏢）、装飾大刀（鞆尻金具）、大刀（足金物）、鉄刀（刀身）

● 刀剣の場合、本体は鉄製であるから、「金銅製」ではなく「金銅装」と表現する。銀装、鹿角装に

についても同様。

例	金銅装環頭大刀、銀装大刀、鹿角装短刀	
置換	鉄製大刀	→大刀
	鉄製直刀	→直刀
	直刀（大刀）/大刀（直刀）	→大刀【カテゴリ不要】
	直刀（環頭大刀+圭頭大刀）	→環頭大刀+圭頭大刀【カテゴリ不要】
	飾り大刀/装飾付大刀	→装飾大刀
	掬り環頭大刀/掬環頭大刀/掬紐状環頭大刀	→掬り環頭大刀
	蕨手直刀/蕨手刀子/蕨手鉄刀/蕨手大刀	→蕨手刀
	鐔付き直刀	→鐔付直刀【送り仮名不要】
	けづり刀/けずり刀/削り刀	→削り刀

鉄剣

- 素材に「製」は不要。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄剣、鉄剣（把部）

矢

- 素材は「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄製矢、矢（中柄）

武具

冑

冑は、近代以前のかぶと

兜は、近代以降のかぶと

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 革製冑、鉄製冑鉢、冑（小札）、冑（鍔）

- 記述の順番は、地板-結合方法-冑。地板は、横矧板、三角板など。結合方法は、鋌留、革綴など。

例 横矧板鋌留衝角付冑、小札鋌留眉庇付冑

- 鞆（しころ）は、機種依存文字であり、Unicode で 0292B1 が割り当てられているもの、鋳を使用する。

置換 横剥板 →横矧板

挂甲

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄製挂甲、挂甲（鉄製小札）、挂甲（腰札）、挂甲（草摺）

- 形式は遺物名の前に記す。

例 胴丸式挂甲、両当式挂甲

置換 小手/籠手 →籠手

肩甲/頸甲 →肩鎧/頸鎧

短甲

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 革製短甲、短甲（札甲）

- 記述の順番は、地板-結合方法-短甲。地板は、横矧板、三角板など。結合方法は、鋳留、革綴など。

例 金銅製横矧板鋳留短甲、三角板革綴襟付短甲、縦矧板革綴短甲

置換 短甲残欠/短甲破片→短甲片

馬具

鐙

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 木製鐙、銅製壺鐙、鐙（兵庫鎖）、壺鐙（吊金具）

置換 木造壺鐙 →木製壺鐙

木心鉄板貼壺鐙/木心鉄板飾壺鐙/木心鉄板被輪鐙 →木心鉄板張壺鐙

轡

置換 銜/勒/鐙 →轡【くつわの意の場合】

銜 →喰【はみの意の場合】

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄製轡、金銅製鏡板付轡、鉄製環状鏡板付轡、轡（引手）、轡（遊金）

置換 素環轡/素環鏡板付轡 →素環状鏡板付轡

轡鏡板 →鏡板

水付 →引手

鉸・カコ

- 鉸は、機種依存文字のため、かたかなでの表記を勧めてきたが、Unicode で 9278 に割り当てられており、漢字での表記を推奨する。

置換 鉸金具/鉸具 →鉸

鞍

- 素材には「製」をつける。部分は（ ）に入れて後ろに記す。

例 鉄製鞍、木製鞍、金銅製鞍、鞍（前輪）、鞍（居木）

置換 鞍骨 →鞍橋

鞍の磯金具/磯金具（鞍） →鞍磯金具

履輪 →覆輪

泥障 →障泥

釣金具 →吊金具

- 鞆（したぐら）は、機種依存文字であり、Unicode で 97C9 が割り当てられているが、「下鞍」という表記を推奨する。

面懸・胸懸・尻懸

置換 面繫 →面懸【胸懸・尻懸も同様】

鞆・シオデ

置換 しおで/四緒手/四方手 →鞆/シオデ

● 鞆は機種依存文字であり、かたかなでの表記を推奨してきたが、Unicode で 9796 が割り当てられ
とおり、使用可。

シオデ金具とシオデ座金具は別物。

雲珠

● 素材には「製」をつける。

例 金銅製雲珠、貝製雲珠

置換 鈴雲珠 →鈴付雲珠

雲珠辻金具 →雲珠金具

杏葉

● 素材には「製」をつける。

例 金銅製杏葉

置換 鈴杏葉 →鈴付杏葉

楕円杏葉 →楕円形杏葉

● 花形杏葉と花卉形杏葉は別物。

置換 杏葉（扁円形+輪宝形） →扁円形杏葉+輪宝形杏葉

金属器その他

針

● 素材には「製」をつける。

例 鉄製針、骨製針

● 送り仮名不要。

例 釣針、留針、縫針

釘

● 素材に「製」は不要。

例 鉄釘、銅釘、木釘

垂飾・耳飾ほかの飾り

● 送り仮名不要。

例 垂飾、耳飾、帯飾、貝製飾、髪飾、飾金具、弓飾

置換	垂耳飾/垂下式耳飾	→垂飾付耳飾
	犬牙垂飾	→牙（イヌ）製垂飾
	滑車状耳飾/滑車型耳飾	→滑車形耳飾
	土製品（ケツ状耳飾）	→土製玦状耳飾

玦状耳飾は通常石製のため土製の場合は前に「土製」と表記する。玦は、機種依存文字であり、かたかな表記を勧めてきたが、Unicode で 73A6 を割り当てられており、漢字表記を推奨する。

金具

- 送り仮名不要。

例 引付金具、麻引金具

置換 止金具/留め金具/止め金具→留金具

銭貨

表記一般

銭貨（○）

銭貨（○+△）

- ○や△は銭貨名。銭貨名は『国史大辞典』に依る。

例 銭貨（寛永通宝）、銭貨（六道銭+寛永通宝）、銭貨（輸入銅銭）

置換 銭/古銭/貨幣 →銭貨

寶/寶 →宝【ホウの字は「宝」を使用】

渡来銭 →銭貨（輸入銭）

- 銀銭は、銭貨名の後ろに（銀銭）をつける。

例 銭貨（和同開珎（銀銭））

鉄器、鉄製品/銅器、銅製品

- ○型鉄器/○状鉄器/○型鉄製品/○状鉄製品→○形鉄製品。「型」にはタイプ、「形」には形状という意味があるので、物の形を模した鉄製品は○形鉄製品とする。

例 毛抜状鉄器/毛抜形鉄器/毛抜き形鉄器 →毛抜形鉄器

半月状鉄製品 →半月形鉄製品

巴型銅器 →巴形銅器

植物遺存体

表記一般

植物遺存体（植物名）

植物遺存体（植物名（部分））

植物遺存体（植物名（部分、状態や状況））

- 植物名はかたかなで表記する。ただし、木材など普通漢字で表記されるものは漢字で表記する。

例 コメ、アワ、ヒエ、クリ、コウヤマキ、木材

- 部分は実、種子、核、皮など。

例 植物遺存体 (モモ)、植物遺存体 (ムギ)、植物遺存体 (モモ (種子))、
植物遺存体 (サクラ (皮))、植物遺存体 (エゴノキ属 (花粉))

● 状態や状況は炭化など。

例 植物遺存体 (堅果類 (炭化))、植物遺存体 (クルミ (炭化))、
植物遺存体 (穀類 (種子 (炭化)))、植物遺存体 (モモ (核)、土師器中に入れてあった)
ただし、植物遺存体 (種子 (クルミ+トチノミ+クリ)) という表記も可。

● 炭化米は植物遺存体 (コメ (炭化米)) と記す。

例 植物遺存体 (コメ (炭化米塊))、植物遺存体 (チマキ状炭化米塊)

置換 種 → 種子
トチ → トチノキ

● 木炭は植物遺存体とはしない。

● 建物部材は植物遺存体の表記法にならう。

例 炭化建物部材 → 建物部材 (炭化)

動物遺存体

表記一般

動物遺存体 (動物名) / 動物遺存体 (分類名)

動物遺存体 (動物名 (部分)) / 動物遺存体 (分類名 (部分))

動物遺存体 (動物名 (状態や状況)) / 動物遺存体 (分類名 (状態や状況))

動物遺存体 (動物名 (部分 (状態や状況))) / 動物遺存体 (分類名 (部分 (状態や状況)))

● 動物名はカタカナ表記。シカ、イルカ、アサリなど。獣、小動物などの表現は可。哺乳類、両生類、魚類、貝類など、普通漢字で書かれる分類名は漢字で表記する。

例 動物遺存体 (シカ)、動物遺存体 (シジミ)、動物遺存体 (獣)、動物遺存体 (昆虫 (一部))

● 部分は頭骨、鱗、歯、埋葬骨、甲羅など。ただし、動物遺存体 (頭骨 (シカ+イヌ)) という表記も可。

例 動物遺存体 (シカ (骨))、動物遺存体 (クマ (骨))、動物遺存体 (獣 (骨) + 鳥 (骨))、
動物遺存体 (ナウマンゾウ (歯牙))

● 状態や状況は炭化、化石、輸出用、劣化など。

例 動物遺存体 (小動物 (骨、化石))、動物遺存体 (ナウマン象 (歯牙、化石))、
動物遺存体 (キイロダカラ (宝貝、輸出用))

● 動植物遺存体は使用不可。動物遺存体と植物遺存体に分ける。

● 家犬は漢字で表記する。

例 動物遺存体 (家犬)

● 貝殻は、貝の名称の前につける。

例 動物遺存体 (貝殻 (アサリ))、動物遺存体 (貝殻 (巻貝+二枚貝))

● 貝類の名称はかたかなで表記する。

例 ホタテガイ、アワビ、イモガイ

置換 さんご → サンゴ
亀甲 → 動物遺存体 (カメ (甲羅))

獣骨（シカ） →動物遺存体（シカ（骨））
鳥獣骨 →動物遺存体（鳥（骨）+獣（骨））

- ト骨に用いられたと考えられる場合、カメは漢字で表記可。

例 亀甲、亀骨

参考文献

- 平井聖『日本城郭大系 別巻2』（新人物往来社、1981年）
大塚初重、小林 三郎『古墳辞典』（東京堂出版、1982年）
玉口時雄、小金井靖『土師器・須恵器の知識考古学シリーズ 17』（東京美術、1984年）
金関恕、佐原真『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術I』、『弥生文化の研究 第6巻 道具と技術II』（雄山閣出版、1985年）
奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所、1985年）
日本馬具大鑑編集委員会『日本馬具大鑑』（日本中央競馬会、1991年）
島根県古代文化センター『出雲神庭荒神谷遺跡 本文編』『出雲神庭荒神谷遺跡 図版編』（島根県教育委員会、1996年）
大川清『日本土器事典』（雄山閣出版、1997年）
国史大辞典編集委員会『国史大辞典』（吉川弘文館、1979年から1997年）
村上恭通『シリーズ日本史のなかの考古学 倭人と鉄の考古学』（青木書店、1998年）
建築用語辞典編集委員会『図解 建築用語辞典』（理工学社、1998年）
山本忠尚、ウォルターエドワーズ『和英対照 日本考古学用語辞典』（東京美術、2001年）
田中琢『考古学事典』（三省堂、2002年）
矢部良明『角川日本陶磁大辞典』（角川書店、2002年）
奈良文化財研究所『古代の地方官衙I 遺構編』（奈良文化財研究所、2003年）
文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編』（文化庁文化財部記念物課、2010年）
文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき 整理・報告書編』（文化庁文化財部記念物課、2010年）
文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』（文化庁文化財部記念物課、2013年）

4.5 詳細な表記の仕方

抄録データベースの遺跡概要、遺跡データベースの遺構概要・遺物概要を記述する際に、記載の仕方が非常に複雑なものとなってしまうことがある。表記が複雑では、検索した時に意図する情報を得られない可能性がある。こういった場合に記述方法をより良いものにするために注意すべき点について述べる。

ただ、表記が複雑にならないように気をつけることが、まず求められる。情報の詳細な記述は、それぞれの発掘調査報告書などの本文中では必要であっても、抄録では、その詳細な情報への手がかりとなる情報の簡潔な記載が重要である。データベースに格納する情報の表記と、調査機関内において保管されるべき遺跡情報一般の記録方法とは分けて議論しなければならない。

本節の記述において、例の先頭に付加している、○、△、×は、

- この表記は許容できる。ただし最善のものかどうかはわからない。
- △ この表記は避けるべきであるが、事情によっては認めることもある。
- × この表記は許容できないので、別の表記を用いるべきである。

という判断を表している。

ユニット

抄録データベースの遺跡概要では「種別」「時代」「遺構」「遺物」の4つの部分を一組とした表現を基本とし、このまとまりをユニット、各部分を属性、それぞれの内容を要素と仮称する。例えば「種別」は属性であり、「集落」はその要素の例である。

遺跡概要に関する記述においてはユニットは、先端もしくは区切り記号「/」（&H2F）に続いて始まり、終端もしくは区切り記号「/」の直前で終わる。1レコードにおける遺跡概要はひとつないしは複数のユニットによって記述される。同一レコード内においては、ユニットは原則として時代順に記述する。

盛りだくさんの情報をひとつのユニット内で記述しようとして、表記が複雑となっている場合が多いので、ユニットを分割した方がよい場合がある。どういった情報をひとまとまりとして認識し、ユニットとみなすのかの判断が大切である。発掘調査区の別でユニットを分けた方がよい場合と分ける必要がない場合とがある。

ひとつのユニットは「種別」「時代」「遺構」「遺物」という4つの属性からなり、各属性はこの順で記載し、原則的として省略しない。

- × 縄文—縄文土器
- 包含地—縄文—遺構なし—縄文土器

ただし、当該レコードの調査について説明する語句の場合、それのみを表記することも許される。例としては、

- 分布調査
- 測量調査

があげられる。これについては、遺跡概要の項目には、あくまでも発掘を伴う調査についてその内容を記述すべき、とすることも可能であろう。

分布調査は対象となる遺跡数が多いのが普通であり、他の報告と同じような記載は必要ないであろう。

測量調査は、地表に遺構が残る遺跡を対象とすることが多いので、

- 古墳—古墳—墳丘（測量調査）—遺物なし

という記述も可能であろう。

調査した位置に関する情報はユニットの区切り方として表現できることが多い。

○ 第1調査区（古墳-溝-土師器）/第2調査区（古墳-竪穴建物-土師器）

ただ、本調査区と、その一部を深掘りした場合のように、位置が階層的な場合もある。

それぞれの調査区が離れていて独立性が高いといった場合には、別々に表記することが望ましい。すなわち、遺跡データベースでは、遺跡の種別に「地区」があるので、別レコードとして表現すればひとつの「調査」の中の表記が複雑にならない。

ひとつのユニットの中において属性と属性は「-」（&H2D）でつなぐ。属性と属性はそれぞれ、まとまりとして相互に関連している。

各属性の中では要素と要素は「+」（&H2B）でつなぐ。ただ、それぞれの属性の要素は、意味において横並びの関係にある場合と、階層的関係にある場合とがある。

以下の表記では、当面の記述に関係しない属性の記述を省略することがある。

記述の詳しさ

属性それぞれにおいて記述をどこまで詳しくするか、あるいは、どこまで省略できるかは一概に決められない。データベースを作成する側からはどの程度のところで統一を図るかが大きな問題となる。これも一律の範型を示すことはできないが、遺跡データベースにおいては、レコードそれぞれが属する遺跡の階層によって当然書き分けられるべきものである。抄録データベースにおいては1レコードは1調査ないし関連性の高い一連の調査ごとに作成されるべきものであるから、問題はより単純である。抄録データベースでの記述は、遺跡データベースでのレコードの階層では、「調査」にあたることが多い。逆に言えばこのレベルでの記述はある程度詳しいものが求められる。

遺跡データベースにおいては、入力が進んでくると、ひとつの遺跡に関する情報は「個別」のもとに、まとめた形で提供し、個々の発掘調査ごとの情報は「調査」という形で入力提供することになる。これによって、「調査」においては、それぞれの調査単位で、できるだけ詳細な情報を提示し、「個別」では、現在にいたる調査研究の成果として、その遺跡の全体像を要約して示すことが理想像である。

種別の表記

種別が複数にわたる記載は避けるべきである。

△ 集落+墓

といった記載は避けて、それぞれ別々のユニットにすることが望ましい。

○ 集落/墓

ただ特に結びつきの強い種別については複数を組み合わせて表記することも考えられるので、種別の要素が取り得る値をリストとして提示し、改良を続けていく必要がある。前記の例で言えば、集落内に墓がある場合は、「集落」と記載するだけにするのかどうか、種別概念の階層性も含めて各地の類例の収集も大切である。

種別としてひとくくりになっている単語が意味の上で同一面上にあるわけではないところが分類を複雑にする要因である。

時代の表記

1 ユニットの中で時代が複数にわたる記述は避けるべきである。特に分離可能と考えられる離れた時代については、

× 縄文+平安

といった表記は避けて、それぞれ別のユニットにする。よって同じ種別であっても以下のようにする。

× 集落-縄文+平安

○ 集落-縄文/集落-平安

時代についてもその取り得る値は、地域の事情などをよく検討してリストを示す必要がある。現在用いているものを表 15 に示した。

連続したある範囲の時代をひとつのユニットに記述する場合は「+」(&H2B)を用いてつなぐ。

ただ、「弥生+古墳」と表記した場合、いろいろな意味があり得る。

- ・遺構の時期を、弥生時代から古墳時代か細かく決定できない場合、
- ・遺構の時期が長期にわたり、弥生時代から古墳時代にかけて存続している場合

が考えられる。この両者は区別すべきとも考えられるが、記述の基礎となる資料の分析がどこまで可能なのか、また分析しても区別できるような結果が得られるのかについて考慮しなくてはならない。

時間的な連続が長い場合「～」(区点番号 01-33)を用いた表記も考えられるが、この「波ダッシュ」には文字コード上の問題があり、「から」を用いる 2.11 参照。ただ、あまり長期にわたるものをつなげて記載することは避けるべきで、例えば、

× 縄文から近世

といった記載は避ける。

大溝などで埋没に長時間かかり、長期にわたる遺物を成層的に含んでいる場合はどうするか検討が必要である。また、奈良時代から残る建物の基壇のような長期にわたって存在している遺構の扱いも要検討であろう。

用語として、「前期から中期」と「前期+中期」という表現を、表す意味の違いとして使い分けることも考慮すべきである。

概要を記述するという立場にたてば、時代の極端な細分は避けることが望ましい。細分する場合の表記については、いくつかの簡略化も許容されるであろう。

記述の長さをいたずらに伸ばさないためにも、「弥生末」という表現は「弥生後期末」と同義として扱う。時代の細分が複数にわたる場合でも、「弥生前期から中期」は「弥生前期から弥生中期」を意味することとする。ただし、「弥生」であることをまず述べて、その細分を示すならば「弥生(前期から中期)」という表記の方が望ましい。これらの工夫で人が読む時には記述が簡潔となっているが、こういった記載方法で「弥生中期」と検索して情報が正しく得られるようにするには困難が予想される。

遺構の表記

遺構についてもその用語の適切なリストが示される必要がある。また表記する文字の選択が意味の差を示しているのかどうか問題になる場合がある。例えば「土坑」と「土壇」とを同一のものとしてデータベースではどちらかの表記に統一してよいのかどうか明示すべきであろう。

遺構を表記する順番は、その調査において重要度の高い順にするのか、ある程度固定した順序を定めるのが問題となる。固定した順序を用いるのであれば、地域や時代を考慮して提示しなくてはならない。

すべての遺構を記載するか否かについては個別に判断する必要がある。検出遺構がひとつのピットのみである場合はピットの記載が必要となるが、ほかにたくさん遺構が検出されていてピットの重要性が低い場合は省略もあり得る。

遺構として「包含層」という記述を加えている。これは、「遺構なし」とは区別されるべきもので、例

えば、江戸時代に形成されたと判断できる層からわずかに弥生土器が出土した場合は、

- 弥生-遺構なし-弥生土器/江戸-包含層

と記述する。

時代表記と遺構表記の関係

- 弥生後期から古墳前期-竪穴建物 3+溝 2

という表記は、

- ・ 竪穴建物も溝もすべて弥生後期から古墳前期までのどこかは決定できない場合
- ・ 竪穴建物が弥生後期で溝が古墳前期というように遺構ごとで時期が違う場合

という解釈がなりたつ。最初の場合でも、いくつかの遺構が同時存在と考えられる場合と、いくつかは同時に存在し得ない場合、どうかわからない場合とがある。特定の解釈しか許容しないのであれば、それに適した記述をしなくてはならない。

どこを時代区分の単位にするかの大枠は提示可能ではあるが、発掘調査それぞれの事情があるので、ひとつのものに固定してしまうのはかえって実態をわかりにくくするとも言える。

遺構に時代の細分が可能なものと不可能なものがある場合、例えば

- 縄文中期-竪穴建物/縄文-土坑

という表記する。この場合、土坑の中に確実に縄文中期のものが含まれており、かつ縄文時代ではあるが中期以外のものも存在することが確実であるならば

- 縄文中期-竪穴建物+土坑/縄文-土坑

と表記できる。

このように、より広い範囲のものを後ろへもってきて記述するのがわかりやすいが、交差している場合は注意が必要となる。

- 縄文中期-竪穴建物/縄文早期から後期-集石/縄文前期から後期-土坑
- 縄文早期から後期-集石/縄文前期から後期-土坑/縄文中期-竪穴建物

といった場合はその記述順序に留意する。上記2例のどちらが適切かは、検討を要する。前者は期間の終わりを基準にし、後者は期間の始まりを基準としている。遺構に対する重要性の認識にも左右される。早期から後期が、早期+前期+中期+後期を意味するのであれば、

- 縄文早期-集石/縄文前期-集石+土坑/縄文中期-竪穴建物+集石+土坑/
縄文後期-集石+土坑

とする方がわかりやすい。

遺構が複数あり、あるものが弥生時代で、別のものが古墳時代という場合、明確にできる場合は明確にすべきである。奈良時代の竪穴建物、平安時代の竪穴建物、どちらか確定できないが、奈良時代から平安時代の範囲に内の竪穴建物が検出された場合は、簡潔には、

- 奈良-竪穴建物/平安-竪穴建物

と記述できる。奈良時代か平安時代かわからない竪穴建物の帰属はどちらになろうとも、全体に影響しないからである。しかし、要素の数を限定する時はいろいろな記述法が考えられる。

- 奈良-竪穴建物 3/平安-竪穴建物 2/奈良から平安-竪穴建物 2
- 奈良から平安-竪穴建物 (奈良 3+平安 2+不詳 2)

後者の記述方法は、遺構の記述の中に時代に関する説明を入れ込むもので、実例ではかなり複雑な表記も行われている。

- △ 縄文-竪穴建物(中期後葉から末7+中期末から後期初2+後期前葉7+後期中葉1+後期後葉2+晩期前葉1)+土坑(前期から晩期)236+土器埋設13+集石8

遺構における遺物の出土という観点を重視するので、遺物の記述中に遺構について記載することは避けるべきである。

- △ 調査区-弥生-弥生土器(竪穴建物+包含層)+石鏃(包含層)

と記載するのではなく、

- 調査区-弥生-竪穴建物(弥生土器)+包含層(弥生土器+石鏃)

とすべきである。

遺物の表記

遺物の用語として取り得る値のリストというものも提示できれば提示すべきである。また、遺構と同じく遺物の表記順も問題となる。遺物の場合は、ある程度固定した表記順が適切かもしれない。例えば、土器、石器、金属器、木器、その他の順である。ただ常に素材による大区分ごとに遺物をくくるのは煩雑なので推奨すべきではないと考える。

- △ 石器(石鏃+石錐+石庖丁)

- 石鏃+石錐+石庖丁

ただ、場合によっては大きなくくりがあった方がわかりやすい場合もある。

- 石器(石鏃+石錐+石庖丁ほか)

遺物のカテゴリーと細分の表記については

- 弥生土器(壺+甕+高杯)

のように、細分を()に入れるのがわかりやすいが、常に細分が必要かどうかも含めて検討が必要である。土器で言えば器種が不明な破片の場合などである。

カテゴリーにも階層性がある。土器といった大きなくくりもあるし、陶磁器の産地ごとにまとめてそれぞれについて器種を記すといへん煩雑になる。

- 青磁(小皿+大皿+鉢+椀)+白磁(小皿+大皿+鉢+椀)

といった表記の場合は「定数」の定義をして、

- 青磁(Mset1)+白磁(Mset1)//Mset1=小皿+大皿+鉢+椀

とすることもできるようにするのも一案である。この時、白磁にのみ小壺が加わるならば、

- 青磁(Mset1)+白磁(Mset1+小壺)//Mset1=小皿+大皿+鉢+椀

とする。

遺物の量の表記する場合は、例えば「弥生土器2」とあった場合、2個体なのか2片なのか、あるいは2箱なのかはどこかで示す必要がある。

全体として遺物の表記をどこまで細分するかも、個々の場合によって考える必要がある。古墳の副葬品の場合と、河川堆積物出土品の場合とを同一には扱えないからである。

時代表記と遺物表記の関係

遺物の一部についてその時代を限定できる場合に、

- △ 縄文-縄文土器(前期)+石鏃

- 縄文前期-縄文土器/縄文-石鏃

のような表記が考えられる。後者の表記の方が、要素の混交が生じていない分、わかりやすい。

型式に関する記述をどこまで行うかも検討を要する。型式名によって時期区分が判る場合では、遺物の記載の中に時期の表記を埋め込む必要はない。

- △ 縄文土器（前期、諸磯 a 式）
- 縄文土器（諸磯 a 式）

時期を明示しないとあいまいになる場合どのように埋め込むかは検討課題である。

- 縄文土器（早期条痕文+晩期条痕文）
- 縄文土器（条痕文（早期）+条痕文（晩期））
- △ 縄文土器（条痕文（早期+晩期））

最後の例は、条痕文土器ということだけでひとくくりにしてしまうもので、所属時期を重視するという立場からは薦められない記述方法である。

遺構表記と遺物表記の関係

- 縄文-竪穴建物-縄文土器+石器

とあった場合は、「縄文土器」と「石器」は必ずしも「竪穴建物」から出土していなくてもかまわないものとして記述している。先に述べたようにそれぞれひとまとまりとして相互に関連しているとみなすので、縄文時代について、遺構としては「竪穴建物」があり、遺物としては「縄文土器」と「石器」があるという解釈である。

時期を限定できる包含層がある場合は

- 縄文-包含層-縄文土器

とし、

- 縄文-遺構なし-縄文土器

と区別するのが望ましい。

ある時期の遺構しかないが、遺物は多岐にわたる場合、例えば、

- △ 中世-土坑-縄文土器+弥生土器+陶磁器

という記述を容認するか

- 縄文-遺構なし-縄文土器/弥生-遺構なし-弥生土器/中世-土坑-陶磁器

しか認めないかは検討が必要である。遺物のすべてが時代を決定できるわけではないことも考慮しなくてはならないし、遺物ごとの出土量にもよるであろう。

要素の交錯

通常ユニットは 種別-時代-遺構-遺物 の順で記載する。しかし、この順番のみで全ての遺構や遺物の状況が明確に表せるわけではない。

特定の遺構から出土した遺物を表記したい場合は、遺構要素に付属して遺物要素を記述するやり方が考えられる。

- 古墳-古墳（円墳、主体部（-鉄刀+鉄鏃）+周溝（-土師器））

またこのやり方では詳細に記述しようとする大変煩雑になってしまう。古墳に複数の主体部がある場合それぞれの出土遺物を記述すると、上の例と同じように、遺構要素の中に遺物を記述すると、

- △ 古墳-古墳前期-前方後円墳（主体部 2（A主体部（青銅鏡 2+青銅製・鉄製の武器 72+工具 5+ガラス製小玉 4）+B主体部（鉄製品 3））+土坑 2（土坑 1（鉄製品 1）））-

古式土師器（二重口縁壺+鉢+高杯）+鉄製品+青銅製品+ガラス製小玉

のようになり、遺構要素中の遺物情報の方が詳しく、同じ遺物についてのまとめにあたる情報が繰り返して遺物要素の中に現れている。

逆に遺物要素の記述中に出土遺構に関する情報を盛り込む表記も考えられ、

- 古墳-古墳前期-前方後円墳（主体部2+土坑2）-古式土師器（二重口縁壺+鉢+高杯）
+A 主体部（青銅鏡2+青銅・鉄製の武器72+工具5+ガラス製小玉4）
+B 主体部（鉄製品3）+土坑1（鉄製品1）

といった表記になる。この場合には、遺物要素中に個々の遺構に関する情報が出現し複雑であることに変わりはないものの、全体の記述が遺構、遺物の順であるからよりわかりやすい。

副葬品の出土状況は重要な情報であるが、すべてを発掘報告書抄録データベースや遺跡データベースに盛り込めるわけではない。遺構と遺物との関係が極めて重要で煩雑でもかまわないから記載するとするか、抄録であることを考えて簡略なものにとどめるのかは、場合によって判断すべきであろう。

簡略な表記というのは、例えば2基の竪穴建物が検出され、それぞれから須恵器と土師器が出土し、かつ竪穴建物以外からも須恵器と土師器が出土している場合、精密には

- 古墳-竪穴建物2（1号住居（-須恵器+土師器）+2号住居（-須恵器+土師器））-須恵器+土師器

と記載すべきであるが

- 古墳-竪穴建物2-須恵器+土師器

という記載にとどめるといったものである。

表記が複雑になりすぎるのを防ぐためにも

- 1 調査ごとにレコードを分けて登録するなど、1レコードの表記を簡潔にする。
- 2 遺跡種別などの記述にあたっては、内容をユニットに分解して記載する。
- 3 あまりに詳細なデータは情報源にあたってもらうことを基本とする。

といった諸点に留意して、記述を進めていかななくてはならない。また、同一の記載部分について縮約した記述を行うことも考慮すべきである。

4.6 要素の補足

特定の属性には、その属性について記述している部分にタグを埋め込んで記述することを試みている。タグは種類を限り、記述は統一するよう努めている。

〈立地〉 例 〈立地〉近畿の最高峰（1914.9m）。
〈保存状況〉 例 〈保存状況〉大半破壊。
〈現状〉 例 〈現状〉墓地。

といったタグは以前独立したフィールドが設けられていた情報に関する記述であることを示している。これは、いたずらにフィールド数を増やしてデータベースの構造を複雑にすることを避けるためである。

また、奈文研版遺跡データベースでは、〈文字〉というタグも用意している。これは、記述の中から出土文字資料に関する情報を抜き出すもので、木簡、墨書土器、文字瓦、鏡の銘文などの文字情報が報告書抄録といった、まとめにあたる情報源で記載されている場合に、遺物の種類を超えた検索が将来できるよう記載している。

例を上げると、鏡の銘文では、

方格規矩鏡（銘帯「〈文字〉青同作竟明大好長生宜子孫〈/文字〉」 鈕座「〈文字〉子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥〈/文字〉」、完形 18.4cm、1969 年発掘。

木簡の文字では、

戦国-天目+石臼+木簡（「〈文字〉あふや〈/文字〉」）。

といった記述となる。